

大阪府埋蔵文化財調査報告2012-1

招提中町遺跡IV・九頭神遺跡II

招提中町遺跡IV・九頭神遺跡II

—府営枚方東牧野住宅建替第5期工事及び周辺道路整備事業に伴う発掘調査—

大阪府埋蔵文化財調査報告2012-1

大阪府教育委員会

大阪府教育委員会

招提中町遺跡IV・九頭神遺跡II

—府営枚方東牧野住宅建替第5期工事及び周辺道路整備事業に伴う発掘調査—

大阪府教育委員会

序 文

大阪府教育委員会が実施してまいりました府営枚方東牧野住宅建て替え事業に伴う招提中町遺跡および九頭神遺跡の発掘調査は、平成9年度の第1次に始まり、平成22年度及び平成23年度に実施した第5次建て替え事業および外周道路整備工事に伴う発掘調査を以って、すべて完了するに至りました。

これまでの発掘調査においては、弥生時代前期から中期の集落跡、墓域がみつかっており、堅穴住居あるいは方形周溝墓などの遺構や、弥生時代の遺物が多数出土していますが、今回は弥生時代後期初頭の堅穴住居、そして中・近世の耕作地など、これまでとは異なる時代の遺構がみつかり、招提中町遺跡及び九頭神遺跡が弥生時代全般、そして中・近世におよぶ複合遺跡であったことが判明しました。

最後になりましたが、調査に際しまして地元住民の方々および関係各位に、多大なご協力をいただきましたことに深く感謝いたしますとともに、今後とも文化財保護行政に一層のご理解とご協力を賜りますようお願いいたします。

平成25年3月

大阪府教育委員会事務局

文化財保護課長 荒井 大作

例　　言

1. 本書は、府営枚方東牧野住宅建替第5期工事及び周辺道路整備事業に先立って大阪府教育委員会が実施した、枚方市東牧野町に所在する招提中町遺跡IVおよび九頭神遺跡IIの発掘調査報告書である。

2. 調査は、大阪府住宅まちづくり部の依頼を受けた大阪府教育委員会が、文化財保護課調査第一グループの担当で、平成22年度（第5次）および平成23年度（第6次）として実施した。

第5次調査（平成22年7月～平成22年12月）、副主査　横田　明

（平成23年1月～平成23年3月）、主査　岩瀬　透

第6次調査（平成23年5月～平成23年10月）、副主査　横田　明

遺物整理作業は文化財保護課調査管理グループ主査三宅正浩・副主査藤田道子が担当して、平成24年度に実施した。

3. 調査の実施にあたっては、大阪府住宅まちづくり部住宅整備課をはじめ、枚方市教育委員会、地元の府営枚方東牧野住宅自治会など、多くの方々のご協力を得た。

4. 調査に際して写真測量を実施した。その業務は平成22年度は株式会社ケーディーエム、平成23年度は株式会社アジア航測に委託して実施し、撮影フィルムは受託者が保管している。

5. 本書に掲載した現場写真は主に調査担当者が撮影したが、遺物写真の撮影は有限会社阿南写真工房に委託した。

6. 本調査の調査番号は、10036、10076（第5次）、11012（第6次）である。

7. 本書の編集は岩瀬、岡林孝之、藤井信之が行い、執筆は各地区の調査担当者および岡林、藤井、西山昌孝が行った。

8. 発掘調査・遺物整理、および本書作成に要した経費は、全額を大阪府住宅まちづくり部が負担した。

9. 本報告書は300部作成し、一部あたりの単価は798円である。

凡　　例

1. 本書で用いた座標値は世界測地系である。また、標高は東京湾準潮位（T.P.）で示した。北は座標北を示す。なお、X・Y座標値の単位はmで表示している。
2. 挿図（図面）の遺物番号と写真図版の遺物番号は一致しているが、図版にのみ掲載しているものは、この限りではない。

目 次

序 文

例 言

凡 例

目 次

第1章 調査の経過と調査の方法	岩瀬 透・横田 明	1
第1節 調査の経過	横田	1
第2節 調査の方法	岩瀬	2
第2章 遺跡の位置と環境	藤井信之	4
第1節 遺跡の位置		4
第2節 既往の調査		5
第3章 調査の成果	岩瀬・横田・岡林孝之・藤井・西山昌孝	9
第1節 第5次調査(平成22年度)	岩瀬・岡林・藤井	9
第1項 招提中町遺跡		9
第2項 九頭神遺跡		27
第3項 第5次調査出土遺物		37
第2節 第6次調査(平成23年度)	横田・西山	41
第1項 招提中町遺跡		41
第2項 第6次調査出土遺物		45
第3節 まとめ	岩瀬	46

挿 図 目 次

第1図 招提中町・九頭神遺跡調査区配置図	3
第2図 調査区位置図	4
第3図 既往の調査	5
第4図 第1区・第2-1区基本層序	7
第5図 第1区・第2-1区遺構平面図	11
第6図 井戸36006 平・断面図	14
第7図 井戸36036 平・断面図	14

第 8 図	井戸 36005 平・断面図	15
第 9 図	土坑 36038 平・断面図	16
第 10 図	落ち込み 36007 平・断面図	17
第 11 図	溝 36008 平・断面図	18
第 12 図	土坑 36017 平・断面図	18
第 13 図	溝 36018 平・断面図	19
第 14 図	第 3 区 基本層序	21
第 15 図	第 3 区 第 4 面遺構平面図	23
第 16 図	ピット 76082 平・断面図	24
第 17 図	土坑 76070 平・断面図	24
第 18 図	第 2-2 区・4-1 区 第 1 面遺構平面図	25
第 19 図	土坑 36043 平・断面図	27
第 20 図	溝 36044 平・断面図	27
第 21 図	土坑 36048 平・断面図	28
第 22 図	第 4-1 区 基本層序	29
第 23 図	第 4-2 区 基本層序	31
第 24 図	第 4-2 区 第 1 面遺構平面図	33
第 25 図	第 4-2 区 谷 76004 下面検出遺構 平・断面図 (76005 ~ 8)	34
第 26 図	竪穴住居 76009 平・断面図	35
第 27 図	第 5 次調査(平成 22 年度)出土遺物実測図 1	38
第 28 図	第 5 次調査(平成 22 年度)出土遺物実測図 2	39
第 29 図	第 5 区 基本層序模式図	41
第 30 図	第 5 区 第 1 面遺構平面図	43
第 31 図	土坑 11019 断面図	44
第 32 図	土坑 11021 断面図	44
第 33 図	土坑 11070・土坑 11071 平・断面図	44
第 34 図	第 6 次調査(平成 23 年度)出土遺物実測図	46

図 版 目 次

- 図版 1 招提中町遺跡遠景(南西より)
 　　第 5 次調査 招提中町遺跡第 1-1 区北半部(南より)
 図版 2 第 5 次調査 招提中町遺跡第 1-2 区中央部(西より)

- 招提中町遺跡第1-2区南半部（北より）
図版3 招提中町遺跡第1-3区南端部（北より）
招提中町遺跡第1-4区東半部（北より）
図版4 招提中町遺跡第1-4区中央部（東より）
招提中町遺跡第1-4区西半部（南より）
図版5 招提中町遺跡第2-1区中央部（南東より）
招提中町遺跡第2-1区西半部（東より）
図版6 招提中町遺跡第2-1区井戸36036（南より）
招提中町遺跡第2-1区土坑36038（南東より）
図版7 招提中町遺跡第3-1区土坑76028断面（南より）
招提中町遺跡第3-5区（西より）
図版8 第5次調査 九頭神遺跡遠景（北東より）
九頭神遺跡第2-2区（東より）
図版9 九頭神遺跡第2-2区（西より）
九頭神遺跡第2-2区土坑36048（南より）
図版10 九頭神遺跡第4-2区グリッド4～9（北より）
九頭神遺跡第4-2区南半東側溝（西より）
図版11 九頭神遺跡第4-2区グリッド29～32弥生時代後期遺構面（東より）
九頭神遺跡第4-2区グリッド29～31竪穴住居76009（東より）
図版12 九頭神遺跡第4-2区竪穴住居76009炉穴76010（西より）
九頭神遺跡第4-2区竪穴住居76009遺物出土状況（東より）
図版13 第6次調査 招提中町遺跡4-2区南半部北端（西より）
招提中町遺跡第5-4区北半部（北より）
図版14 招提中町遺跡第5-4区北半部部分（北より）
招提中町遺跡第5-5-1区（南より）
図版15 招提中町遺跡第5-5-1区南半部部分（北より）
招提中町遺跡第5-5-1区土坑12070、12071（西より）
図版16 招提中町遺跡第5-5-3区（西より）
招提中町遺跡第5-2区（西より）
図版17 出土遺物（1） 第5次調査招提中町遺跡出土
図版18 出土遺物（2） 第5次調査九頭神遺跡出土
図版19 出土遺物（3） 第5次調査九頭神遺跡出土
図版20 出土遺物（4） 第5次調査九頭神遺跡出土
図版21 出土遺物（5） 第5次調査九頭神遺跡出土・第6次調査招提中町遺跡出土

第1章 調査の経過と調査の方法

第1節 調査の経過

本報告書で報告する発掘調査成果は、大阪府住宅まちづくり部による府営枚方東牧野住宅（第5期）建て替え工事および外周道路整備工事に伴う発掘調査として実施されたものである。

昭和40年代以降、高度経済成長の影響により大阪府下の各地で多数の府営住宅が建設されたが、現在ではそれらの住宅建物の老朽化が進行しており、相次いで建て替え工事が計画・実施されている。

枚方市内に所在する東牧野住宅でも、土地の有効活用・住環境改善などの目的により、老朽化した住宅が順次耐火・耐震構造の高層共同住宅に建て替えられることとなった。当該用地は約80,800m²にも及び、平成9年度から計画・実施された建て替え事業は、第5期工事を以て終了した。

以下、これまでの協議や調査の経過を簡略に振り返る。

枚方東牧野住宅一帯は、前述の如く埋蔵文化財包蔵地内にあたることから、建て替え事業に先立ち文化財保護課と大阪府建築部住宅建設課（当時）はその取り扱いについて協議してきた。まずは当該地での遺構・遺物の有無、遺構深度の確認等を目的にして、平成8年3月に試掘調査を実施した結果、弥生時代中期～中世にかけての遺構・遺物を確認するに至った。地表から遺構面までの深度が極めて浅く、住宅建設時の盛り土を除去した時点で遺構面が露出する部分も見られたため、住宅建設による破壊のみならず、工事施工の際の重機による搅乱や付帯工事による損壊も考慮する必要があった。そのため、第1期建て替え工事については、対象地全域の15,000m²について全面調査する必要があると判断されるに至った。

第1期工建て替え事に伴う第1次調査は、平成10年8月～平成12年3月の期間を費やして実施され、弥生時代中期の集落域および墓域、古墳時代前期の集落域などが検出された。第1次調査の対象地は、全域が招提中町遺跡に含まれる。

第2期建て替え工事に伴う第2次調査は、平成15年6月～平成16年3月の期間を費やして実施された。第2期建て替え工事は、予め対象地に盛り土を施すことになったため、調査は住棟部分と埋管部分に限定した約8,300m²を対象として実施し、弥生時代中期・平安時代・中世などの集落域が検出された。第2次調査の対象地は、全域が招提中町遺跡に含まれる。

第3期及び第4期建て替え工事に伴う第3次調査は、平成17年5月～平成19年2月の期間を費やして実施された。本体工事や付帯工事による損壊が対象地の全域に及ぶため、約11,000m²の全域を対象に実施し、古墳時代前期・平安時代の集落域を検出した。第3次・第4次調査の対象地は、全域が招提中町遺跡に含まれる。

第5期建て替え工事に伴う第4次調査は、平成19年7月～平成20年2月の期間を費やして実施された。調査は住棟建設部分約4,300m²を対象とし、弥生時代中期の墓域が検出された。第5次調査の対象地は、全域が九頭神遺跡に含まれる。

枚方東牧野住宅では、これまで住宅の高層・集約化を図った結果、敷地の北側に残地が生じることとなつたため、大阪府はこの残地を売却することとし、第5期建て替え工事で住棟建設とともに売却予定地の外周道路整備を図ることになり、文化財保護課と住宅整備課が協議し、住棟建設部分の未調査地とともに、外周道路設置部分の一部を対象に第5次及び第6次調査を実施することで合意した。第5次調査は平成22年7月～平成23年3月、第6次調査は平成23年5月～10月の期間を費やして実施された。第5次・第6次調査の対象地は、招提中町遺跡及び九頭神遺跡の両方に含まれる。

第2節 調査の方法

第5次調査および第6次調査の対象地は、ともに道路の新設あるいは拡幅部分で、調査区の形状は、東西方向あるいは南北方向の細長いトレンチである。そのため調査区を横断する既存の水路等を境界として分割し、順次調査を進める方法を探った。

掘削は、現況道路の整地層や旧住宅建設および解体に伴う整地層および旧耕土を重機により除去し、それ以下を人力でおこなつたが、かなりの範囲で包含層は存在せず、整地土直下が地山の黄褐色系の粘土となつていていた。包含層掘削および遺構検出・掘削後に航空写真測量で遺構面の図化をおこない、調査終了後に掘削土を流用して重機で埋め戻した。

調査区の設定については、年度ごとに調査番号を与えた。この調査番号は、本府教育委員会文化財保護課が実施する発掘調査に年度を通じて与えられるもので、本調査については、平成22年度が10036および10076、平成23年度が11012である。この番号は本調査および整理作業すべてに用いている。

調査区名は年度ごとに実施順に番号を付したが、一つの調査区を分割した時には第2-1区のように枝番を付した。

航空写真測量等の平面図は、世界測地系の座標値を基準として、調査区ごとに作成した。また、遺物が多数出土した遺構については、その出土状況図を航空写真測量の基準点を基に、個別に作成した。



第1図 招提中町・九頭神遺跡調査区配置図

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置

招提中町遺跡及び九頭神遺跡は、大阪府枚方市東牧野町・招提中町・招提平野町に所在する遺跡で、招提中町遺跡は弥生時代から中世にかけて、九頭神遺跡は縄文時代から近世まで続く複合遺跡である。

当遺跡が所在する枚方市は大阪府の東北部に位置し、北は淀川を境に高槻市・三島郡島本町と、東は京都府八幡市・京田辺市と、南は交野市・奈良県生駒市と、西は寝屋川市と接している。当市内を流れる主な河川は、船橋川・穂谷川・天野川があり、いずれもほぼ北西方向に流れ淀川に合流する。これらの山地・丘陵・河川に囲まれた中で、船橋川と穂谷川に挟まれた標高約20～30mを測る交野台地の北西端付近、穂谷川の右岸に当遺跡は位置している。

当遺跡の周辺の地形は山地・丘陵・台地・低地の4つに区分される。山地は東大阪市に主峰を置く生駒山地の北縁が枚方市に達する。丘陵は生駒山地によって隆起した大阪層群を主体とするものであり、穂谷川以北を男山丘陵、天野川下流西方を枚方丘陵と呼称される。台地はこの丘陵の間に所在し、標高30～70mの高位段丘、標高30m前後の中位段丘に分けられる。低地は天



第2図 調査区位置図

野川以北で、淀川左岸及び淀川の支流である船橋川・穂谷川・天野川の両岸に並行して小規模に見られる。天野川以南では、寝屋川市・門真市・守口市・四條畷市・大東市にかけて大規模に広がる淀川の堆積作用によって形成された沖積地である。

第2節 既往の調査

府営枚方東牧野住宅建て替え工事に伴う調査は、招提中町遺跡と九頭神遺跡の2箇所を並行して行なった。

第1次調査（招提中町遺跡）は平成10・11年度に行なった。この時の調査では、弥生時代前期においては大量のビット、土坑墓を検出した。遺物は壺・甕・鉢の土器、石鏃・大型蛤刃石斧の未製品・砥石などが出土した。弥生時代中期では竪穴住居、方形周溝墓、土坑墓、土器棺墓を検出した。遺物は壺・甕・鉢・壺蓋・高坏・石鏃・打製石劍・石包丁などが出土した。古墳時代ではほとんどが前期の遺構で、ビット、土坑の他に竪穴住居、土坑墓を検出した。遺物は古式土師器・砥石などが出土した。また、中期の土坑からは須恵器が出土している。飛鳥時代では竪穴住居4棟をはじめとして土坑、溝、ビットなどを検出した。奈良時代では包含層から少量の遺物が出土したが遺構は検出できなかった。平安時代では掘立柱建物7棟、土坑、区画溝、ビットなどを検出した。遺物は須恵器・土師器・黒色土器・瓦器椀・軒瓦・青磁・緑釉陶器・砥石などが



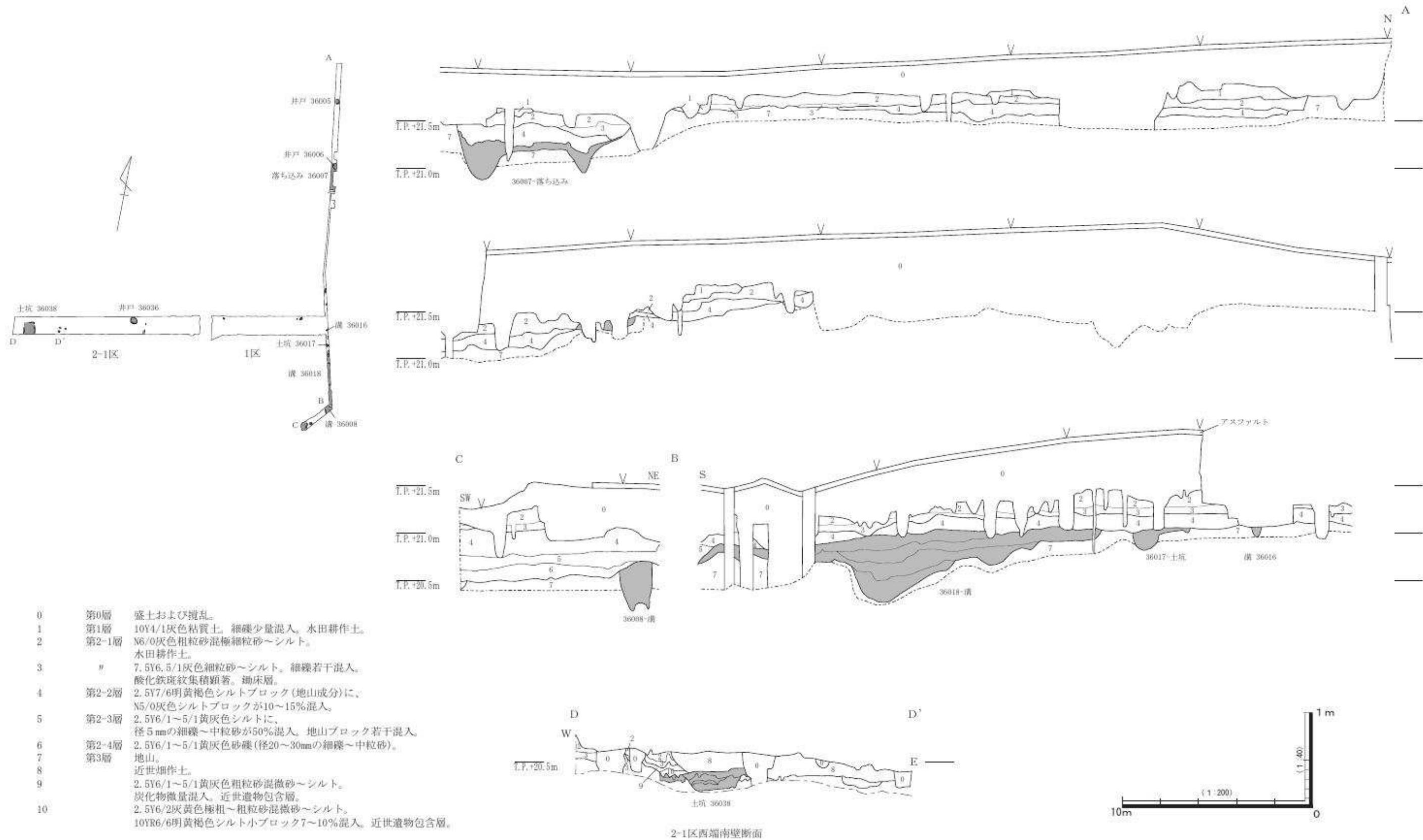
第3図 既往の調査

出土した。中世では掘立柱建物、土坑墓、ピットなどが検出された。遺物は瓦器椀・白磁などが出土した。

第2次調査（招提中町遺跡）は平成15・16年度に行なった。この時の調査では、弥生時代においては円形堅穴状遺構、土坑、溝、ピットなどを検出した。遺物は甕・壺・鉢・甕蓋・勾玉・石鎌・石包丁などが出土した。古墳時代では方形堅穴住居9棟、土坑、溝、ピットなどを検出した。遺物は須恵器・古式土師器・土師器顎などが出土した。古代から中世では掘立柱建物30棟、土坑、ピットなどを検出した。遺物は土師器・瓦器・白磁・須恵器・軒平瓦などが出土した。

第3次調査（招提中町遺跡）は平成17・18年度に行なった。この時の調査では、古墳時代前期においては外周溝を伴う堅穴住居2棟、その他堅穴住居5棟、土坑、溝、ピットを検出した。遺物は土師器の壺・甕・鉢・高坏・手焙型土器などが出土した。平安時代では掘立柱建物2棟、焼土坑、土坑、溝、ピットなどを検出した。遺物は土師器片・瓦などが出土した。中世では掘立柱建物2棟、土坑、溝、ピットを検出した。遺物は土師器・瓦器椀などが出土した。

第4次調査（九頭神遺跡）は平成19年度に行なった。この時の調査では、弥生時代においては方形周溝墓3基を検出した。そのうち1基の周溝からは周溝内埋葬とみられる土坑を検出した。遺物は広口壺・サヌカイト剥片などが出土した。古代では谷、溝、ピットなどを検出した。遺物は須恵器片が出土した。中世では溝、区画溝、井戸、掘立柱建物1棟などを検出した。遺物は土師質小皿・瓦器椀・白磁・青磁などが出土した。



第4図 第1区・2-1区基本層序

第3章 調査の成果

第1節 第5次調査（平成22年度）

第1項 招提中町遺跡

1. 第1区・第2-1区

基本層序

第0層（第4図1）

府営住宅造成時の盛土（搅乱埋土を含む）で、調査区全域に認められる。層厚は0.2m～0.6mを測る。地盤高は調査区北東端がT.P.+22.4m、南東端が21.5m、南西端が20.8mで、多少の起伏はあるものの、概ね北東側から南西側へと下がる傾向を示す。これは旧地形を反映していると考えられ、同様の傾向は下位層にも認められる。

第1層（第4図2）

近・現代耕作層である。第0層による削剥を受けており、残存状態は不良で、調査区北半で部分的に認められる。灰色粘質土に細粒砂礫が少量混入するグライ土で、水田耕作土と考えられる。層厚は0.2mを測る。

第2層（第4図3～6）

近世の水田耕作層および整地土である。層厚は0.2～0.5mを測り、4層に細分できる。2-1層（耕作土。鋤床層を含む。2・3）と2-2層（整地土。4）は搅乱や第1層による削剥を受けて断続的に欠失しているものの、調査区のほぼ全域に分布することが確認されている。2-1層上面の残存高は、調査区北東端がT.P.+21.8m、南東端が21.2m、南西端が20.6mである。

2-3層（5）と2-4層（6）は、相対的に低い地形において局所的に確認されている。断面所見によれば、2-3層は耕作土、2-4層はその基盤成形を意図した整地土と解釈され、上位2層に対し、古い段階の耕作単位であると推測される。

近世耕作活動による削平は第3層（地山）にまで及ぶため、調査区周辺の既往調査で報告されている中世以前の遺構面とその基盤層は確認されていない。第2層中から出土している土師器片や須恵器片によって、それらの存在が示唆されるに留まる。なお、一部の検出遺構の最終堆積層には、層位的見地から近世以前に帰属すると考えられる土層が存在するが、普遍的な連続性に乏

しいため、ここでは遺構埋土と捉え、基本層序には加えなかった。

第3層（第4図7）

当調査区の地山である。搅乱や近世耕作活動により全面的に削剥を受ける。中位段丘堆積物の風化層と考えられ、黄橙色から橙色を帯びるシルトを基調とし、所々で下位の砂礫層が露出する。砂礫層は径20～30mmまでの礫を主体とし、部分的に顕著な赤色化を示している。第3層上面の残存高は、調査区北東端がT.P.+21.7m、南東端が20.5m、南西端が20.5mである。

なお、1区東西トレーニチ、2-1区においても北側壁面を土層観察用断面として記録作業を行ったが、大部分において、搅乱による破壊が地山にまで及んでいたため、断面図の掲載は割愛した。

ただし、このうち比較的良好に残存していた2-1区西端の南壁の一部について、断面図を抜粋した。第4図8、9、10は、いずれも部分的に確認された土層であるため、基本層序には加えなかった。第4図8は、基本層序第2層の上位に位置する。近世の遺物を包含し、近代以降の遺物は確認されていない。水田土壤層とは異なる層相から、近世以降の畑作土と考えられる。転作や二毛作による農地利用の変化が推測される。第4図9、10は基本層序第2層の下位、土坑36038の上位に挟在する近世遺物包含層である。いずれの土層からも近世遺物細片を主として少量採集したが、本報告では8から瓦質の皿（第27図15）、9から須恵器壺の破片（第27図18）のみを図示した。

検出面（第5図）

前述のように、当調査区において基本土層として認知できたのは、地山を除けば、第1層と第2層のみである。調査では、第0層除去後、第1層を掘削した段階、2-1層を掘削した段階、2-2層以下を掘削した段階を検出面とし、各々第1面、第2面、第3面と呼称して記録作業を行った。以下、各検出面の概略を述べる。

第1面

現代耕作土（第1層）とその関連遺構埋土を掘削した面である。近世水田面に該当する。検出遺構は井戸36006、井戸36036、および近世水田である。

2基の井戸は第1層の直下から水田耕作土を穿鑿していることが層位的に確認されており、水田よりも新しい時期の所産であることが判明している。時期の特定は困難であるが、近代以降の遺物や埋土の混入が確認されないことから、ここでは近世に帰属する遺構として取り扱った。

水田については個別遺構の節で述べる。



第5図 第1区・2-1区 第3面遺構平面図

第2面

近世耕作土(2-1層)を掘削した面である。整地土(2-2層)の上面に該当する。鋤溝と見られる数条の溝のほか、特に検出できた遺構はなかった。このことから、整地土は遺構面を構成するものではなく、専ら耕作土の基盤層として機能したものと判断される。

第3面

第2層を完掘した面である。地山面に該当する。ここでは近世水田の加工面と、削平を受けながらも残存した各時代の遺構が混在した状態で検出された。そのうち、近世の遺物を含み、耕作活動との関連が希薄な一群を水田以前の近世遺構として捉えた。これらには井戸36005、土坑36038などがある。一方、埋土が近世遺構とは異なり、少なくとも近世遺物を含まない一群を、近世以前の遺構として分類した。これらには落ち込み36007、溝36008、溝36016、土坑36017、溝36018などがある。後者については、出土遺物が皆無に近く、具体的な時期を特定することはできなかった。

検出遺構

検出遺構は近世とそれ以前との2時期に大別される。近世は水田とその前後の3時期に細別される。内訳は以下の通り。

1. 近世水田以後の近世遺構 井戸36006、井戸36036
2. 近世水田とその関連遺構 近世水田区画、鋤溝(第2面検出)
3. 近世水田以前の近世遺構 井戸36005、土坑36038等
4. 近世以前の遺構 落ち込み36007、溝36008、溝36016、土坑36017、溝36018等

1. 近世水田以後の近世遺構

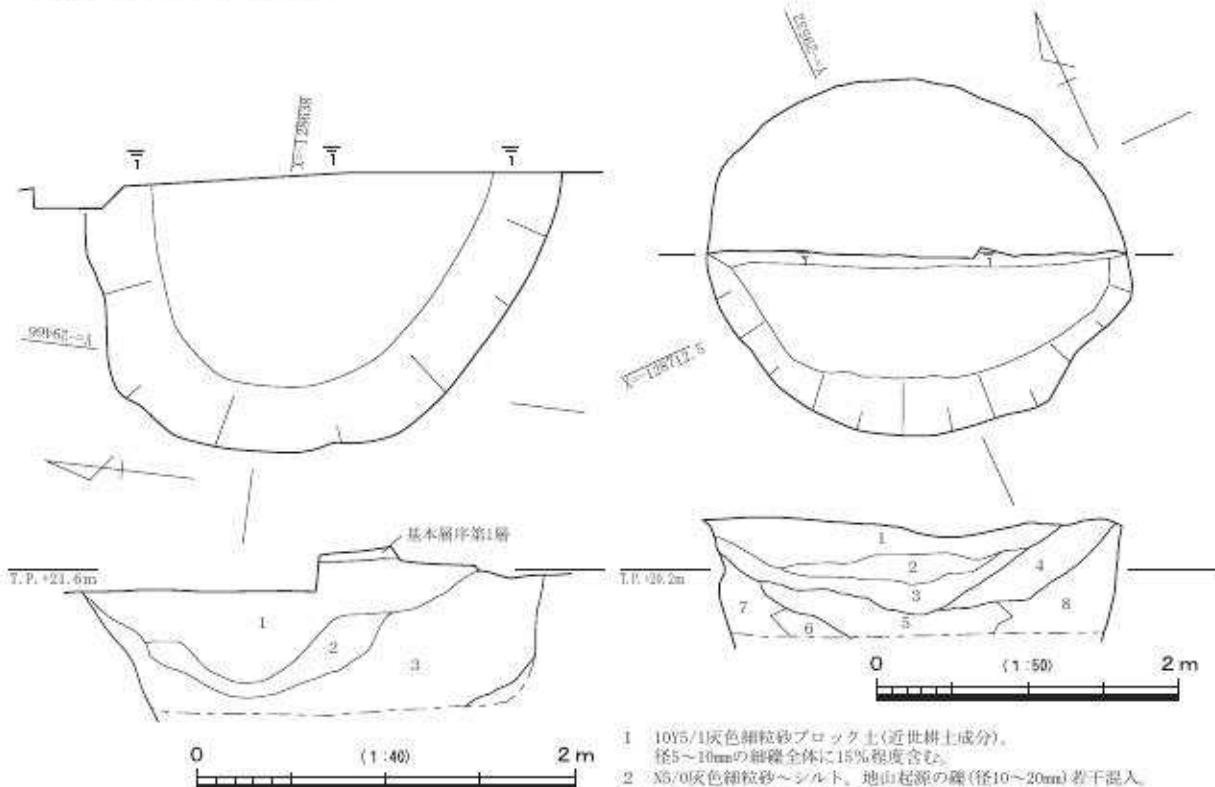
井戸36006(第6図)

1-1区中央で検出した素掘りの井戸である。半分近くが東側調査区外へ延びるが、平面形状は直径約2.5mの円形を呈すると推定される。湧水と崩落によって完掘を断念したため、深さは確認できなかった。掘削限界の深さは約0.8mである。掘り込みは第1層の直下から認められ、近世水田面と落ち込み36007を穿鑿する。

埋土は3層を確認した。埋土1は灰色粗～中粒砂混シルトに、明黄褐色シルトブロックが60～70%混入する混淆土である。水田耕作土と地山との掘削残土を起源とする埋め立て土と考えられる。埋土2は黄灰色中粒砂混シルトで、落ち込み36007埋土起源のブロックである。埋土3は灰白色粗粒砂に、明緑灰色シルトブロックが50%混入する混淆土である。どちらも地山成分で、

地山掘削残土を起源とする埋め立て土と考えられる。3層ともに、井戸放棄後の埋め立て土である。

遺物は出土していない。



埋上1 7.5V5/1-6/1灰色シルト(組へ中粒砂少量混じる。近世耕土成分)に、
2.5V7/6明黄褐色シルトブロック(地山成分)が60~70%混入。
埋上2 2.5V5/1黄灰色シルト(中粒砂若干混じる。007落ち込み埋土成分)。
埋上3 5V7/1灰白色粗粒砂に、10G7/1明緑灰色シルトブロックが50%混入
(ともに地山成分)。

第6図 井戸 36006 平・断面図

- 1 10Y5/1灰色細粒砂ブロック土(近世耕土成分)。
径5~10mmの細粒全体に15%程度含む。
- 2 X5/0灰色細粒砂ヘシルト。地山起源の礫(径10~20mm)若干混入。
- 3 10Y5/1灰色シルト。地山起源の礫(径10~20mm)若干混入。
腐植全体的に混入。
- 4 10BG4.5/1暗青灰色中~細粒砂。地山起源の礫(径10~20mm)少量混入。
- 5 10Y4/1灰色シルト。地山起源の礫(径10~20mm)若干混入。
- 6 10Y4/1灰色中~細粒砂。腐植全体的に混入。
- 7 矽(径5~30mm。地山成分)。肩崩れ。
- 8 矽(径5~30mm。地山成分)。肩崩れ。

第7図 井戸 36036 平・断面図

井戸 36036(第7図、図版6)

2-1区中央付近で検出した素掘りの井戸である。北壁断面にかかる一部を残して、ほとんどが搅乱による削剥を受けており、地山面で検出した。平面形状は直径約2.8 mの円形を呈する。湧水と崩落とによって完掘を断念したため、深さは確認できなかった。掘削限界の深さは約0.8 mである。近世水田面を穿鑿する。

埋土は8層を確認した。埋め立て土である埋土1を除くと、埋土2以下は自然堆積土および肩崩れによる二次堆積土である。埋土6には多量の腐植が含まれ、植生が繁茂していたことが推測されることから、井戸はこの段階で既に機能していなかったと考えられる。埋土3にも腐植が顕著で、一定期間、開口状態にあったことを示している。このことから、井戸は廃絶後、段階的に埋積したものと見られる。

遺物は陶器碗の破片が1点のみ出土している。

2. 近世水田とその関連遺構

近世水田遺構（第4図）

調査区全域に分布する水田である。本来の水田面は搅乱や第1層による削剥を受けており、残存状態が悪く、有意義な平面情報を獲得するには至らなかった。畦畔も確認できなかった。

2-1層は灰色粗粒砂混微粒砂～シルトの耕作土である。床土（鋤床層）とその直下には、場所により、酸化鉄斑紋集積が顕著に見られる。

遺物は土師器（第27図16、17）、陶器、染付、丸瓦（第27図12）などの破片が出土している。

2-2層は明黄褐色シルトブロック（地山成分）に、灰色シルトブロックが10～15%混入する混淆土である。水田区画と耕作土基盤整地を目的として、人為的に敷設された加工層と考えられる。層下面是階段状の断面形を呈していることから、北東から南西へと下がる自然地形を削り出し、また、残土を用いて、嵩上げや凹凸の地均しをすることで、階段状の水田区画を整備したものと推測される。

遺物は須恵器、土師器、瓦器、陶器、磁器（第27図10）、瓦などの破片が出土している。

2-3層は1区南端のT.P.+20.8m以下で確認した。層厚は0.2m。黄灰色シルトに、径5mmの細礫～粗～中粒砂が50%、地山ブロックが若干混入する。攪拌土と見られ、耕作土であると考えられる。層位的に2-1層よりも古い段階に帰属する。

遺物は出土していない。

2-4層は黄灰色の砂礫（径20mmの細礫～粗～中粒砂）である。2-3層の基盤となる整地土と考えられる。

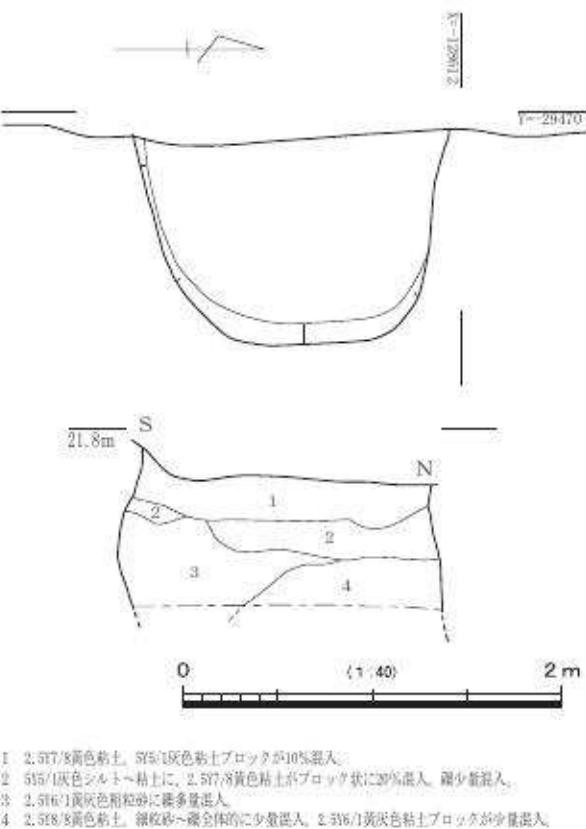
層下面から陶器底部片が出土している。

近世水田に伴うとみられる鋤溝は数条を確認した。幅は25～30cm、深さは5cm前後を測る。延長方向はほぼ南北を示す。埋土は水田耕作土と同様の成分である。

3. 近世水田以前の近世遺構

井戸36005（第8図）

1-1区北端で検出した井戸である。半分近くが西側調査区外へ延びるが、平面形状は直径約1.6mの円形を呈すると推定される。湧水と崩落とによって完掘を断念したため、深さは確認

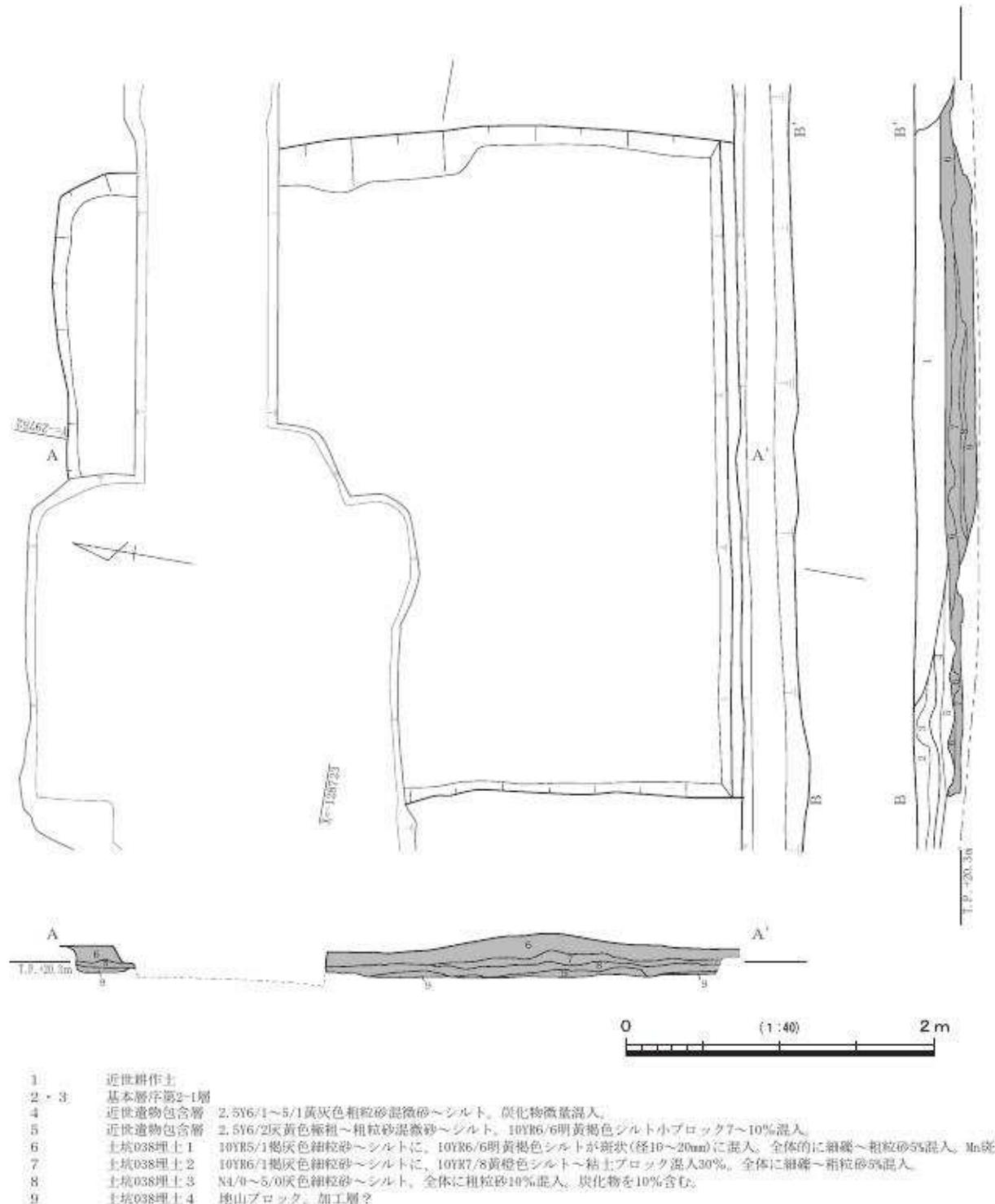


第8図 井戸36005 平・断面図

できなかった。掘削限界の深さは約 0.6 m である。

埋土は 4 層を確認したが、いずれも井戸放棄後の埋め立て土と考えられる。

遺物は埋土 1 から平瓦の破片が 1 点のみ出土している。



第9図 土坑 36038 平・断面図

土坑 36038(第9図、図版6)

2-1区西端で検出した土坑である。長辺4.7m、短辺4.3mで、一部が南側調査区外にかかるが、平面形状は南北辺がやや長い長方形を呈すると推定される。断面形状は西側にテラス状の平坦部をもつ二段落ちである。肩部の立ち上がりは直立に近く、テラス部の深さは0.1m、最深部は0.28mを測る。長辺の主軸方向は北北西-南南東を示す。竪穴住居の可能性が考慮されたが、主柱穴は検出されず、埋土3の数か所から染付、擂鉢片が出土するに及び、近世の所産と判断された。耕作関連遺構の可能性が推測できるが、詳細は不明である。

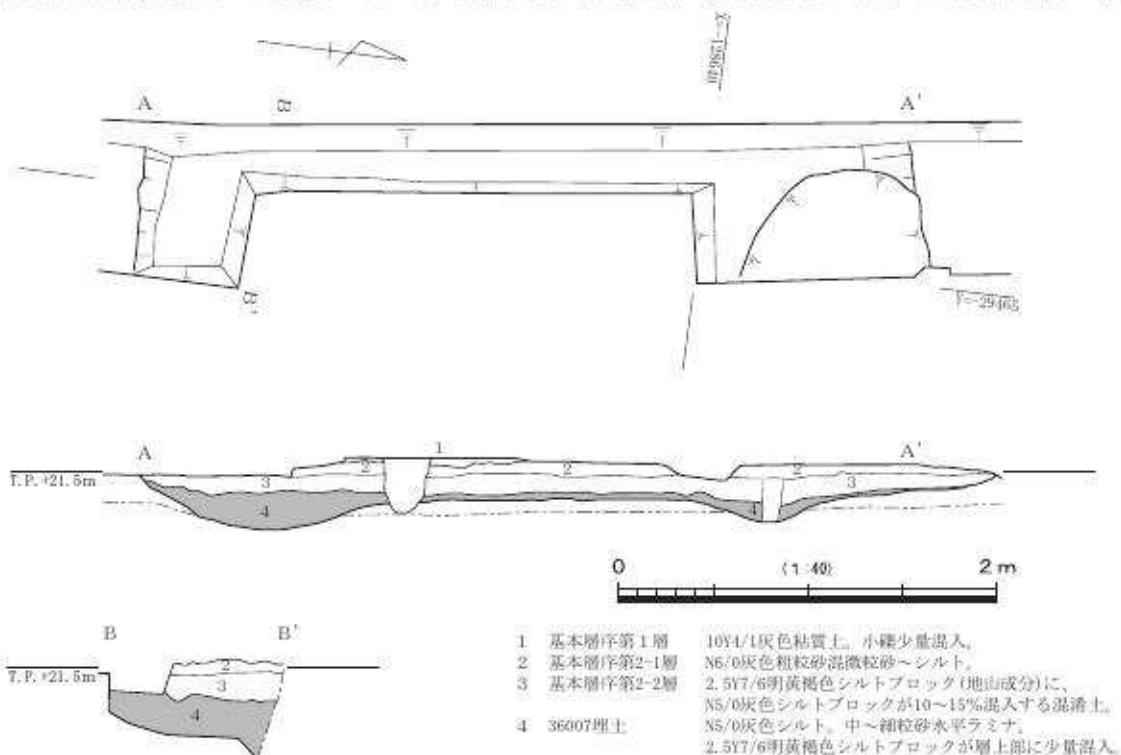
埋土は4層が確認された。埋土1、埋土2は細礫～粗粒砂混じり褐灰色細粒砂～シルトを基調とし、径10～20mmの地山シルトブロックが30%前後混入する。攪拌土、あるいは埋め立て土といった人為的な成因が考えられる。埋土3は粗粒砂混じりの灰色細粒砂～シルトで、機能時の堆積層と考えられる。炭化物細片を比較的顕著に含むが、機能面に被熱痕跡は認められなかった。埋土4は地山成分のブロック土で、加工層と見られる。

遺物は須恵器、土師器、瓦器、陶器、擂鉢、染付の破片が出土している(第27図・図版17)。

4. 近世以前の遺構

落ち込み 36007(第10図)

1-1区中央付近で検出した落ち込みである。検出範囲は南北10.5m、東西1.7m、深さ0.4mを測る。東西調査区外へと延びており、全体的な平面形状・法量ともに不明である。底面の形



第10図 落ち込み 36007 平・断面図

状は下端付近が中心部に対して凹んでおり、丸みを帯びた台形を呈する（南北断面）。また、東側から西側へと緩く立ち上がっていることから、検出範囲は落ち込みの西肩部付近に該当すると考えられる。

埋土は灰色シルトで、一部に中～細粒砂の平行ラミナが認められる。緩流～滞水下での自然堆積土と見られ、機能時は滞水状態にある水溜め状の遺構であったと推測される。

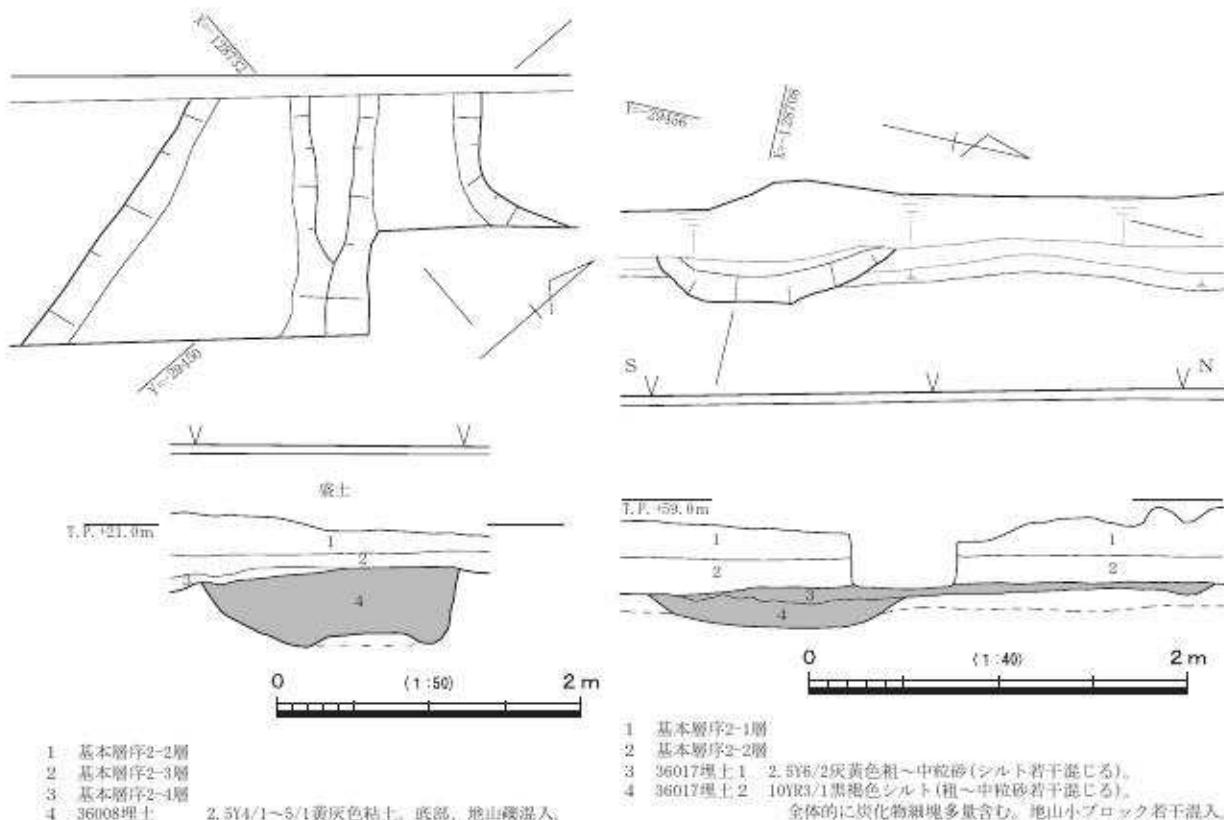
遺物は平瓦あるいは瓦質土器と見られる破片が1点のみ出土している。

溝 36008(第11図)

1-3区北東端で検出した溝である。幅約1.8～3.5mで、最深部は深さ0.5mを測る。

埋土は黄灰色粘土で、底部に地山成分の礫が混入する。

遺物は出土していない。



第11図 溝 36008 平・断面図

溝 36016

1-2区中央で検出した溝である。残存長0.5m、幅0.4m、深さ約0.2mを測る。埋土は10YR5/3にぶい黄色粗粒砂混シルト（地山成分）に、10YR3/1黒褐色シルトブロックが5～7%混入する。土師器の羽釜（第27図1）が出土している。

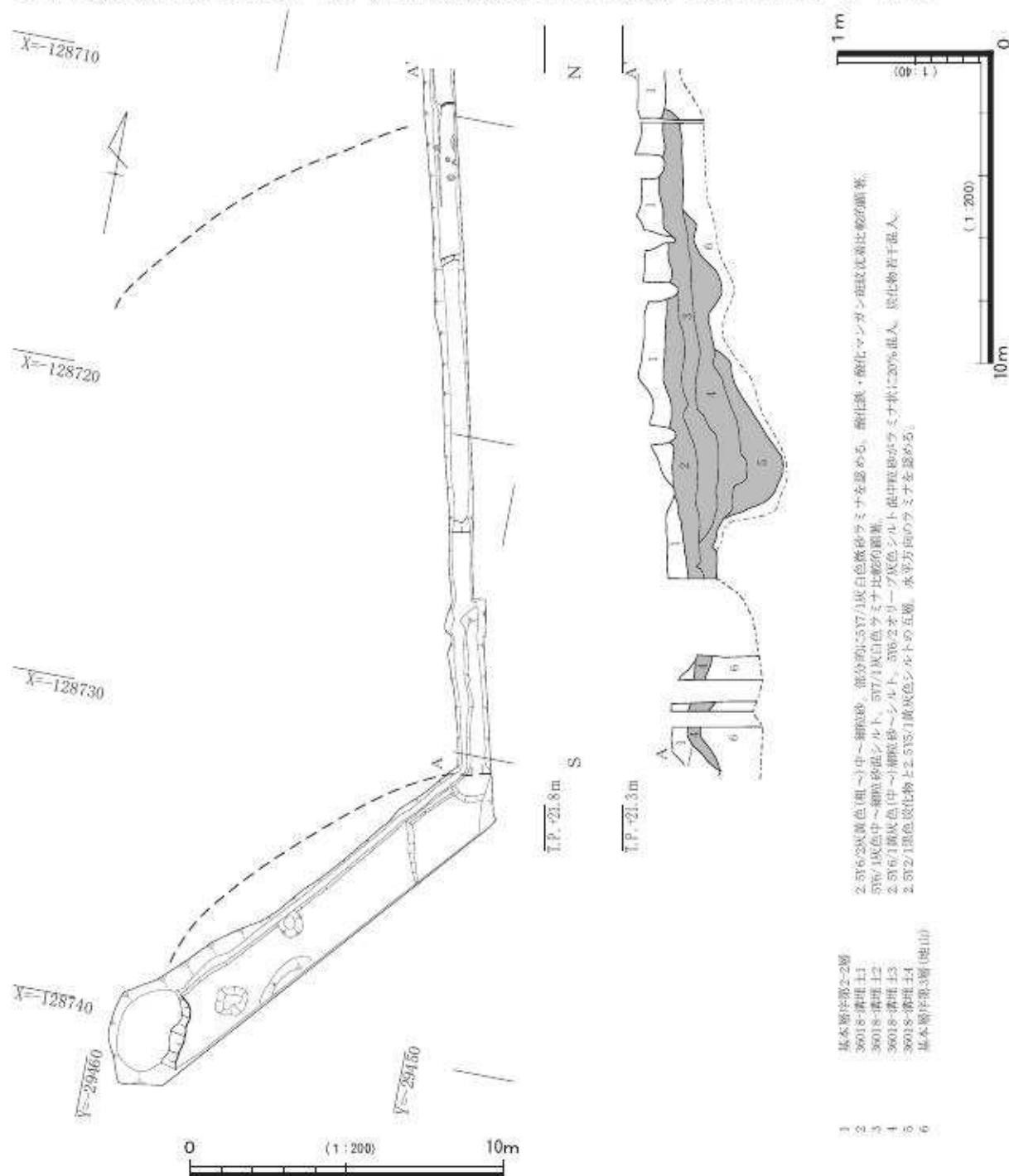
土坑 36017(第12図)

1-2区中央で検出した土坑である。半分以上が西側調査区外に延びる。検出範囲は南北1.3m、

第12図 土坑 36017 平・断面図

東西 0.3 m の円弧状を呈する。深さは 0.3 m である。

埋土は 2 層を確認した。埋土 1 は灰黄色の粗～中粒砂で、シルトが若干混じる。土坑の輪郭を大幅に逸脱する分布範囲を示していることから、遺構埋土というよりは、土坑埋没後に周辺を覆った自然堆積層の残存部分という方が実態に近い。近世耕作層以前の、いわゆる遺物包含層の可能性もあるが、遺物は出土していない。埋土 2 は黒褐色シルトで、粗～中粒砂が若干混じる。全体的に炭化物の細塊を多量含む。土坑の機能層と考えられる。近接する溝 36018 埋土 4 からも多量の炭化物が検出されているが、層位的な関連は不明である。遺物は出土していない。



第13図 溝 36018 平・断面図

溝 36018(第13図)

1-2区南半から1-3区南西端にかけて検出された溝である。地形の傾きから考えて、北東から南東へと流下していたと判断される。断面形状は広いテラス部をもつ二段落ちを呈する。最大幅21m、テラス部の深さは0.15m～0.3m、流心部は幅6.5m、深さ0.7mを測る。

埋土は4層を確認した。埋土1は灰黄色中～細粒砂を主体とする。部分的に灰白色微粒砂平行ラミナを認める。自然堆積層と考えられる。遺物は須恵器の破片が出土している。埋土2は灰色の中～細粒砂混じりシルトで、灰白色微粒砂の平行ラミナが比較的顕著に認められる。自然堆積層と考えられる。遺物は土師器の破片が出土している。埋土3は黄灰色細粒砂～シルトを主体とし、オリーブ灰色シルト混じり中粒砂が平行ラミナ状に20%、炭化物が若干混入する。自然堆積層と考えられる。遺物は出土していない。埋土4は多量の炭化物と黄灰色シルトの互層で、流心部を埋積する。遺物は土師器の破片が出土している。

2. 第3区

基本層序(第14図)

第0層

府営住宅造成時の盛土で、調査区全域に認められる。層厚0.1～0.6mを測る。地盤高は調査区東端がT.P.+22.1m(3-1区東端)、中央付近がT.P.+22.5m(3-3区西端)、調査区西端がT.P.+22.4m(3-5区西端)程度である。3-1区は他の地区より0.4m程地盤が低くその下の耕土、床土に関しても同様である。3-3区以西に関しては南東に向かってごく緩やかに上がっており、下位層においても同様の傾向にある。

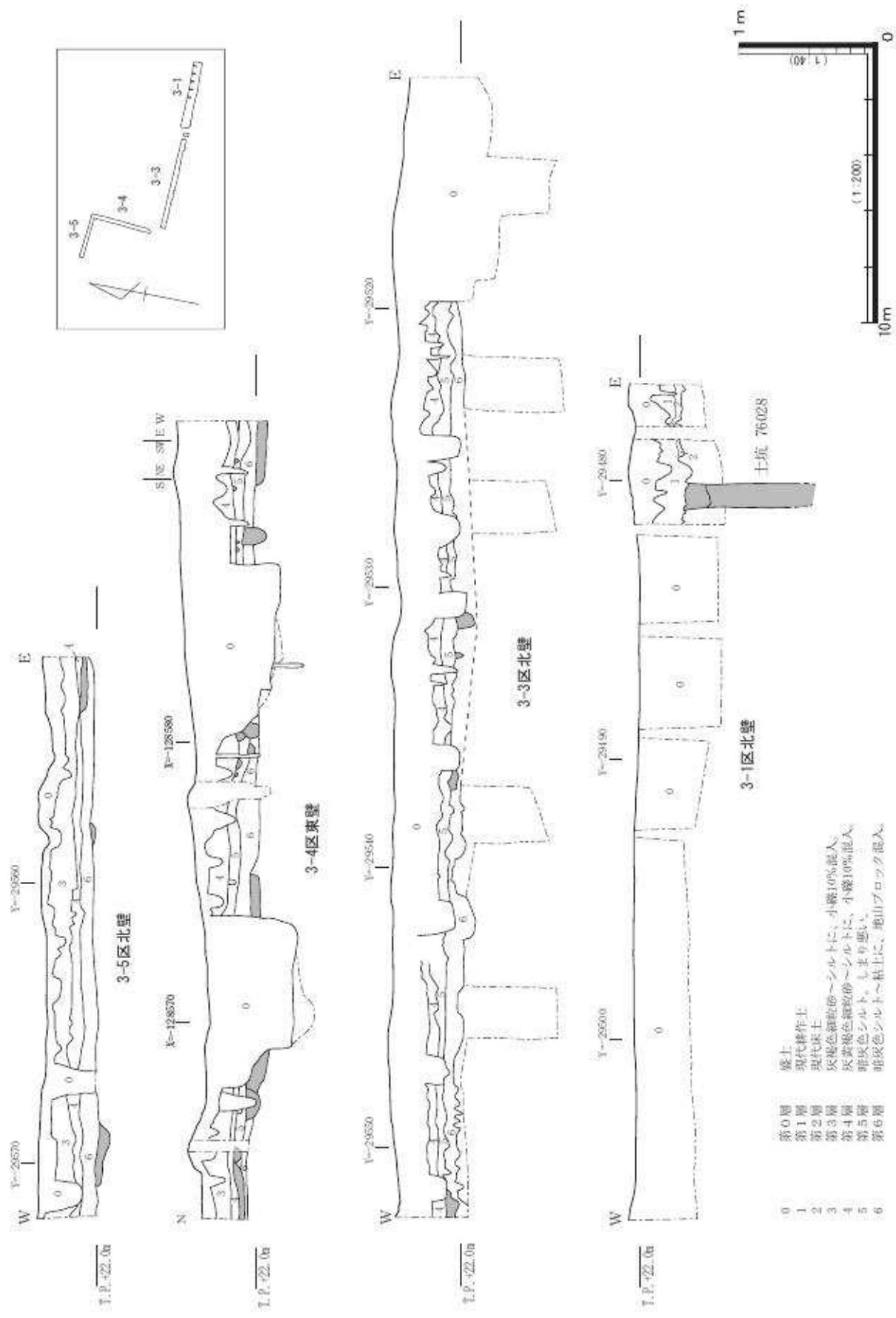
第1層

近、現代の耕作土である。3区においては3-1区の一部のみで確認できる。第0層による削平を受けており残存状態は不良で3-1区の東端部でしか認められない。残存高はT.P.+21.9mを測る。暗青灰色シルトで水田耕作土と思われる。層厚は0.06～0.08mを測る。

第2層

上部の耕作土に対する床土である。3-1区の東端部のみで確認できる。残存高はT.P.+21.76mを測る。灰黄色シルトに黄色粘土ブロックが混入した土で層厚は0.06～0.08mを測る。

第3層



第14図 第3区 基本層序

3-5 区全域及び 3-4 区の北端部のみで確認される層である。近世以降の耕作土と思われる。残存高は西端部では T.P. +22.38 m、東端部では T.P. +22.2 m を測る。灰褐色シルト～細粒砂に小礫が 10% 混入した土で層厚は 0.1 ~ 0.2 m を測る。

第 4 層

3-1 区以外の調査区全域で、数箇所途切れるところがあるが概ね全域で確認できる層で、近世以降の耕作土と思われる。残存高は 3-5 区西端部では T.P. +22.2 m、3-4 区中央付近で T.P. +22.36 m と一旦高くなり、3-4 区南端部では T.P. +22.2 m、3-3 区東端部では 22.14 m まで下がる。灰黄褐色シルト～細粒砂に小礫が 10% 混入した土で層厚は 0.1 ~ 0.15 m を測る。この層の上面が第 1 面であるが、3-3 区では上部を第 0 層の削平を受け、第 1 面を遺構面としては確認できなかった。

第 5 層

3-3 区、3-4 区のみで確認できる層で近世以降の耕作土と思われる。暗褐色シルトでしまりの悪い土である。残存高は 3-4 区中央付近では T.P. +22.24 m と高くなるが概ね T.P. +22.14 m を測る。層厚は 0.1 ~ 0.2 m を測る。この層の上面が第 2 面である。

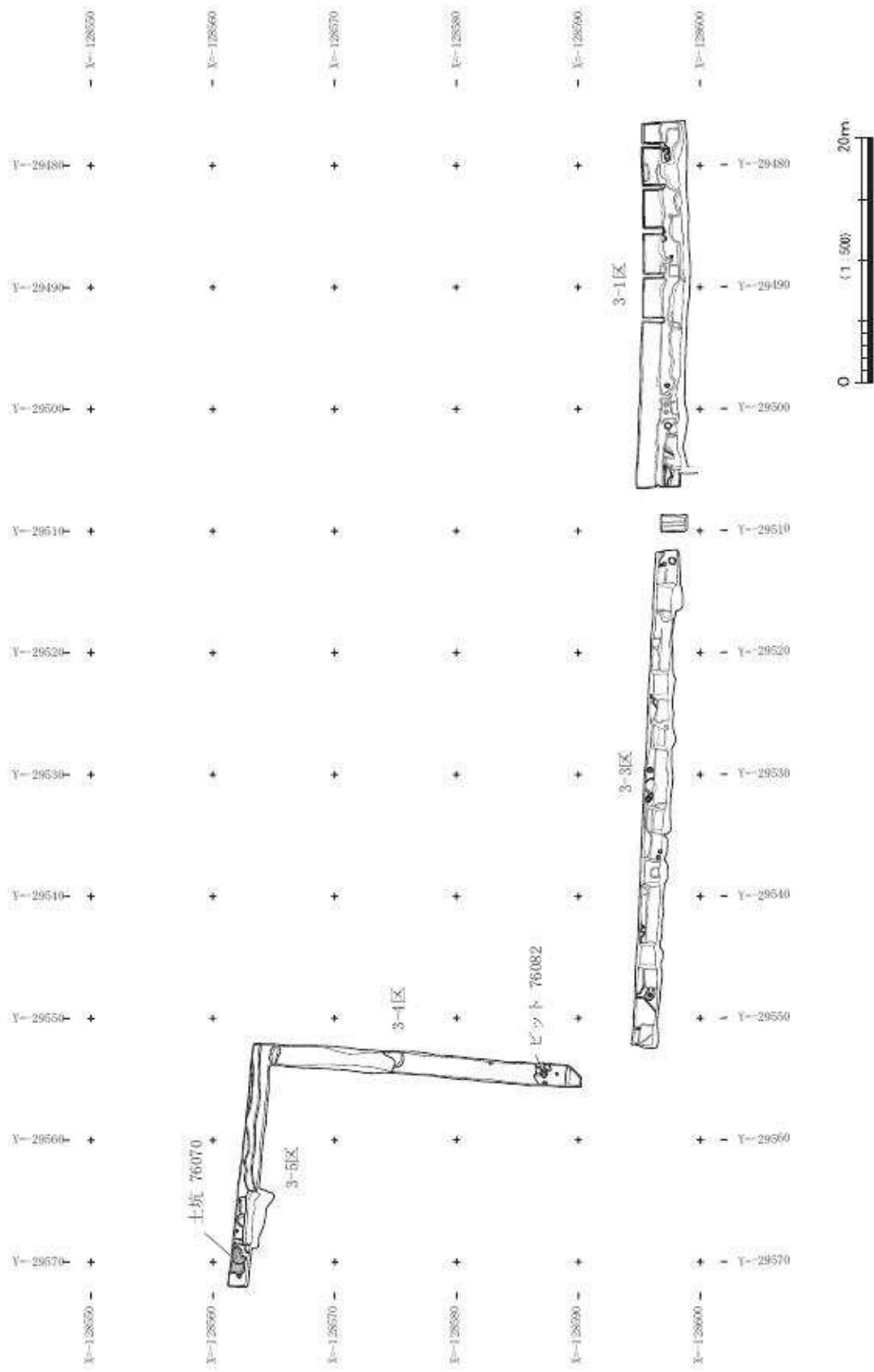
第 6 層

3-1 区以外の調査区全域で確認できる層で出土遺物から中世以降の耕作土と思われる。黒褐色シルト～粘土に地山ブロックが混入する。残存高は 3-5 区西端部では T.P. +22.12 m、3-4 区中央部では T.P. +22.14 m、3-4 区南端部では T.P. +22.06 m、3-3 区東端部では T.P. +22.06 m を測る。層厚は 0.15 ~ 0.3 m を測る。土師器片が出土した。この層の上面が第 3 面である。第 6 層下面が地山である。地山面が第 4 面である。

検出遺構

3-1 区

当区においては第 2 面と第 4 面のみ検出できた。そのうち遺構を検出できたのは第 4 面のみであった。遺構は、近世以降のものと思われる土坑 76028 を検出した。GL-1.0 m 程度まで掘削したが崩壊の危険が出たため、そこで掘削を取りやめた。平面プランの北半分は調査区外にあり、直径 90 m 程度になると思われる。埋土は、上層が灰褐色粘土に小礫を含んだ土、下層は暗灰色粘土で炭化物を微量含んだ土である。遺物は確認できなかった。その他、ピットが 17 個、溝が 1 条検出されたが、いずれも遺物は確認できなかった。



第15図 第3区 第4面遺構平面図

3-2 区

当区においては第2面と第4面を検出したがいずれの面でも遺構を検出できなかった。

3-3 区

当区においては第2面と第4面を検出した。第2面では溝1条のみ検出した。

第4面ではピット12個、土坑5基、溝1条を検出した。

3-4 区、3-5 区

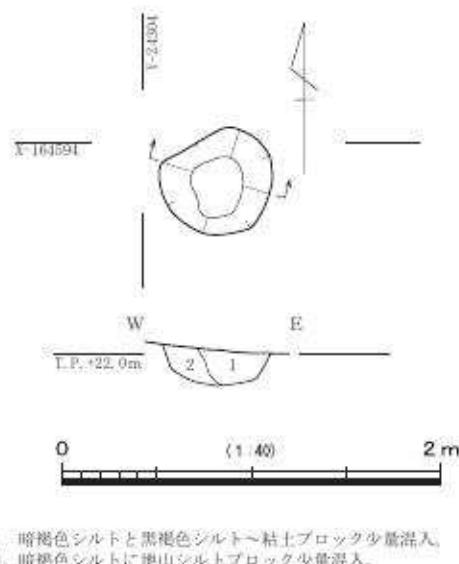
当区においては第1面～第4面の、4面の遺構面を検出した。そのうち第1面では、主に3-5区において近世以降の東西方向に伸びる鋤溝を8条検出した。遺物は土師器片が数点出土した。また、第2面では近世以降の東西方向に伸びる鋤溝を15条、ピットを1個、土坑を1基検出した。遺物は出土しなかった。そして第3面では、3-4区のみで遺構を確認できた。溝5条、ピット4個検出し、このうちピット76067より磁器片が出土した。さらに第4面ではピット8個、土坑6基、溝3条を検出した。主だった遺構は以下のとおりである。

ピット 76082(第16図)

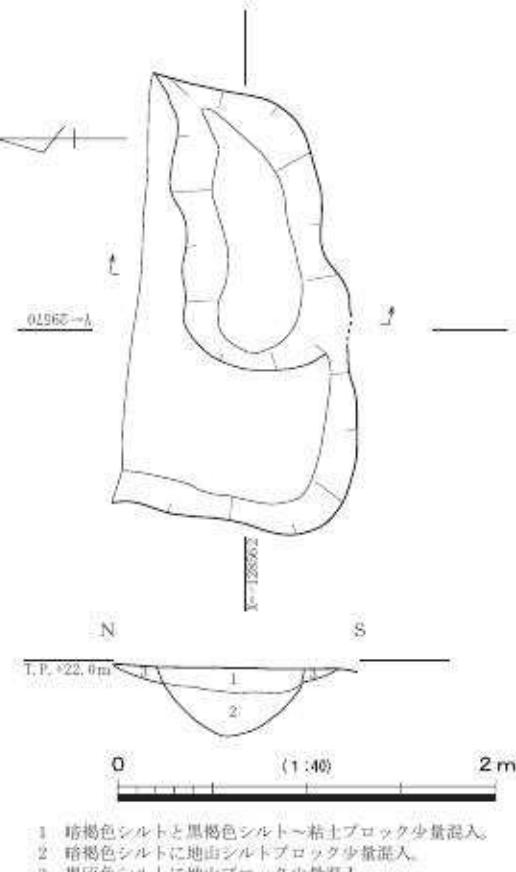
3-4区の南端部で検出した。平面プランは円形で、直径0.57m、深さ0.19mを測る。埋土は2層に分かれ、1層は黒褐色シルトで2層は黒褐色シルトと地山土の互層である。遺物は出土しなかった。

土坑 76070(第17図)

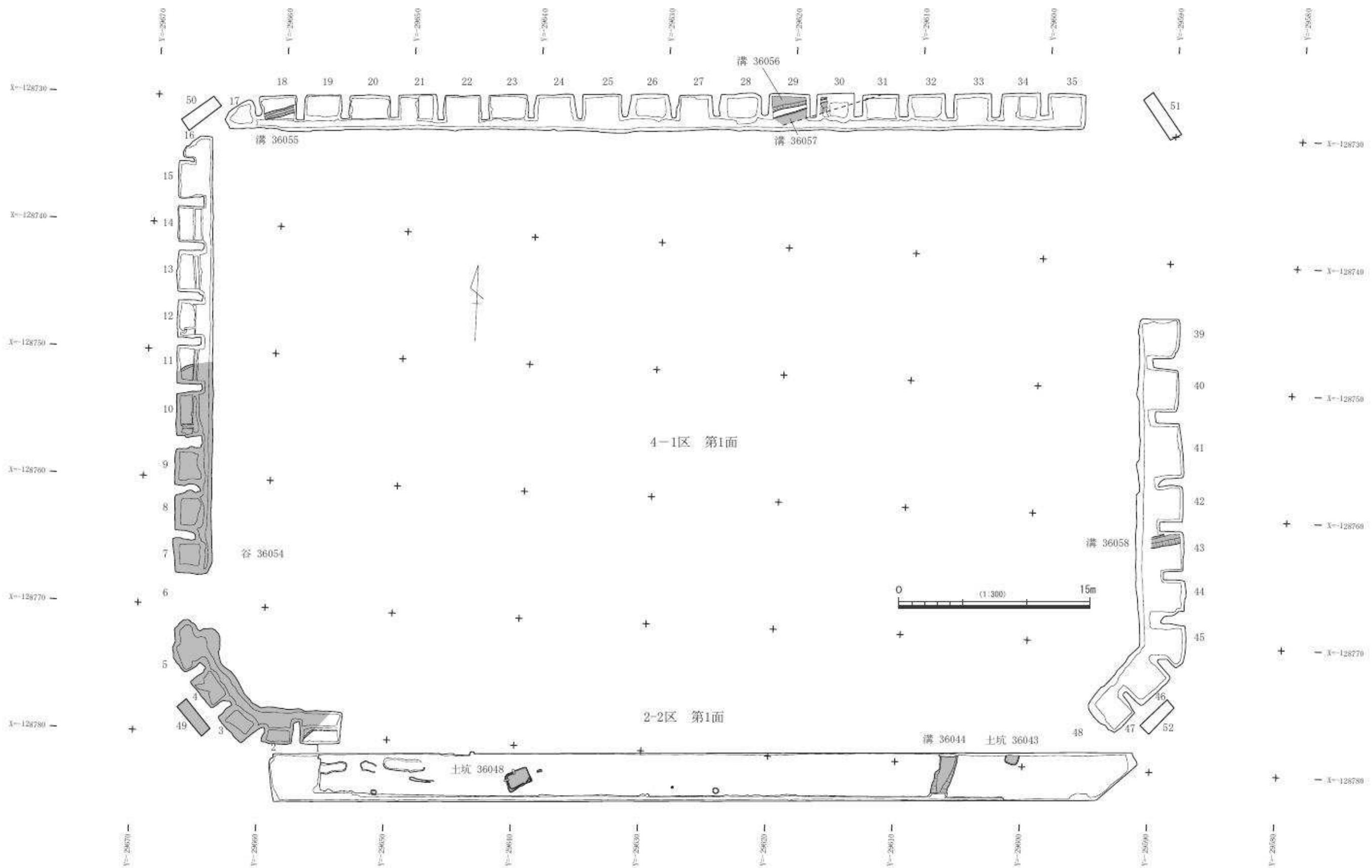
3-5区西端部で検出した不整形の平面プランを呈する大型の土坑で、長径2.26m、短径1.2m、深さ0.36mを測る。埋土は3層に分かれており、1層は暗褐色シルトに黒褐色シルト～粘土のブロックが少量混入した土、2層は暗褐色シルトに地山土が少量混入した締まりの悪い土、3層は褐灰色シルトに地山ブロックが少量混入した土である。遺物は出土しなかった。



第16図 ピット 76082 平・断面図



第17図 土坑 76070 平・断面図



第18図 第2-2区・4-1区 第1面遺構平面図

第2項 九頭神遺跡

1. 第2-2区

基本層序

当区は機械掘削によって府営住宅造成時の盛り土を削除した時点で地山を確認した。よって層序は記録していない。

検出遺構(第18図)

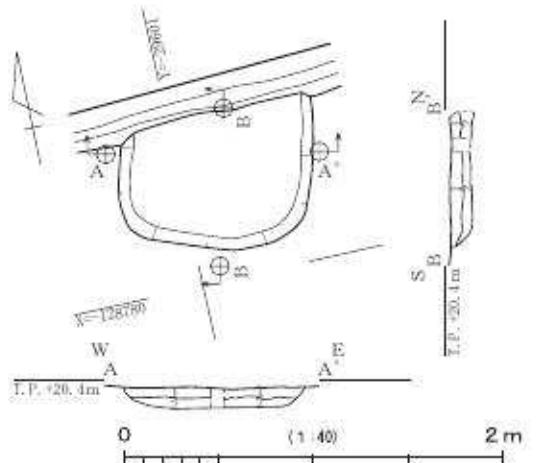
当区において、遺構面は地山直上の1面のみであった。遺構はピット5個、溝3条、土坑3基を検出した。遺構の概要は以下のとおりである。

土坑36043(第19図)

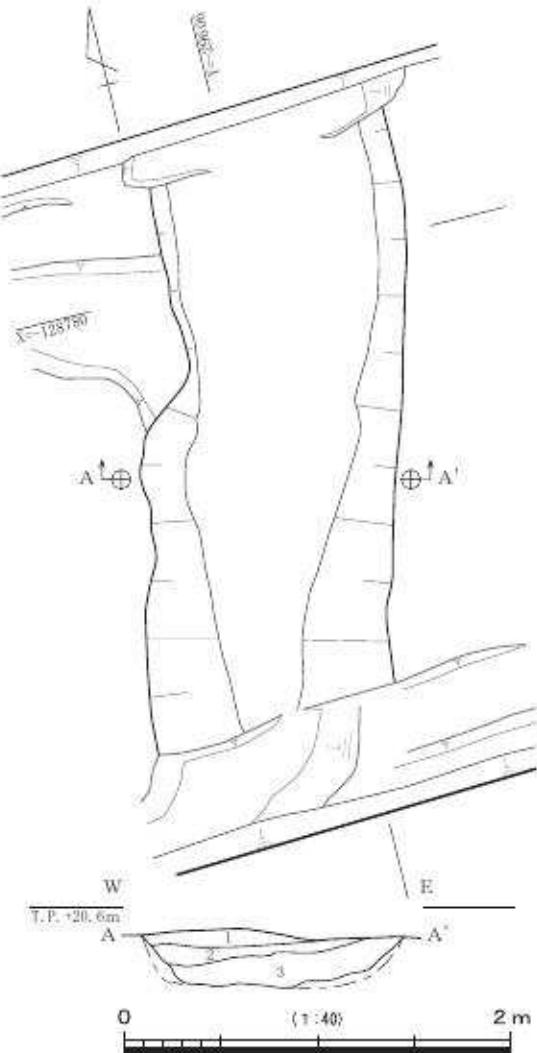
調査区東端部で一部北壁に切られる形で検出した。平面プランはややいびつな隅丸方形で、東西0.97m、南北残存長で0.67m、深さ0.1mを測る。埋土は上下2層に分かれ、1層は5YR5/2灰褐色粘土に10YR7/6明黄褐色粘土ブロックが20%、粗粒砂～小礫特に中心部に多く20%混入した土で、2層は7.5YR6/4にぶい橙色粘土と10YR7/6明黄褐色粘土の混合土である。遺物は出土しなかった。

溝36044(第20図)

調査区の東半部で南北に伸びる溝である。両端をそれぞれ北壁、南壁に切られる形で検出した。残存長で長さ2.8m、幅1.32m、深さ0.28mを測る。埋土は3層に分かれ、1層は10YR6/4にぶい黄橙色細粒砂～シルトに粗粒砂が20%混入した土で、2層は7.5YR6/4にぶい橙色シルトに粗粒砂が5%混入した土である。3層は7.5YR6/6橙色シルトに10YR8/4浅黄橙色シルトブロックが10%混入した土である。遺物は出土しなかった。



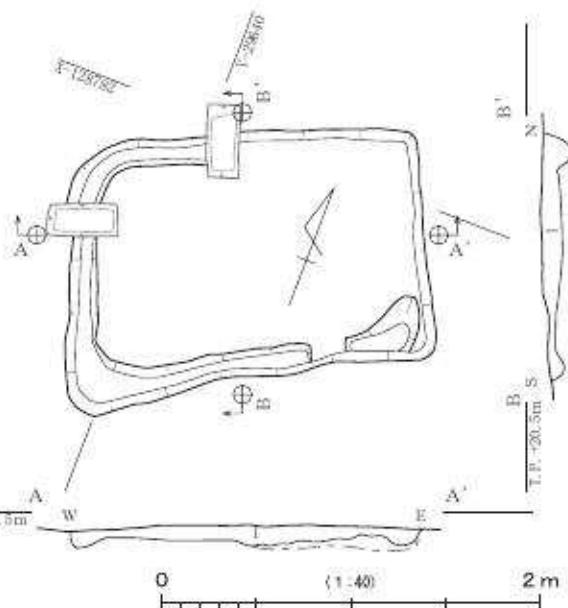
第19図 土坑36043 平・断面図



第20図 溝36044 平・断面図

土坑 36048(第 21 図、図版 9)

調査区の西半部中央付近で検出した。平面プランはやや歪な隅丸長方形である。検出長は東西 1.86 m、南北 1.31 m、深さ 0.15 m を測る。埋土は 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～粘土と 7.5YR5/3 にぶい褐色シルト～粘土の混合土で、炭化物粒が 3% 混入、部分的に少量の粗粒砂～小礫が微量混入する。遺物は土師器片が出土した。



2. 第 4-1 区

当区は第 4 次調査の対象地区の外周道路の拡幅工事に伴う調査である。上端幅 4 m で、前調査区の周囲を掘っていく予定であったが、万能鋤を支える控え杭が入っている場所は掘ることができなかつた為、その都度分割して掘削した。グリッドごとに南西から時計回りに 1 から順番に 48 まで番号を与えた。また、四隅を 1 m × 3 m の大きさで掘削し、そのグリッドにも南西から時計回りに 49 から 52 まで番号を与えた(第 18 図)。

I: 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～粘土と 7.5YR5/3 にぶい褐色シルト～粘土の混合土。粗状炭化物が 3% 混入、部分的に少量の粗粒砂混入。

第 21 図 土坑 36048 平・断面図

基本層序 (第 22 図)

第 0 層 (第 22 図 0)

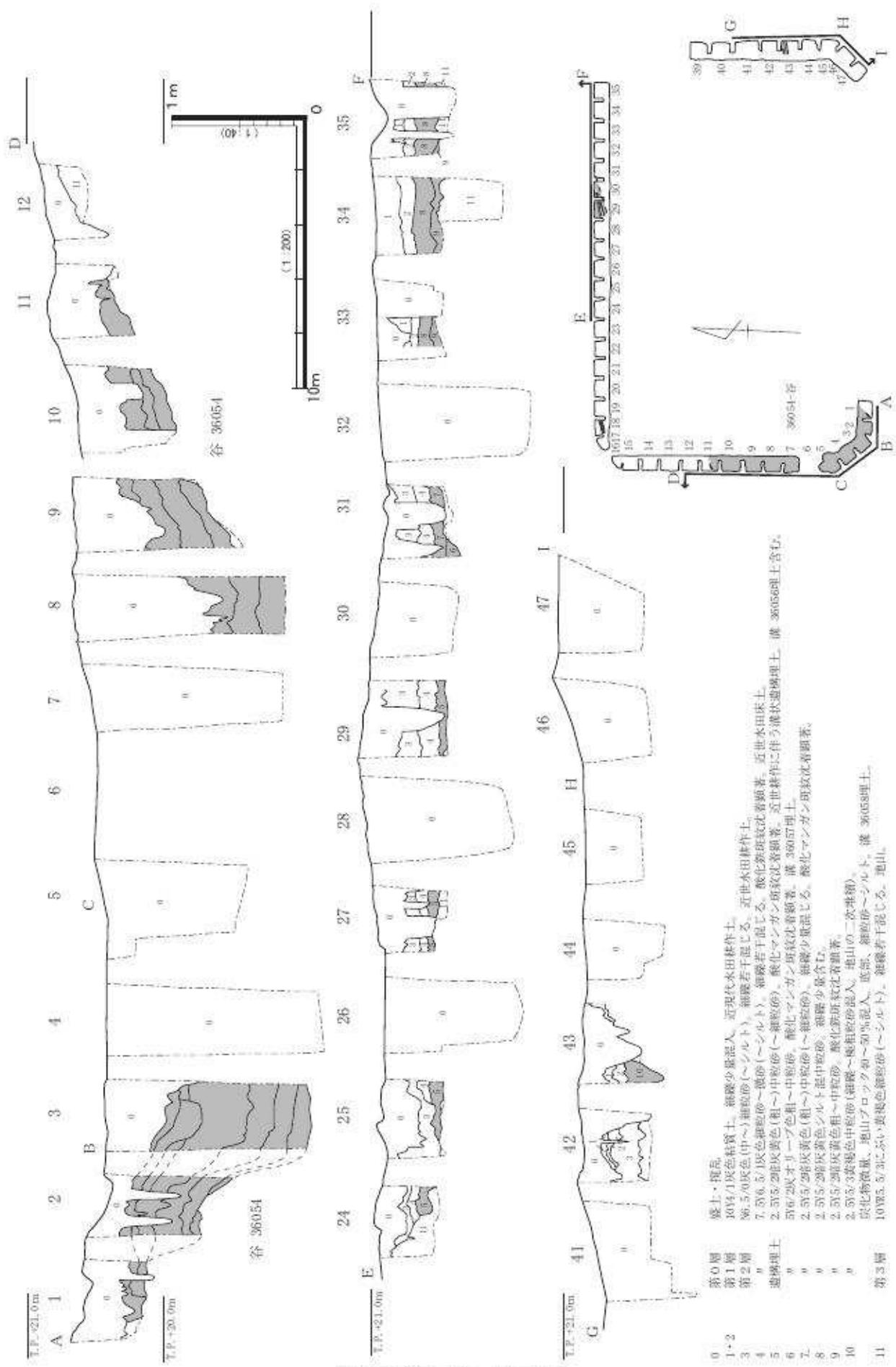
府営住宅造成時の盛土、または搅乱埋土で、調査区全域に認められる。大半が搅乱埋土で、最も深いものは 6. L-1.6 m に及ぶ。地盤高は概ね T.P. + 21.0 m を測る。調査区南西側は、深さ約 0.6 m の窪地を呈するが、これは谷 36054 を埋め立てた痕跡である。

第 1 層 (第 22 図 1・2)

近・現代の水田耕作層である。大半が搅乱による削剥を受けており、調査区北東側に部分的に残存する。層厚は 0.25 m 前後を測る。第 1 層は灰色グライ土で水田耕作土、第 2 層はその床土と考えられる。

第 2 層 (第 22 図 3・4)

近世の水田耕作層である。搅乱による削剥を受けており、調査区北側から東側にかけて残存するが、西側では確認されていない。第 3 層は層厚 0.2 ~ 0.3 m を測る。灰色グライ土で水田耕作



第222図 第4-1区 基本層序

土である。第4層は層厚0.1m前後を測る。灰色細粒砂～微砂で、床土である。酸化鉄斑紋集積が顕著に見られる。

第3層（第22図11）

当調査区の地山である。大半が搅乱や近世耕作活動により全面的に削剥されるが、調査区北西角では露頭している部分も認められる。にぶい黄褐色シルトを基調とし、部分的に顕著な赤色化を示している。

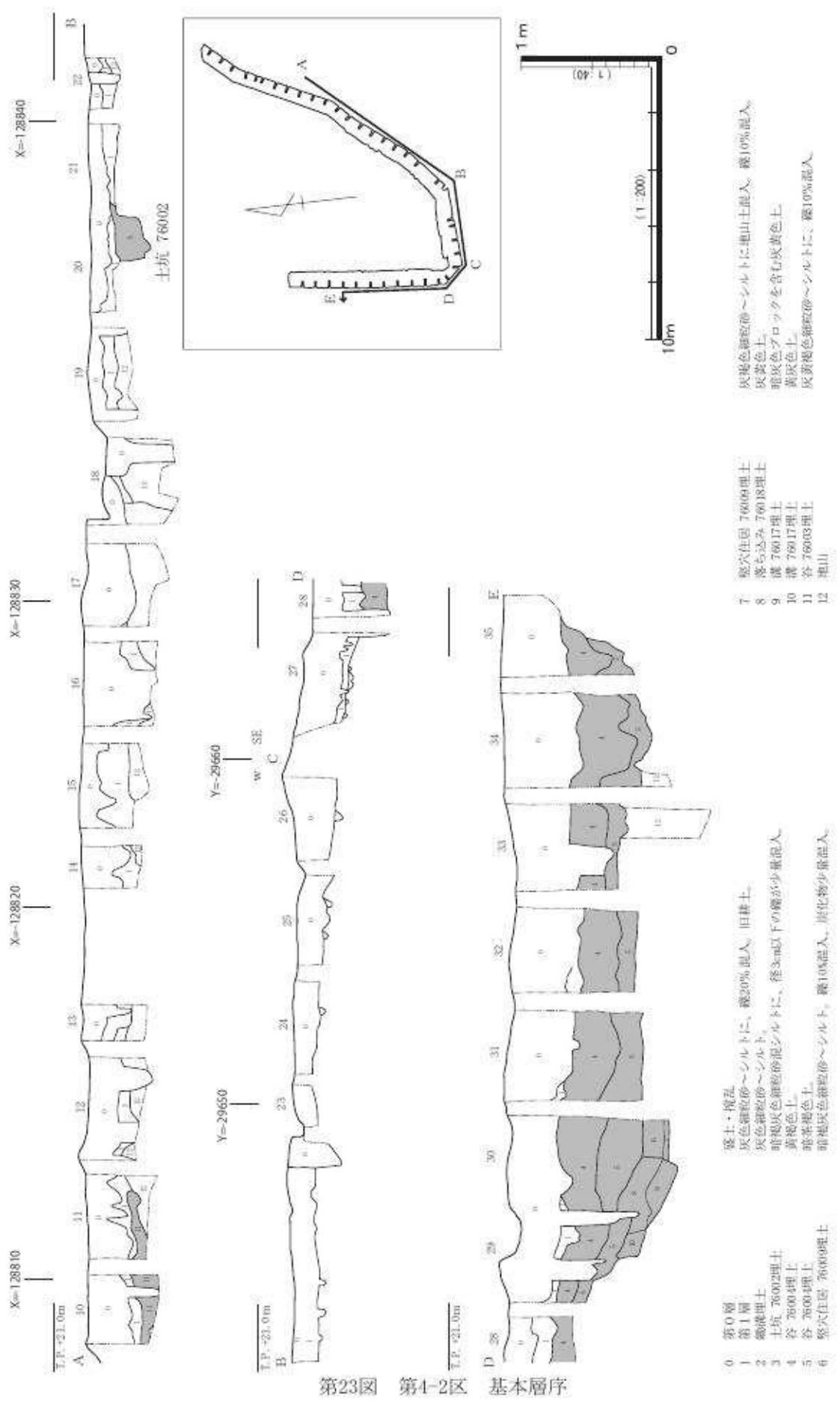
遺構埋土

第22図5～9は暗灰黄色中粒砂を主体とする溝の埋土である。調査区北側で検出された。平・断面情報から把握できたのは3条（溝36055～36057）であるが、実際にはさらに数条が存在し、複数が切り合い関係にあるものと推測される。溝の幅は0.6～1.2m以上、深さは0.1m前後を測る。延長方向は東北東～西南西を示す。この傾き（N-73°-E）は第5区で検出された近世水田区画の傾きと合致していること、また、一部の埋土から染付片が出土していることから、これらの溝は近世水田の耕作関連遺構である可能性が高い。

検出遺構（第18図）

当区の検出面は1面である。近世耕作層を除去した地山面において、溝を4条、谷を1箇所検出した。溝36055はグリッド18で検出した。幅は0.6m、深さは0.1mを測る。延長方向は東北東～西南西を示す。埋土は2.5Y6/2灰黄色細粒砂に粗粒砂～小礫が10%混入した土で、遺物は出土しなかった。溝36056はグリッド24・29で検出した。幅は1.2m以上、深さは0.1mを測る。延長方向は東北東～西南西を示す。埋土は2.5Y5/2暗灰黄色粗粒砂～中粒砂～微砂でマンガンの沈着が著しい。土師器、染付磁器、平瓦（第27図9）などが出土した。溝36057はグリッド29・30で検出した。復元幅は0.75m、深さは0.1mを測る。延長方向は東北東～西南西を示す。埋土は10YR6/3にぶい黄褐色細粒砂～シルトに粗粒砂～小礫が10%混入した土である。遺物は出土しなかった。溝36058はグリッド43で検出した。幅0.9m、深さ0.2mを測る。延長方向は東北東～西南西を示す。埋土は2.5Y5/3黄褐色中粒砂に細粒砂～極粗粒砂が少量混入した土で地山の二次堆積と思われる。炭化物、地山ブロックが混入する。遺物は出土しなかった。

谷36054はグリッド1からグリッド11にかけて検出した。幅約30m、確認できた最深部はG.L-1.5mである。谷は北東から南西に向けて流下していると考えられる。遺物は土師器、瓦器、瓦、陶器、焼き締め陶器、染付陶器、磁器（第27図8）などが出土した。



第23図 第4-2区 基本層序

3. 第4-2区

当調査区は第2-2区の南側の外周道路の拡幅工事に伴う調査である。上端幅4mで、万能扉を支える控え杭が入っている場所は掘ることができなかつた為、その都度分割して掘削した。グリッドごとに北東から時計回りに1から順番に39まで番号を与えた(第24図)。

基本層序(第23図)

第0層

府営住宅造成時の盛土で、調査区全域に認められる。層厚0.1~0.55mを測る。地盤高は北東部ではT.P.+20.8m、南東部ではT.P.+20.8m、南西部ではT.P.+20.64m、北西部ではT.P.+20.6mを測る。全体に西に落ちていく傾向にある。

第1層

近、現代の耕作層である。調査区南部と北西部以外の地域で確認できる。残存高はT.P.+20.44m~20.7mを測る。灰色シルト~細砂に礫が20%混入した土で層厚は東部中央付近が一番厚く0.2m、南西部付近が一番薄く0.04mを測る。

検出遺構

当区においては谷を2箇所、土坑3基、鋤溝13条を検出した。そのうち調査区西部で検出した谷76004はテラス部分が存在し、そこからピット2個、土坑1基、溝1条、竪穴住居を1棟検出した。また、その竪穴住居内よりピット5個、溝1条、炉穴1基を検出した。主だった遺構は以下の通りである。

土坑76001(第24図)

調査区南東部のグリッド19で検出した不定形の土坑である。長軸2.99m、短軸1.30m、深さ0.23mを測る。埋土は2層に分かれ、上層は暗赤褐色シルト、下層は灰黄褐色シルトに礫、小石が少量混入したものである。

土坑76002(第24図)

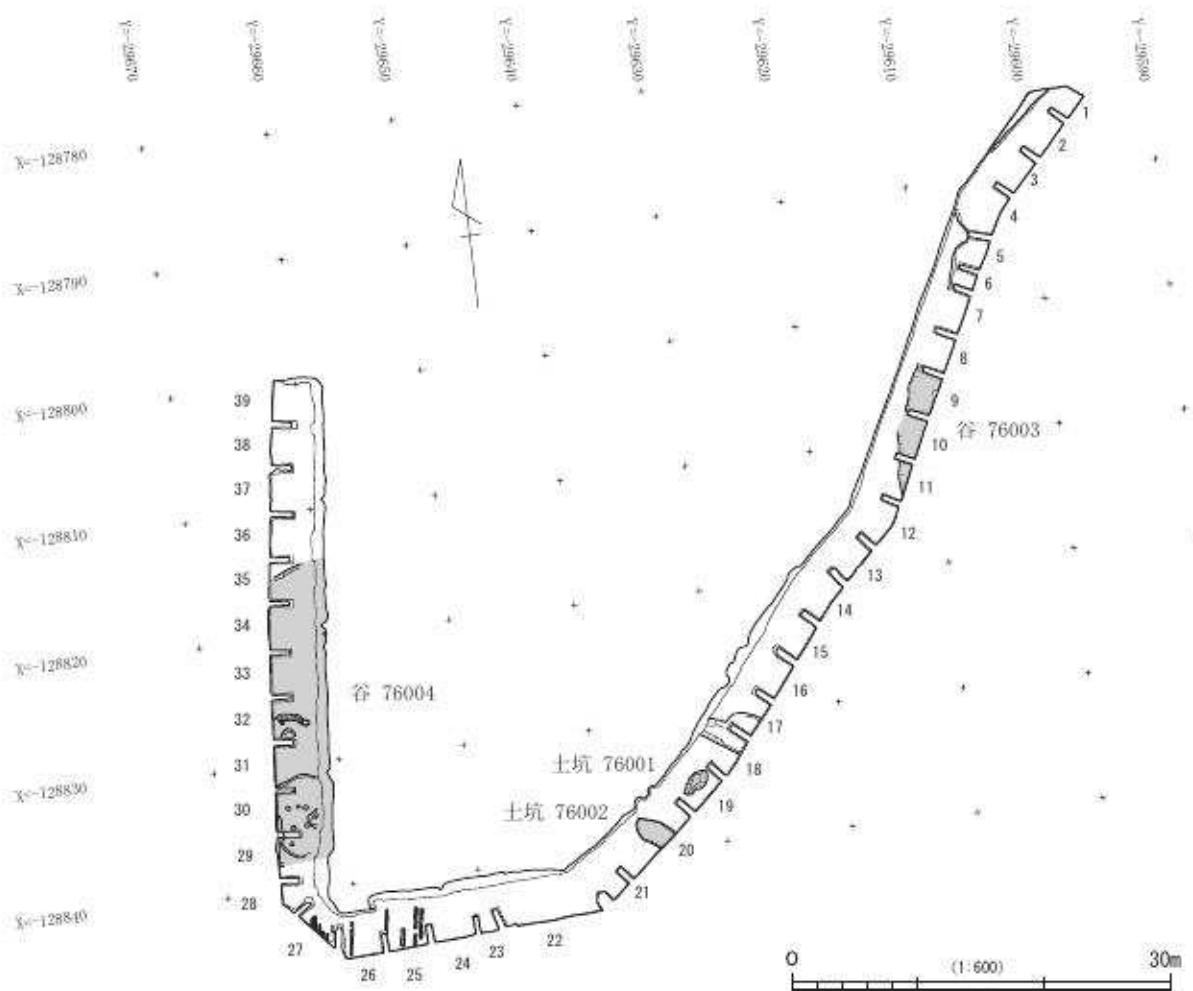
調査区南東部のグリッド20、21で検出した不定形の土坑である。長軸1.27m、短軸1.93m、深さ0.43mを測る。埋土は暗褐色シルトに細粒砂混入に径3cm以下の石が少量混入したものである。

谷 76004(第24図)

調査区の西部のグリッド35で北側の肩口を、グリッド29で南側の肩口を検出した。今回検出した部分では一部テラス状に広がっている部分を確認し、そこから竪穴住居跡76009、溝76005、ピット76006、ピット76008、土坑76007を検出した。北の肩口から南の肩口までの距離22.86mを測る。壁面崩壊の危険があった為、底面を検出するに至らなかつたので深さは不明である。遺物は上部からは瓦、須恵器、土師器甕、土師器壺、サヌカイト片などが出土している。

溝 76005(第25図)

調査区の西部、谷76004のテラス部分で検出した。やや北側に弧を描きながら東西に流れる溝である。西端部は閉じており、東端部はピット76008に切られている。検出長は2.22m、幅は0.5mで、深さは0.15mを測る。埋土は褐灰色シルト～粘土である。遺物は弥生土器の甕の口縁部、高坏、高坏脚部などが出土している。この溝は後に述べる竪穴住居跡などを検出した居住域の範囲の北限を示す区画溝の可能性がある。



第24図 第4-2区 第1面遺構平面図

ピット 76006(第25図)

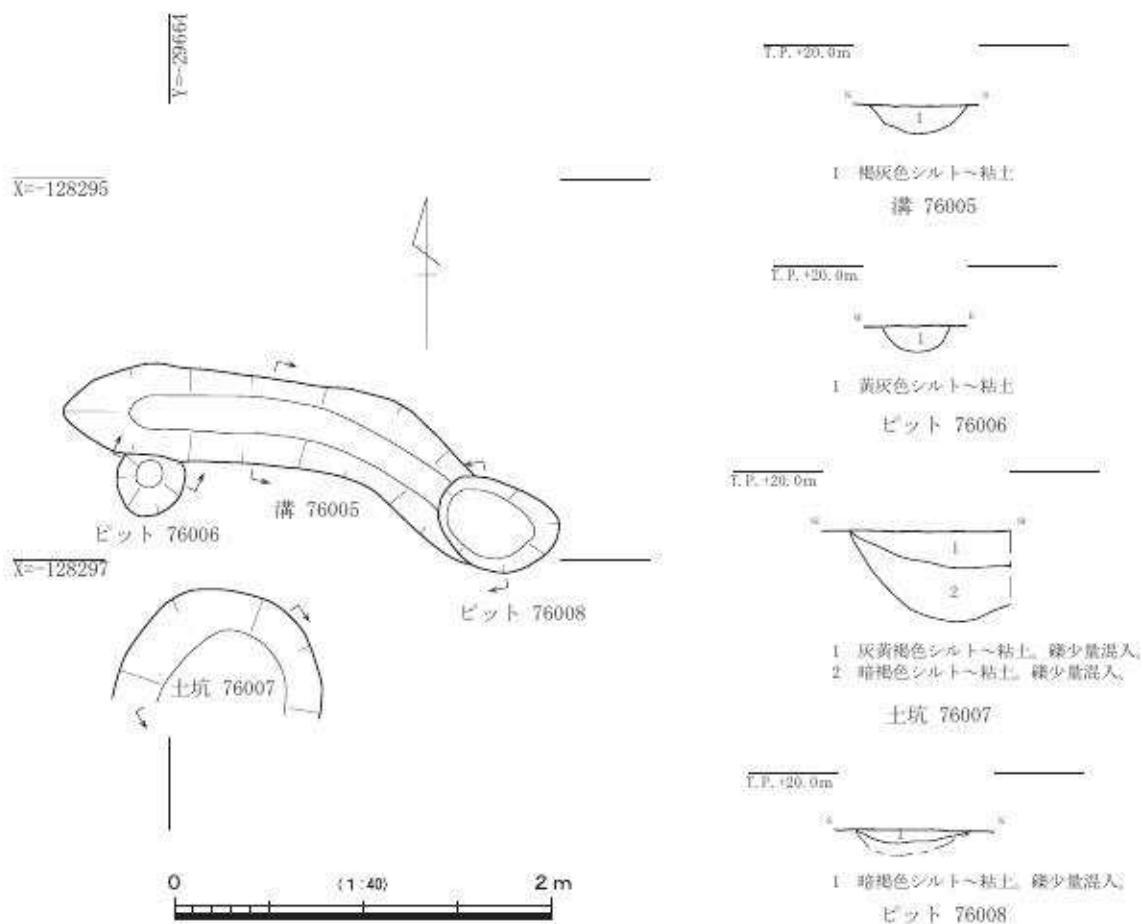
調査区の西部、谷76004のテラス部分で検出した。北部を溝76005に切られている。直径0.35m、深さ0.15mを測る。埋土は灰褐色シルト～粘土である。遺物は弥生土器の小片が少量出土した。

土坑 76007(第25図)

調査区の西部の、谷76004のテラス部分で検出した。平面プランはほぼ円形で直径0.85m、深さは0.48mを測る。埋土は2層に分かれ、上層は灰黄褐色シルト～粘土に礫が少量混入した土、下層は暗褐色シルト～粘土に礫が混入した土である。遺物は弥生土器の直口壺、高坏、甕などが出土した。

ピット 76008(第25図)

調査区の西部、谷76004のテラス部分で検出した。平面プランはほぼ円形で直径0.64m、深さは0.14mを測る。埋土は暗褐色シルト～粘土に礫が少量混入した土である。遺物は出土しなかった。



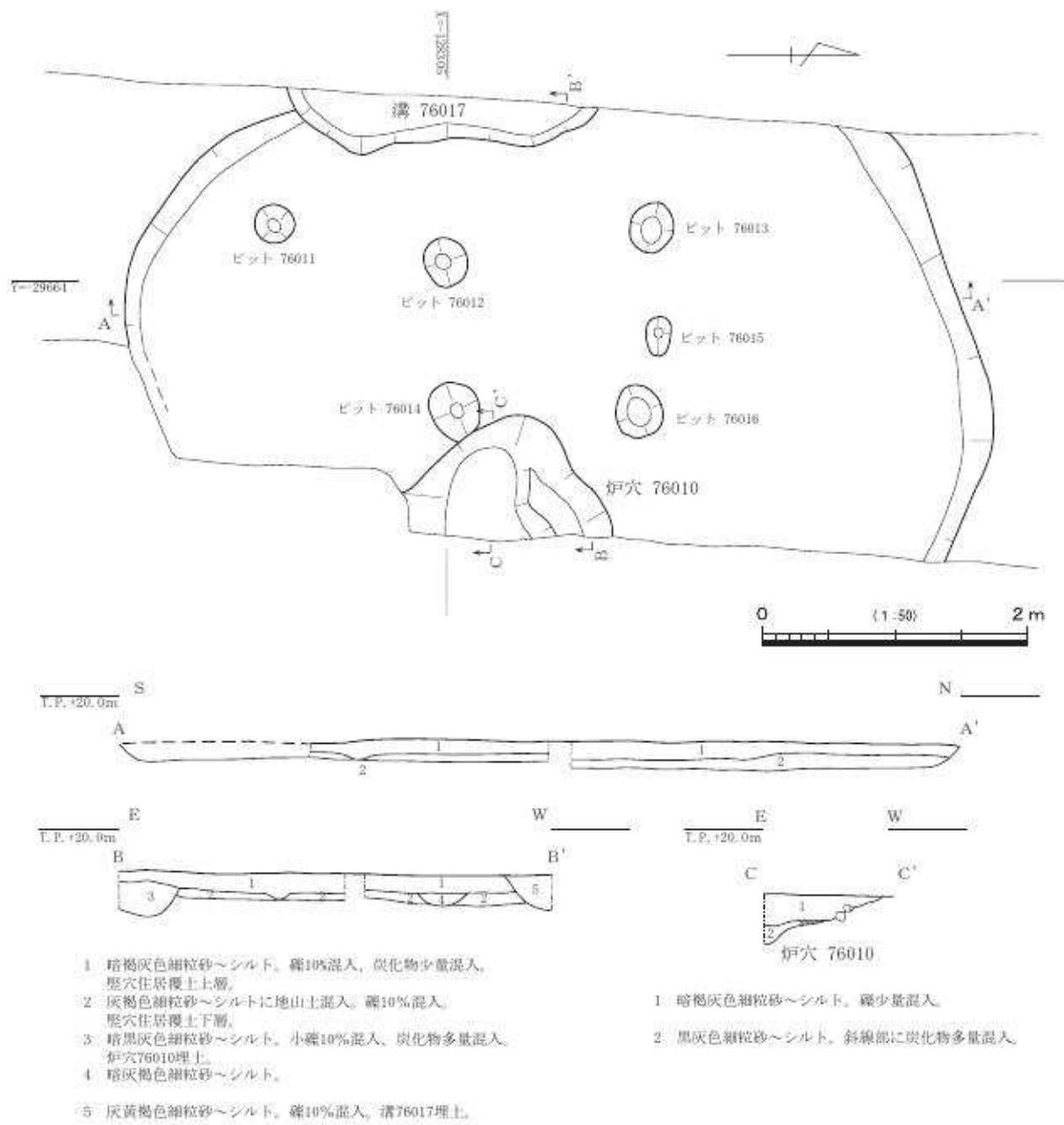
第25図 第4-2区 谷76004下面検出遺構 平・断面図(76005~8)

堅穴住居 76009(第26図・図版11)

調査区の西側、グリッド29、30、31にまたがって検出した。東西調査区外に延びていく為、平面プラン全部を検出することはできなかった。更に南西の肩部は土坑76017によって切られている。検出できた平面プランから少し南北に長い楕円形を呈するであろうと予測される。直径は6.32m、深さは0.35mを測る。床面でピットをいくつか検出したが位置、深さなどから主柱穴であるという判断は出来なかった。弥生土器の壺・高坏底部・甕底部などが出土した(図版12)。弥生時代後期初頭のものである。

炉穴 76010(第26図・図版12)

堅穴住居76009の東側、調査区東壁に延びていく形で出土した。平面プランは不正形状で、残



第26図 堅穴住居 76009 平・断面図

存径で南北 1.5 m、東西 0.9 m、深さは 0.37 m を測る。埋土は 2 層に分かれ、上層は暗褐色シルト細粒砂に礫が少量混入した土で、下層は黒灰色シルト～細粒砂である。下層の西側上部には炭化物が多く含まれている。遺物は高壙口縁、短頸壺、甕などが出土している。堅穴住居跡床面から出土した遺物と時期差が見られないことから、この堅穴住居で使用されていた炉穴と考えられる。

ピット 70611(第 26 図)

堅穴住居 76009 の床面で検出した。ほぼ円形で直径 0.32 m、深さ 0.34 m を測る。埋土は暗褐色シルト～細粒砂に小礫、炭化物が少量混入する。しっかりしたピットではあったが、検出位置から考えて主柱穴とは考えにくい。遺物は出土しなかった。

ピット 76012(第 26 図)

堅穴住居 76009 の床面で検出した。ほぼ円形で直径東西 0.39 m、南北 0.33 m、深さは 0.05 m を測る。埋土は灰黄褐色シルト～細粒砂である。検出位置から考えて主柱穴とは考えにくい。遺物は出土しなかった。

ピット 76013(第 26 図)

堅穴住居 76009 の床面で検出した。ほぼ円形で直径 0.40 m、深さは 0.06 m を測る。埋土は灰黄褐色シルト～細粒砂である。検出位置から考えて主柱穴とは考えにくい。弥生土器が出土した。

ピット 76014(第 26 図)

堅穴住居 76009 の床面で検出した。ほぼ円形で直径東西 0.44 m、南北 0.40 m を測る。深さは 0.05 m を測る。埋土は灰褐色シルト～細粒砂である。検出位置から考えて主柱穴とは考えにくい。遺物は出土しなかった。

ピット 76015(第 26 図)

堅穴住居 76009 の床面で検出した。ほぼ円形で直径東西 0.27 m、南北 0.30 m を測る。深さは 0.03 m を測る。埋土は灰褐色シルト～細粒砂である。検出位置から考えて主柱穴とは考えにくい。遺物は出土しなかった。

ピット 76016(第 26 図)

堅穴住居 76009 の床面で検出した。ほぼ円形で、直径東西 0.43 m、南北 0.37 m を測る。深さは 0.06 m を測る。埋土は灰褐色シルト～細粒砂である。検出位置から考えて主柱穴とは考えにくい。遺物は出土しなかった。

溝 76017(第 26 図)

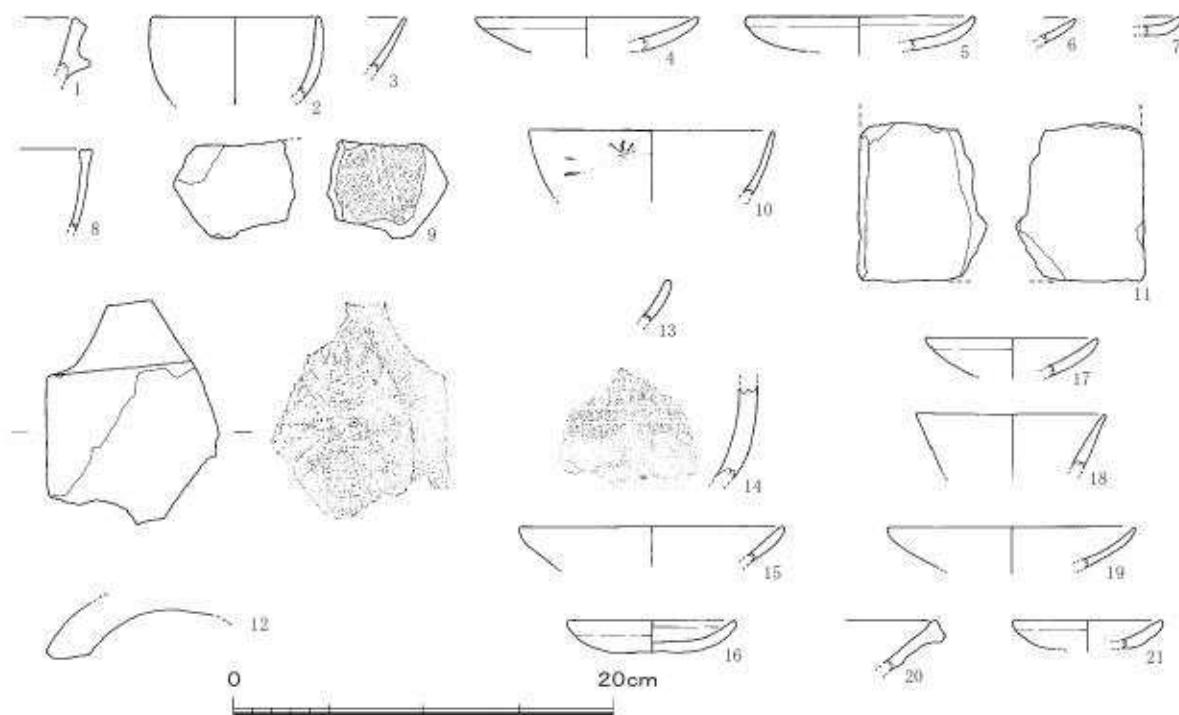
調査区の西部の、グリッド 29 で検出した。平面プランはわずかにしか残っておらず、詳細は不明であるが、堅穴住居 76009 の南西の肩部を一部切っており、堅穴住居跡よりもやや新しい遺構であると考えられる。残存長で 2.34 m、幅は 0.45 m、深さは 0.13 m を測る。埋土は 3 層に分かれ、上層は灰黄色土、下層は暗灰色ブロックを含む灰黄色土、肩口にたまたま土は明黄灰色土である。遺物は出土しなかった。

これらの他に調査区北東部で谷 76003 の肩口を検出している。

第 3 項 第 5 次調査出土遺物（第 27 図 1～21、第 28 図 22～48、図版 17～21）

第 5 次調査によって各遺構および包含層から出土した遺物は、調査面積からみればきわめて少なかった。さらに、そのうち図示し得たものは、招提中町遺跡出土 17 点（1～7、10～12, 15～21）、九頭神遺跡出土 31 点（8、9、13、14、22～48）の計 48 点と極端に少なかった。以下、その概要を記す。

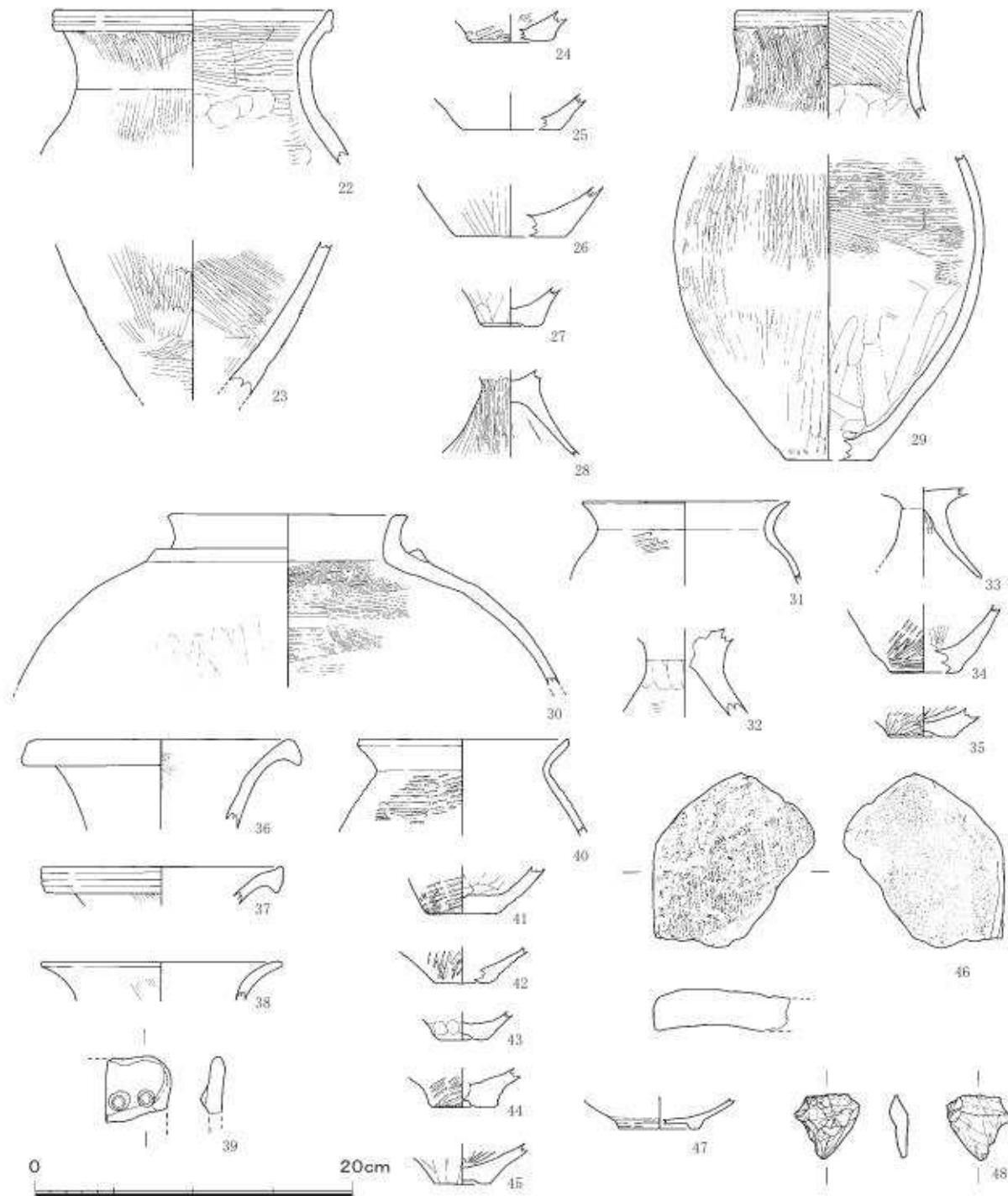
第 27 図 1 は土師器で、羽釜の口縁部の破片である。口径も復元できないほどの小片のため、詳細は不明である。溝 36016 からの出土である。2 は陶器で、椀の口縁部の破片である。土坑 36038 の埋土 1 からの出土である。3 は青磁で、椀の破片である。小片のため、口径は復元できなかった。土坑 36038 の埋土 2 ないしは埋土 3 からの出土である。4 は土師器で、皿の破片である。底部は欠損しているが、体部から口縁部にかけて外上方に内湾しつつ低く立ち上がる。口縁端部は外側に摘まみ出している。土坑 36038 の埋土 1 からの出土である。5 は土師器で、皿の体部から口縁部にかけての破片である。4 とはほぼ同様の形状を呈するもので、土坑 36038 の埋土 2 ないしは埋土 3 からの出土である。6 は土師器で、皿の口縁部と思われるが、ごく小片のため形状等は不明と言わざるを得ない。土坑 36038 の埋土 2 ないしは埋土 3 からの出土である。7 は土師器で、小皿の破片である。底部は欠損しているが、平坦な底部と思われる。口縁の立ち上がりはごく低く短く、外上方へ摘まみ出す程度のものである。土坑 36038 の埋土 1 からの出土である。8 は磁器で、鉢の口縁部の破片と思われる。谷 36054 からの出土である。9 は瓦で、平瓦の小片である。内面に布目が残る。溝 36056 からの出土である。10 は磁器で、染め付け茶碗の体部および口縁部の破片である。包含層（1-1 区第 2-2 層）からの出土である。11 は瓦で、平瓦の小片である。包含層（1-1 区）からの出土である。12 は瓦で、丸瓦の小片である。内面に布目が残る。包含層（1-1 区第 2-1 層）からの出土である。13 は青磁で、椀ないしは鉢の口縁部の破片と思われるが、ごく小片のため、詳細は不明である。包含層（4-1 区グリッド 29 第 2 層）からの出土である。14 は須恵器で、壺の体部の破片と思われるが、小片のため詳細は不明である。外面に沈線が 2 条認められる。包含層（4-1 区グリッド 51 第 2 層）からの出土である。15 は瓦器で、椀の口縁部の



第27図 第5次調査(平成22年度)出土遺物実測図1

破片である。ごく小片のため、詳細は不明である。包含層(2-1区西端南壁断面8)からの出土である。16は土師器で、小皿の破片である。反転復元によって形状の全容が明らかにできた数少ない例で、底部から口縁部にかけて外上方に内湾しつつ低く立ち上がる。口縁端部を外側に軽く摘み出す。包含層(2-1区第2-1層)からの出土である。17は土師器で、小皿の破片である。底部を欠損するが、全体的に丸みを帯びた形状を呈するものと思われる。包含層(2-1区第2-1層)からの出土である。18は須恵器で、壺の口縁部の破片と思われる。包含層2-1区西端南壁断面9)からの出土である。19は磁器で、皿の体部から口縁部にかけての破片である。土坑36038埋土1からの出土である。20は須恵器で、練り鉢の口縁部と思われる。土坑36038埋土1からの出土である。21は土師器で、小皿の破片と思われる。土坑36038埋土1からの出土である。

第28図22は弥生土器で、甕の口縁部及び体部上端付近の破片である。頸部から口縁部にかけて緩やかに外反し、口縁端部を上下に軽く摘み出すもので、端部外面に面を成す。内外面ともにハケ調整を施しており、ハケ目の痕跡が残る。堅穴住居76009の覆土内からの出土である。弥生時代後期初頭のものと思われる。23は弥生土器で、甕の体部下半の破片である。堅穴住居76009覆土内からの出土で、22と同一個体の可能性がある。24は弥生土器で、甕の底部の破片である。外面の中央部がわずかに凹む。体部外面下端にタタキの痕跡が残る。堅穴住居76009の覆土内からの出土である。25は弥生土器で、甕の底部の破片である。平坦な底部で、表面の剥離が著しく、内外面の調整等は不明である。堅穴住居76009の覆土内からの出土である。26は弥生土器で、甕の底部の破片である。平坦な底部で、外面の体部下端付近にヘラミガキの痕跡がわずかに残る。堅穴住居76009の覆土内からの出土である。27は弥生土器で、甕の底部の破片である。外面の中央部がわずかに凹む。体部外面下端に指押さえおよびヘラミガキの痕跡が残る。



第28図 第5次調査(平成22年度)出土遺物実測図2

堅穴住居 76009 の覆土上層（包含層）からの出土である。28 は弥生土器で、高坏の脚胴部の破片である。坏部と脚底部は欠損している。外面にヘラミガキの痕跡が残る。堅穴住居 76009 の覆土上層（包含層）からの出土である。29 は弥生土器で、短頸壺である。口縁部と体部に分離して出土しており、体部上端付近を欠損していたため接合はできなかったが、図上ではほぼ全形を把握できた。直立する口縁と長胴の球形を呈する体部からなるもので、口縁部内外面と内面の体部上半にはハケ目、体部外面にはヘラミガキの痕跡が顕著にみられる。弥生時代後期初頭のものと思われる。堅穴住居 76009 の炉穴内からの出土である。30 は弥生土器で、直口壺である。口

縁部および体部上半の破片で、大きく張る体部と外上方へごく短く立ち上がる口縁部からなる。口縁端部をわずかに外方へ摘まみしており、上端に面を成し、面上に浅い沈線を1条巡らす。体部外面上端付近には、断面三角形の低い貼り付け突帯を付している。弥生時代後期中葉から後半のものと思われる。土坑76007からの出土である。31は弥生土器で、甕である。口縁部および体部上端付近の破片で、わずかに張り出す体部と短く外反する口縁部からなる。口縁端部は尖らせている。体部外面にタタキの痕跡がわずかに認められる。土坑76007からの出土である。32は弥生土器で、高坏である。坏底部と脚の接合部分の小片で、全体の形状等は不明である。土坑76007からの出土である。33は弥生土器で、高坏である。坏底部と脚部上半の破片で、ともに口縁部付近を欠損する。溝76005からの出土である。34は弥生土器で、甕である。底部および体部下端の破片で、小片のため全体の形状等は不明である。体部外面にタタキの痕跡がわずかに認められる。ピット76008からの出土である。35は弥生土器で、甕である。底部および体部下端の破片で、小片のため全体の形状等は不明である。底部外面中央にわずかに凹みが認められる。体部外面にタタキの痕跡がわずかに認められる。ピット76008からの出土である。36は弥生土器で、壺である。広口壺の口縁部の破片で、口縁の立ち上がりは比較的大きく外反する。端部は下方に肥厚し、外側に面を持つ。谷76004の第1層からの出土である。37は弥生土器で、壺である。広口壺の口縁端部付近の破片で、小片のため、詳細は不明である。谷76004からの出土である。38は弥生土器で、甕である。口縁端部付近の破片で、小片のため詳細は不明である。40は弥生土器で、甕である。口縁部および体部上半の破片で、体部外面にタタキ目が顕著にみられる。谷76004からの出土である。41は弥生土器で、甕である。底部および体部下端付近の破片で、体部外面にタタキの痕跡が残る。谷76004からの出土である。42は弥生土器で、甕である。底部および体部下端付近の破片で、体部外面にタタキの痕跡が残る。谷76004第1層からの出土である。43は弥生土器で、甕である。底部および体部下端付近の破片で、体部外面に指の圧痕が残る。谷76004からの出土である。44は弥生土器で、甕である。底部および体部下端付近の破片で、体部外面にタタキの痕跡が残る。谷76004からの出土である。45は弥生土器で、甕である。底部および体部下端付近の破片で、体部外面に指の圧痕が残る。谷76004からの出土である。46は平瓦である。内面に布目痕が顕著に残る。谷76004直上からの出土である。47は磁器で、青磁である。削り出し高台を有する。ピット76067からの出土である。48はサヌカイト片である。谷76004からの出土である。

第2節 第6次調査（平成23年度）

第1項 招提中町遺跡

第5区

本調査区は、府営住宅の敷地を南北につらぬく道路の拡張部分に当たる。調査区は南北に長く、延長は200mを超える。全域が招提中町遺跡の範囲内にあたる。

現況地盤は北に行くほど高く、南は穂谷川があるので南寄りになるほど低くなる地形である。調査区の南端は地山面でT.P.+20.00mを測るが、北端は地山面でT.P.+22.00mを測る。現状ではさほどの高低差を感じないが、実際には地山面レベルでは2mもの高低差がある。

地山面はひたすら平坦に展開するのではなく、所々で地山面が落ち込み、その中からは中世の土器を含む堆積層が確認されている。それらの包含層を除去すると、黄色粘質土などを基盤とする地山面上で土坑や溝などの遺構を検出した。

また、調査区の一番北端に接する東西にのびる調査区においては、灰白色シルトの地山上にいくつものビットが発見されている。調査区の幅が狭いので建物の復元までにはいたらないものの、周辺に存在した当該時期の集落に関係する遺構群と思われる。

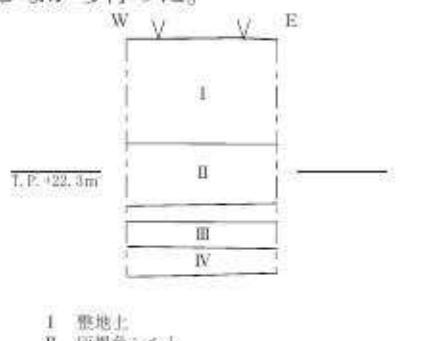
調査は南より調査区を設定し、周辺工事の進捗状況と調整しながら行った。

基本層序（第29図）

調査区はなだらかな丘陵の南側斜面に位置する。調査範囲のほとんどは近世に削平されており、北端だけが削平を免れたため、中世の包含層が遺残している。

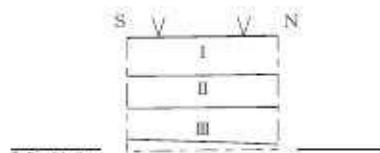
遺残状態のよい調査区北端では、基本層序は4層である。第I層は整地土である。厚さ約8cmを測る。第II層は灰褐色シルトである。厚さ約10cmを測る。第III層の灰黄褐色シルトは、中世の遺物を含む層である。厚さ約8cmを測る。この層より瓦器・土師器・瀬戸平碗が出土している。中世後半の包含層と考えられる。第IV層の灰白色シルト（地山）混じり暗褐色シルト～粘土は、中世の遺物を含む層である。この層より土師器が出土している。地山は灰白色シルトで締まりが悪く、脆弱である。

遺残状態の悪い調査区中央では、基本層序は3層である。第29図 第5区 基本層序模式図



I 整地上
II 灰褐色シルト
III 灰黄褐色シルト
IV 灰白色シルト(地山)混じり暗褐色シルト～粘土

調査区北端



I 整地上
II 灰色粘質土～茶褐色粘土
III 茶色粘土～褐色砂質土

調査区中央

第Ⅰ層は整地土である。厚さ約10cmを測る。第Ⅱ層は灰色粘質土～茶褐色粘土である。厚さ約12cmを測る。第Ⅲ層の茶色粘土～褐色砂質土である。厚さ約10cmを測る。地山は黄色粘土～黄灰色粘土である。

検出遺構

1. 第5-1区

谷 11002(第30図)

調査区の中央に位置する落ち込みで谷と考えられる。東西方向の谷で、幅7.5m、深さ0.4mを測る。埋土は黒色粘土・暗灰色砂質シルトで水が溜まっていたと考えられる。遺物は黒色粘土より染付磁器碗、最下層の暗灰色砂質シルトより土師器皿・丸瓦が出土している。

2. 第5-2区

溝 11095(第30図)

調査区南端に位置する東西方向の溝である。幅0.3m、深さ0.1mで、暗灰色粘土が堆積している。遺物は出土しなかった。

3. 第5-3区

溝 11001(第30図)

調査区南側に位置する溝状の遺構である。搅乱により片側の落ちしか確認できていないので規模は不明であるが、東西方向にのびるもので、南北幅2m以上、深さ0.1mで、黄褐色砂質土が堆積している。遺物は土師器・陶器が出土している。

4. 第5-4区

溝 11016(第30図)

調査区中央に位置する東西方向の溝である。幅2.5m、深さ0.1mで、灰黄色粘土ブロック混じり明灰色粘土が堆積している。遺物は磁器が出土しており、近世の耕作溝であると思われる。

土坑 11019 (第31図)

調査区中央に位置する梢円形の土坑である。長径2.5m、短径1.5m、深さ0.25mで、灰黄

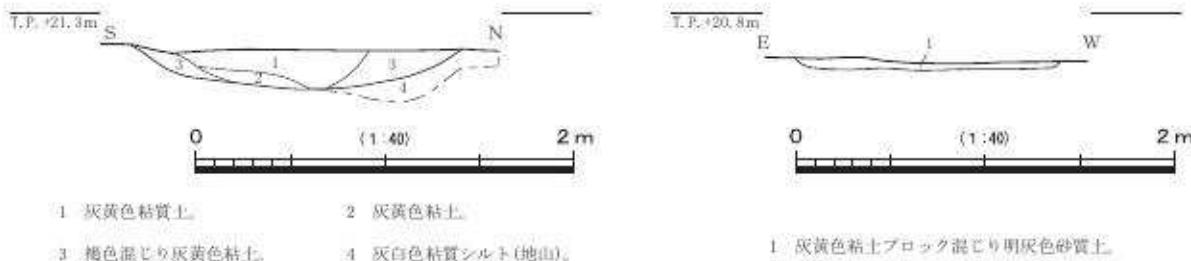


第30図 第5区 第1面遺構平面図

色粘土が堆積している。遺物は出土しなかった。

土坑 11021（第32図）

調査区南端に位置する方形の土坑である。長辺 1.4 m、短辺 1.1 m、深さ 0.07 m を測る。埋土は灰黄色粘土、灰黄色粘質土、褐色混じり灰黄色粘土で、遺物は近世の土師器小皿が出土している。



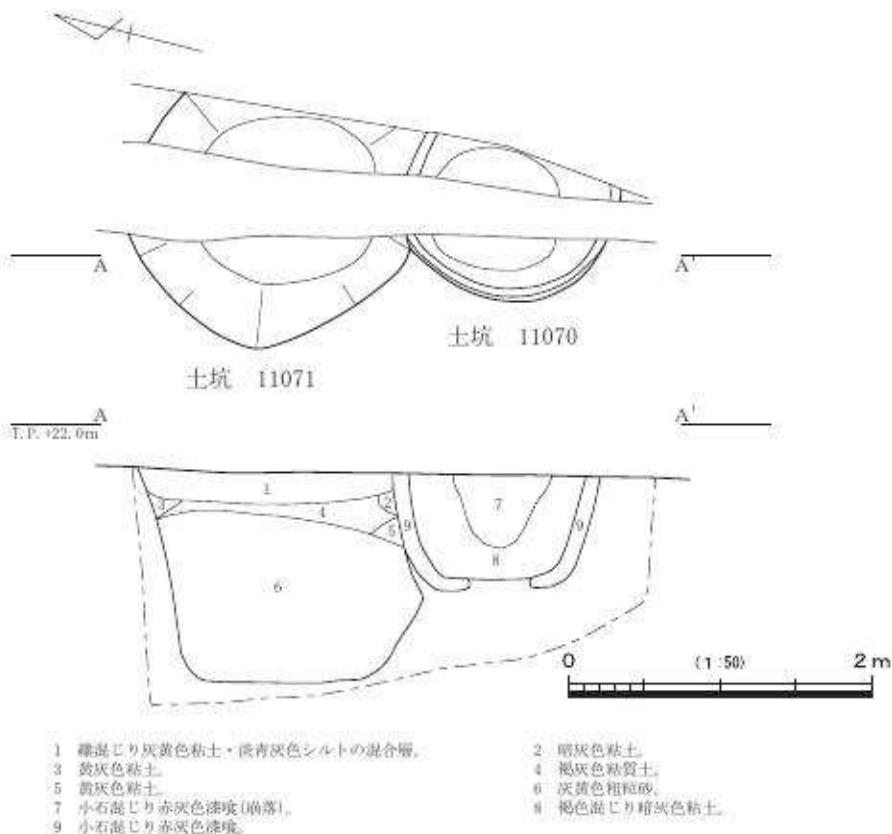
第31図 土坑 11019 断面図

第32図 土坑 11021 断面図

5. 第5-5-1区

土坑 11070（第33図）

調査区中央、土坑 11071 土坑の南側に位置し、切り合あつてある土坑 11071 の上層遺構である。円形の土坑で直径 1.45 m、深さ 0.78 m を測る。埋土は褐色混じり暗灰色粘土で、遺構の



第33図 土坑 11070・土坑 11071 平・断面図

外周は漆喰で固められており、一部に平瓦の使用がある。遺構内に外周の漆喰が投棄されていたが、遺物は出土しなかった。

土坑 11071 (第 33 図)

調査区中央、11070 土坑の北側に位置し、切り合あつてある土坑 11070 の下層遺構である。円形の土坑で直径約 2.0 m、深さ 1.42 m を測る。埋土は疊混じり灰黄色粘土と淡青灰色シルトの混合層・褐灰色粘質土、暗灰色粘土、灰黄色粗粒砂で、灰黄色粘土と淡青灰色シルトの混合層・褐灰色粘質土より、伊万里碗の小片が出土している。遺構の時期は、掘方が中世の包含層を切っており、出土遺物などから近世と考えられる。

6. 第 5-5-2 区

溝 11082 (第 30 図)

調査区北側に位置する南北方向の溝である。長さ 0.9 m、幅 1.8 m、深さ 0.05 m を測る。方位は N-28°-W で、ほかの溝と方向が異なる。埋土は暗褐灰色粘土、遺物は土師器が出土している。

7. 第 5-5-3 区

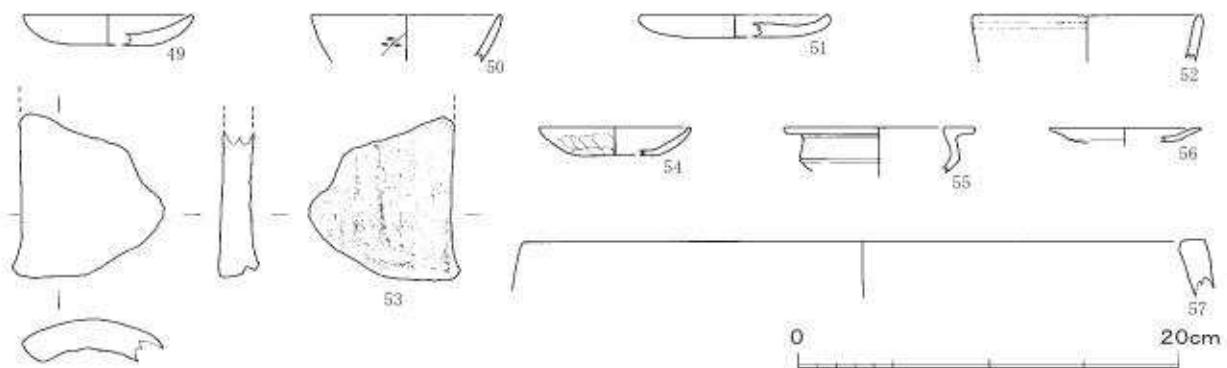
調査区の北端に位置する東西方向のトレンチで、前年度調査第 3-5 区の西側の続にあたる。遺構面は T.P.+22.00 m で地山上にあり、中世の包含層が遺残している。中世の溝 4 条、土坑 2 ヶ所、柱穴 16 ヶ所を検出した。

溝 11055 (第 30 図)

調査区中央に位置する南北方向の溝である。幅は北側 1.3 m、南側 2.0 m、深さ 0.1 m を測る。埋土は暗褐色シルト・黒褐色粘土ブロック混じり灰褐色シルトで、遺構底面の凹凸がはげしい。遺物は出土していない。

第 2 項 第 6 次調査出土遺物 (第 34 図 51 ~ 57、図版 21)

51 ~ 53 は谷 11002 からの出土である。51 は土師器皿、53 は軒丸瓦で中世の遺物である。丸瓦は色調が灰白色で焼成が悪く、瓦当面を欠失している。52 は染付磁器碗で、近世の遺物である。49 は土坑 11021 から出土した土師器小皿である。遺物の時期は近世である。50 は土坑 11071 からの出土で、伊万里の染付碗である。



第34図 第6次調査(平成23年度)出土遺物実測図

54～57は包含層からの出土である。54・55は近世の遺物で、第5-4区茶褐色粘土から出土している。56は第5-2区から出土した土師器小皿である。中世のものである。57は第5-2区からの出土で、土師質火鉢である。

第3節　まとめ

平成22年度から23年度にかけて、第5次および第6次調査として実施した招提中町遺跡および九頭神遺跡の調査は、周辺道路の拡幅および一部新設部分を対象とするものであった。そのうち23年度に対象となった南北道路は、両遺跡の境界となる位置に相当した。現況道路の西側が九頭神遺跡で、東側が招提中町遺跡に区分されていたため、今回、平成23年度に実施した南北道路の拡張部分については、全域を招提中町遺跡に含めた。

招提中町遺跡

北西端部にあたる第5次調査の第3区から、その西側に接する第6次調査の第5-5-3区にかけての地域で、土坑、溝、ピットからなる一群が検出されている。出土した土師器小皿などから、これらの遺構は中世のものと考えられる。招提中町遺跡で中世以前と認められる遺構が検出されたのはこの2ヶ所のみであり、ほかはすべて近世ないしはそれ以降のものばかりであった。

近世のものとしては、第5次調査の第1地区および第2-1区で3面の遺構面が確認され、中間の第2面で近世水田区画や鋤溝が検出された。第1面では井戸36006、井戸36036などが検出され、これらは第2面の水田遺構の後から掘削されていることから、水田との関連が希薄な性格を持つものと考えられ、近代以降の遺物が認められないことから近世の所産と考えた。第3面からは井戸36005、土坑36038などが検出された。近世の遺物を含むことから近世水田以前の近世遺構といえる。

調査区の北端部付近では、極少量ではあるが中世の包含層に弥生土器と考えられるものが含まれており、同時期の遺構が近辺に存在する可能性がある。

九頭神遺跡

平成 22 年度の第 4-2 区で、弥生時代後期初頭に属する堅穴住居、土坑、溝からなる一群が検出された。調査区の南・北・東の三方は近接地点で一段高くなっているため、その間の低いテラス地形上に集落が存在したものと思われ、今回検出したのはその東端部で、テラス状地形は西方へ広がるものと考えられる。府営東牧野住宅建設に伴う発掘調査では、これまで弥生時代中期、古墳時代前期の集落あるいは墓域が検出されていたが、弥生時代後期の遺構は空白期間であった。今回、同時期の遺構・遺物が検出されたことにより、当地が弥生時代中期から古墳時代前期まで連綿と続いた複合遺跡であることが判明した。

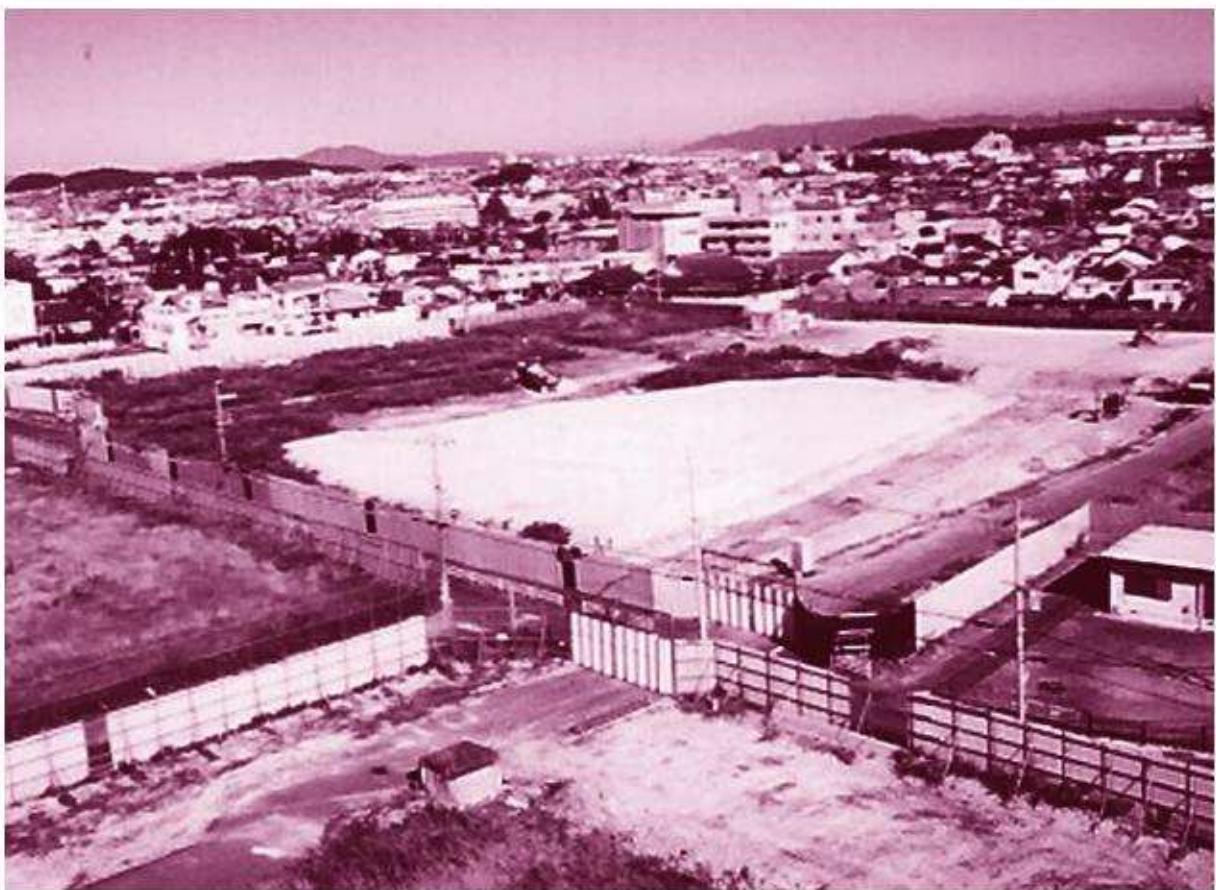
第 4-1 区では、北端部から北東端部にかけての地点では、東に隣接する平成 23 年度招提中町遺跡調査区の南半部と同様に近世の耕作関連の遺構が認められた。

また、第 4-1 区の西端と東南端付近では、いくつかの浅い谷状地形が入り組んでいる状況が確認された。これらは旧府営住宅建設以前に形成されていた耕作地を造成するための整地によって埋め立てられたものと考えられ、谷の埋積土からは、近世以降の陶磁器・瓦類が出土している。

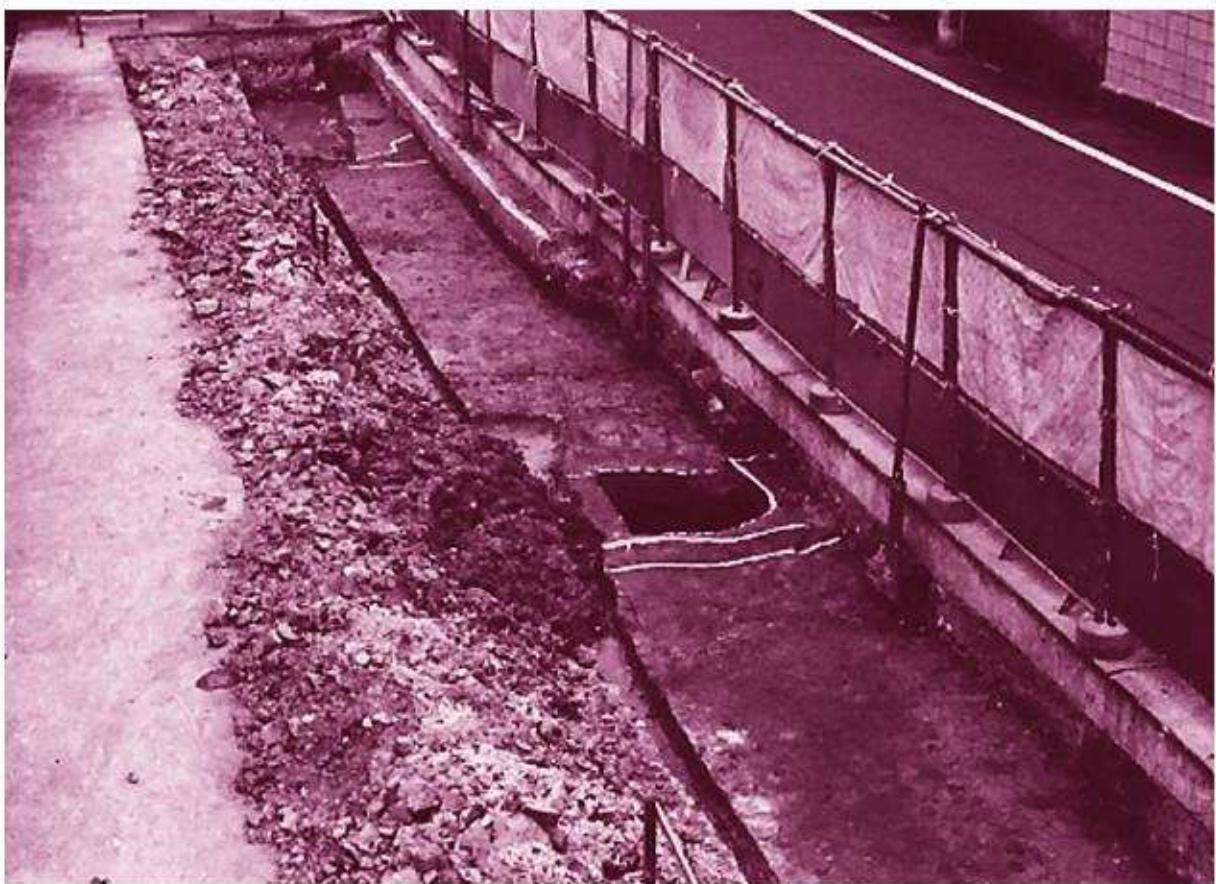
長年に亘って実施してきた、府営東牧野住宅の建設に伴う招提中町遺跡・九頭神遺跡の発掘調査は、平成 23 年度を以て終了することとなった。これまで得られた両遺跡に関わる多くの知見は、周辺における調査成果とともに、地域の歴史を考える上で貴重な資料となるものと考える。

二年度に亘る現地調査では、藤井信之（平成 22 年度）、岡林孝之（平成 22 年度）、幸前音伸（平成 22 年度）、駒田佳子（平成 22 年度）、田伏美智代（平成 22 年度）、武藤道子（平成 22・23 年度）、上妻敦子（平成 22・23 年度）、西山昌孝（平成 23 年度）、塩入基弘（平成 23 年度）の各氏の協力を得た。記して感謝の意を表します。

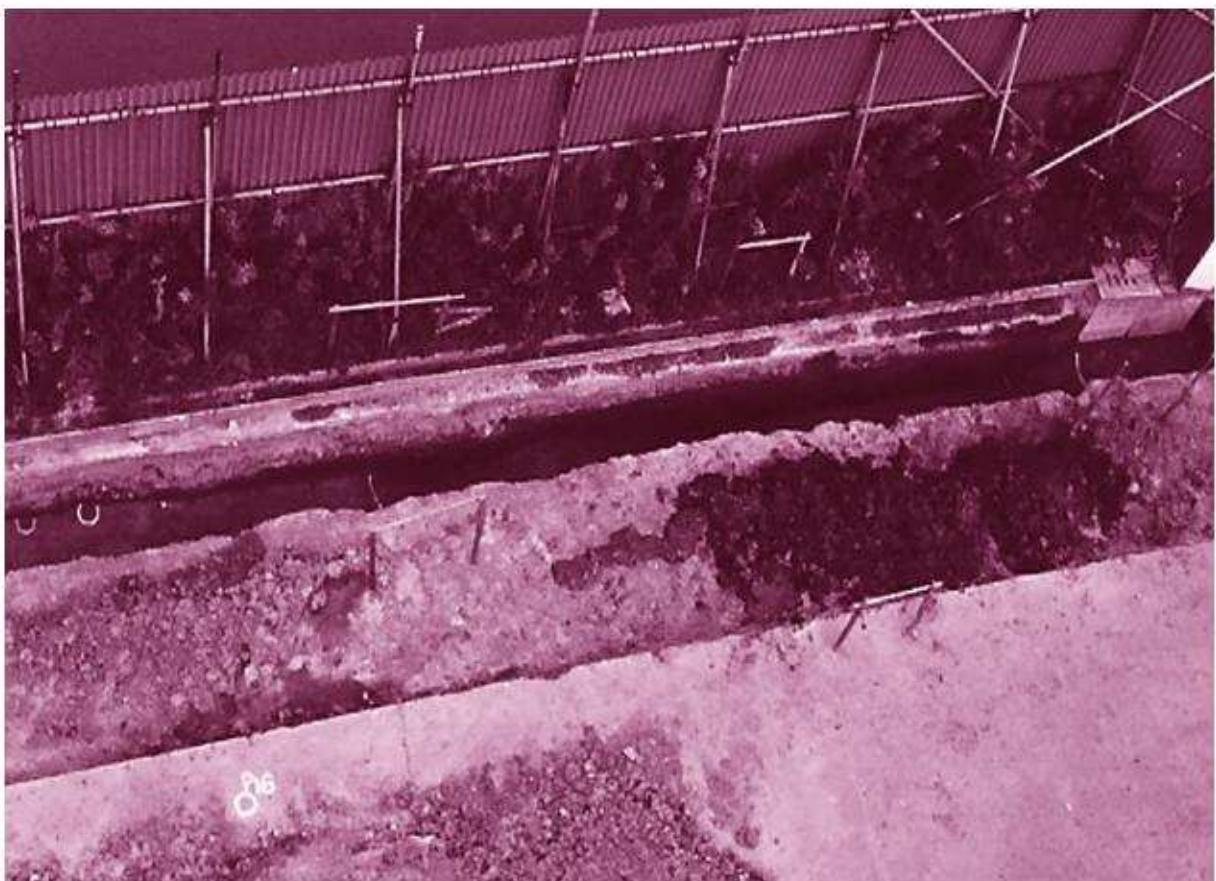
図 版



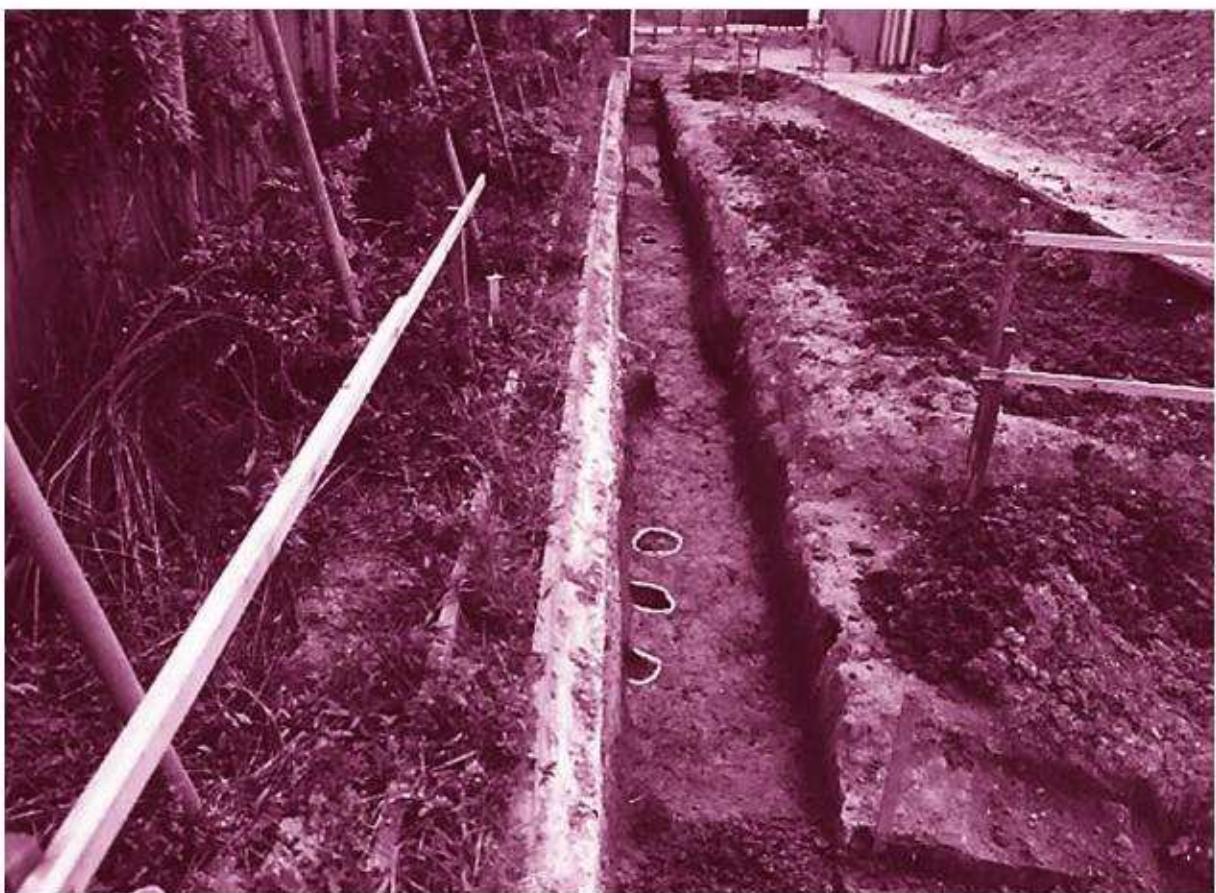
招提中町遺跡遠景（南西より）



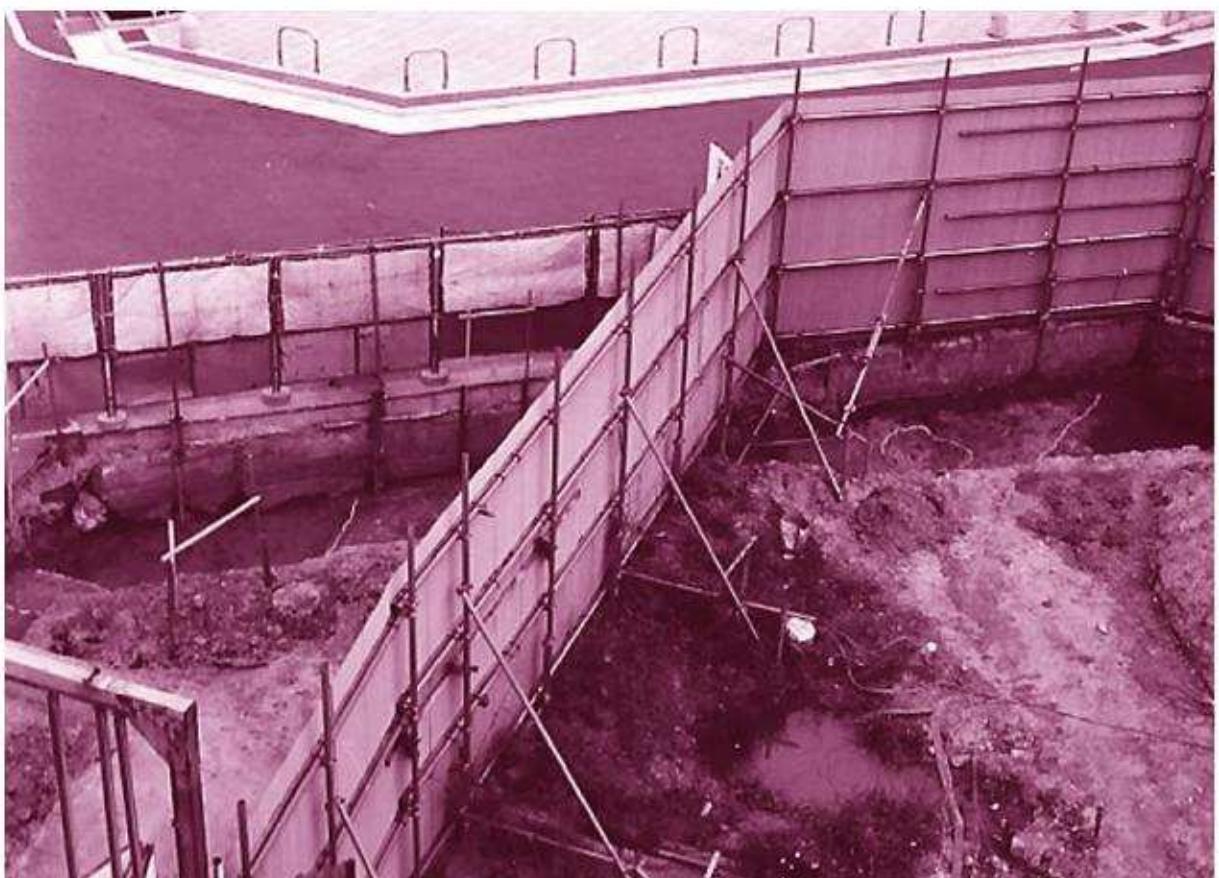
第1-1区北半部（南より）



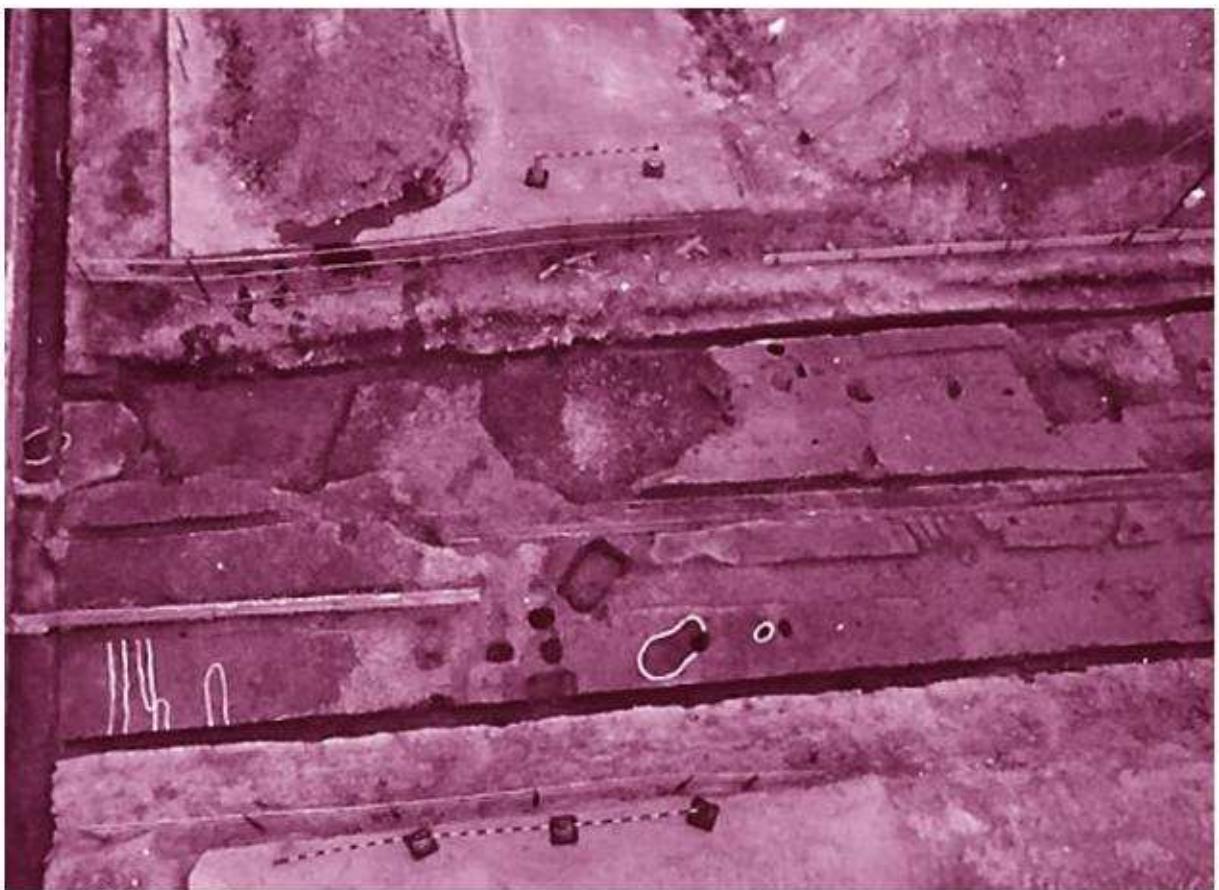
第1-2区中央部（西より）



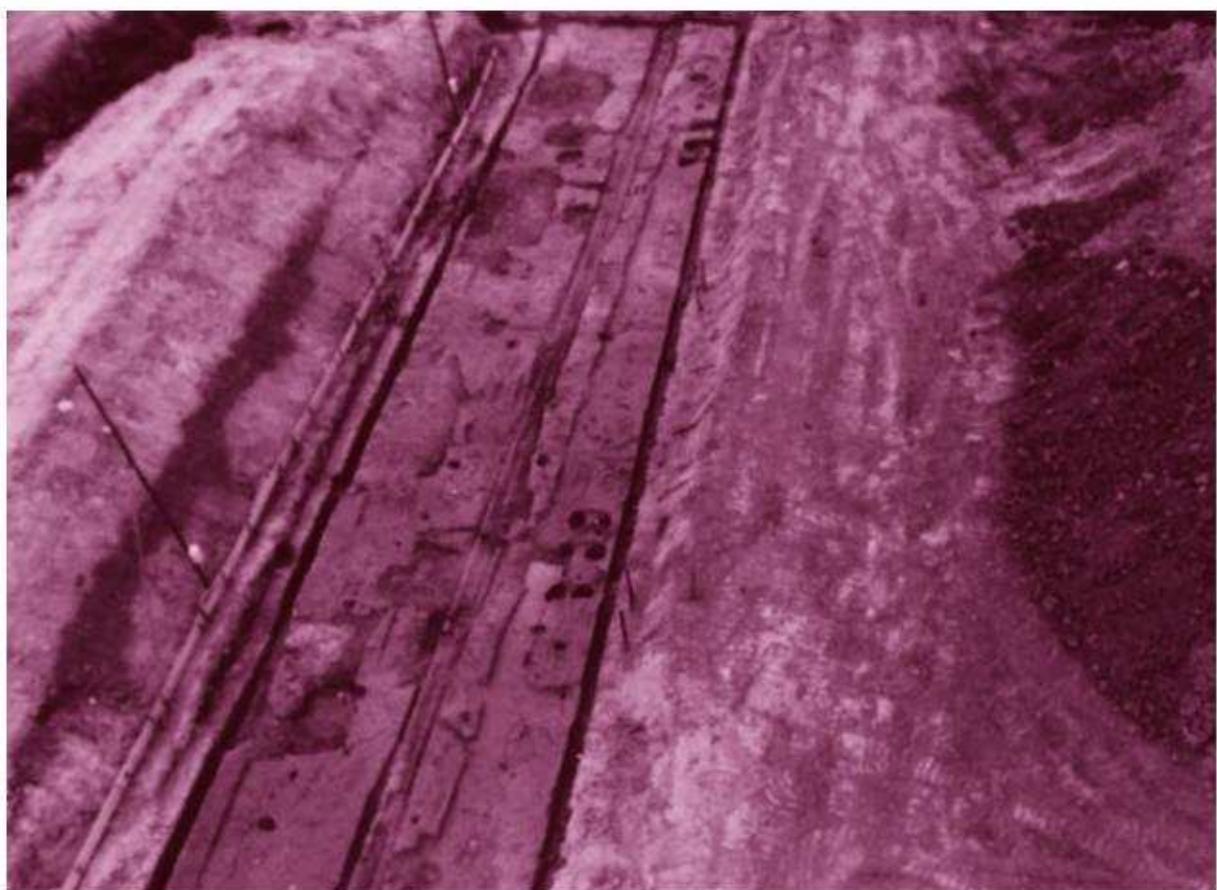
第1-2区南半部（北より）



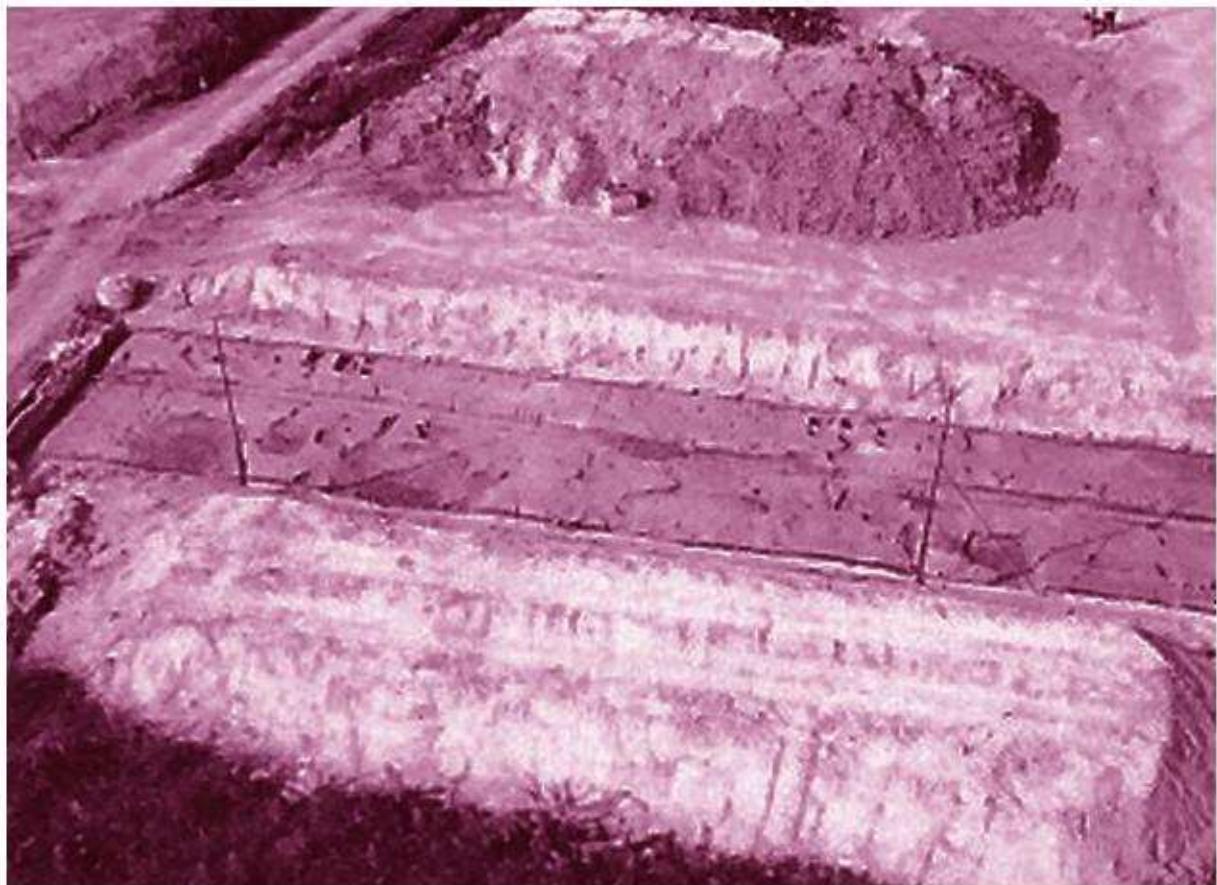
第1-3区南端部（北より）



第1-4区東半部（北より）



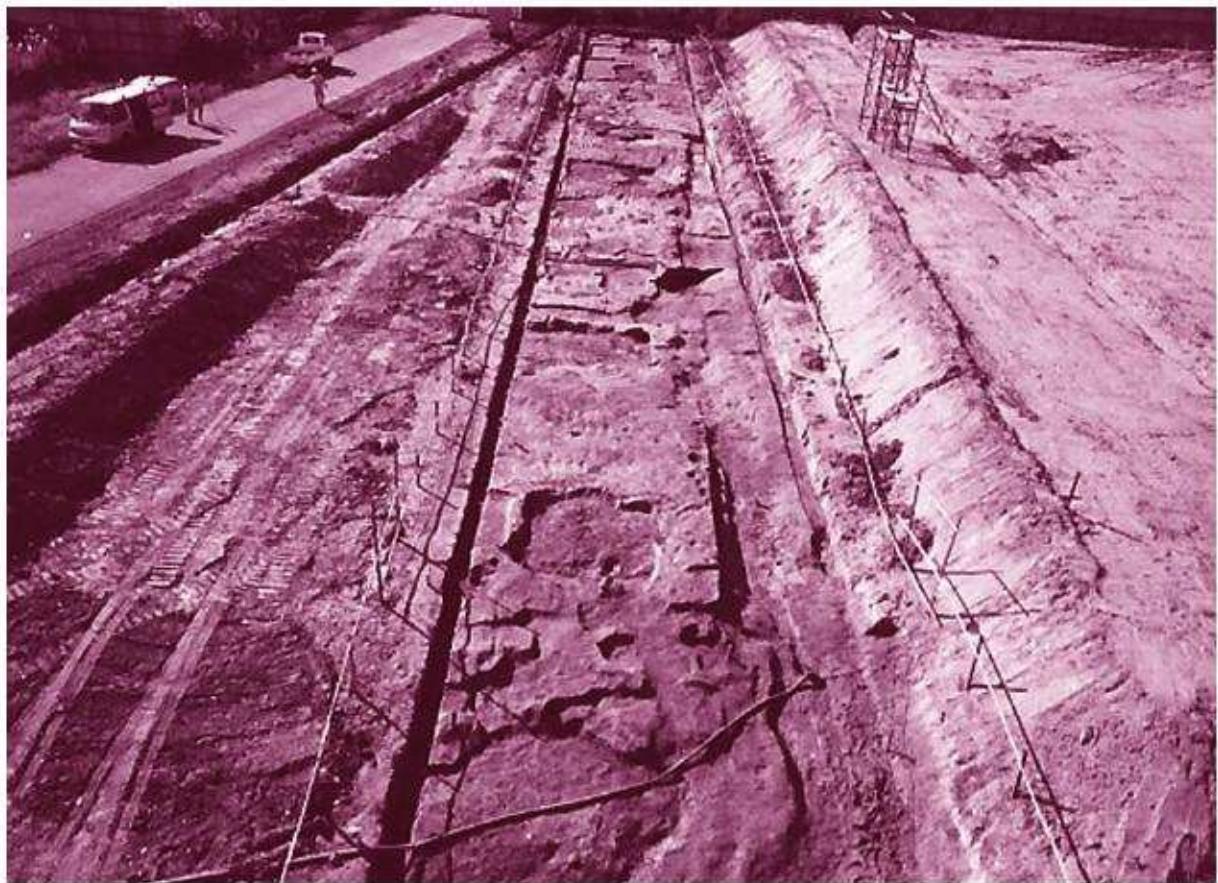
第1-4区中央部（東より）



第1-4区西半部（南より）



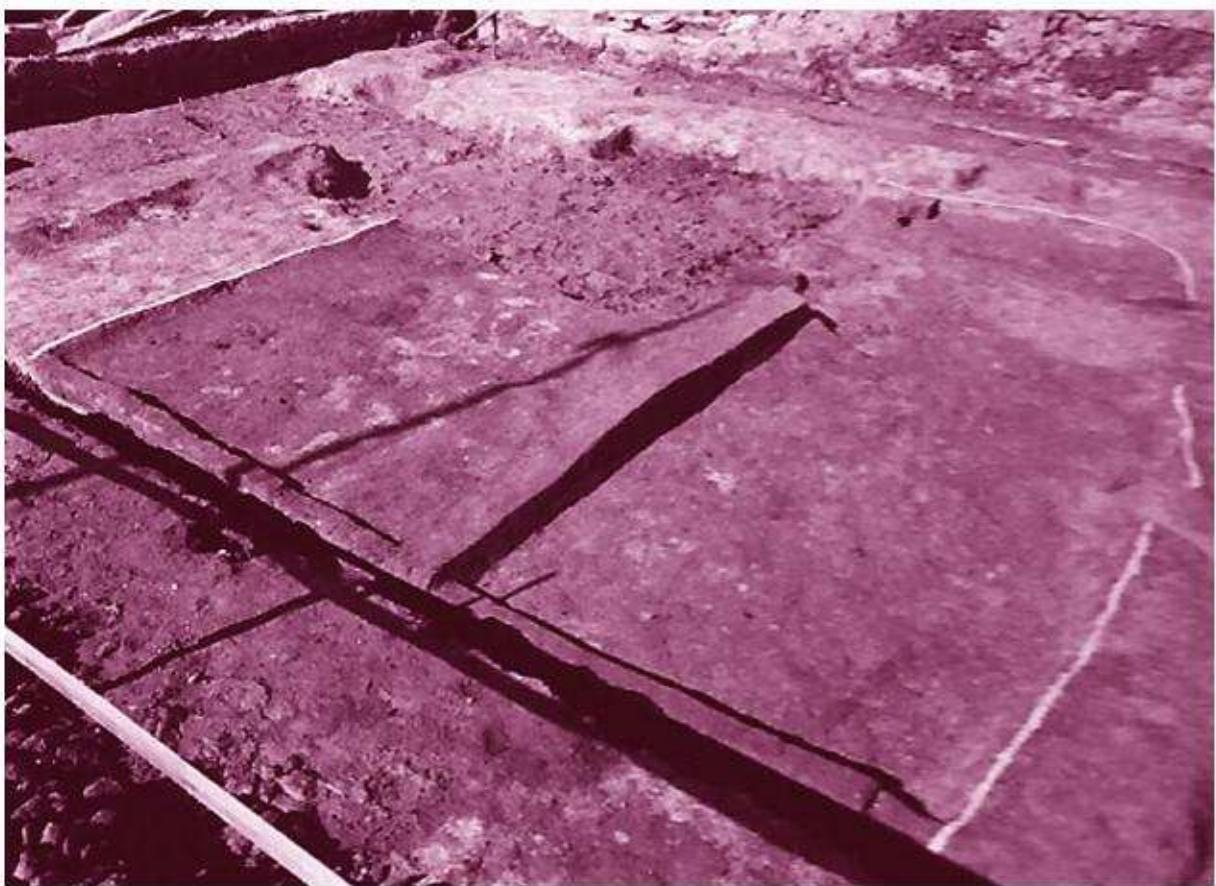
第2-1区中央部（南東より）



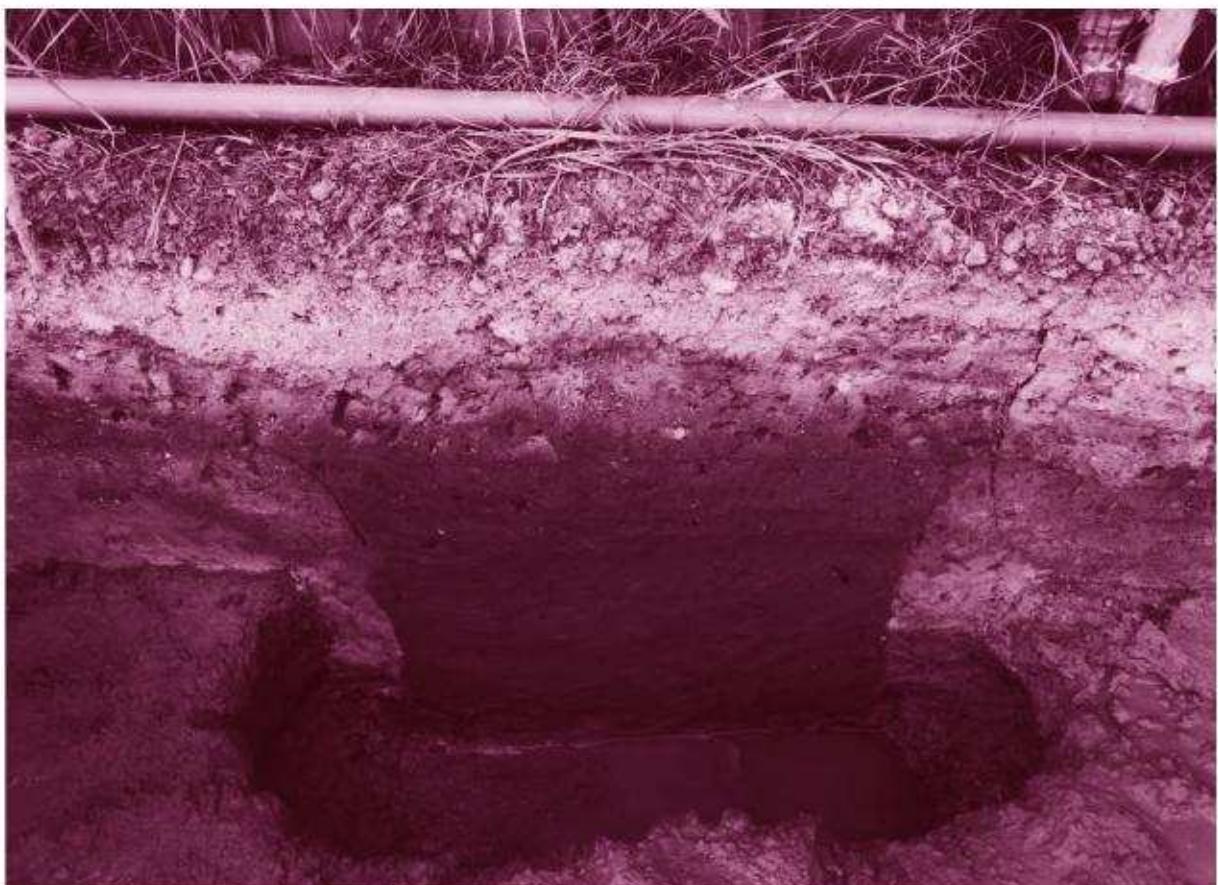
第2-1区西半部（東より）



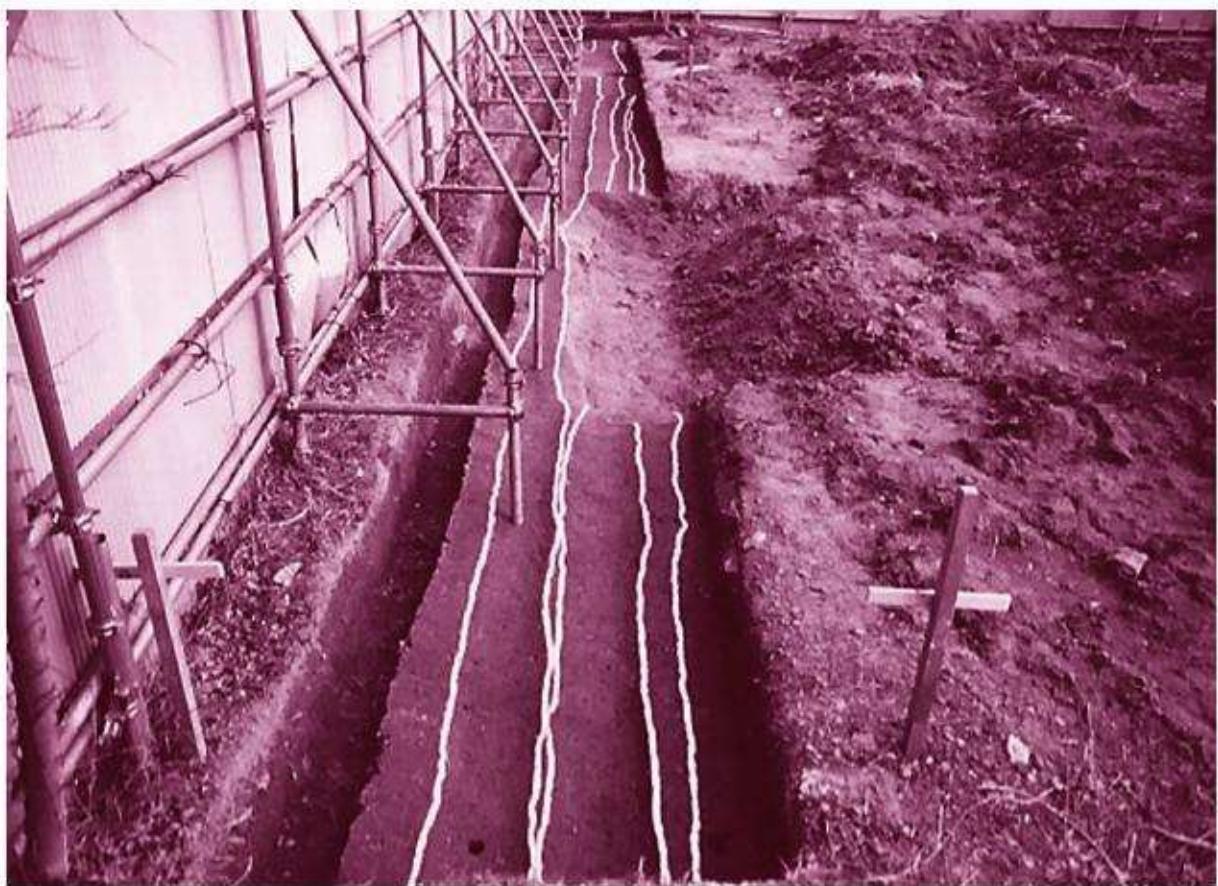
第2-1区井戸 36036（南より）



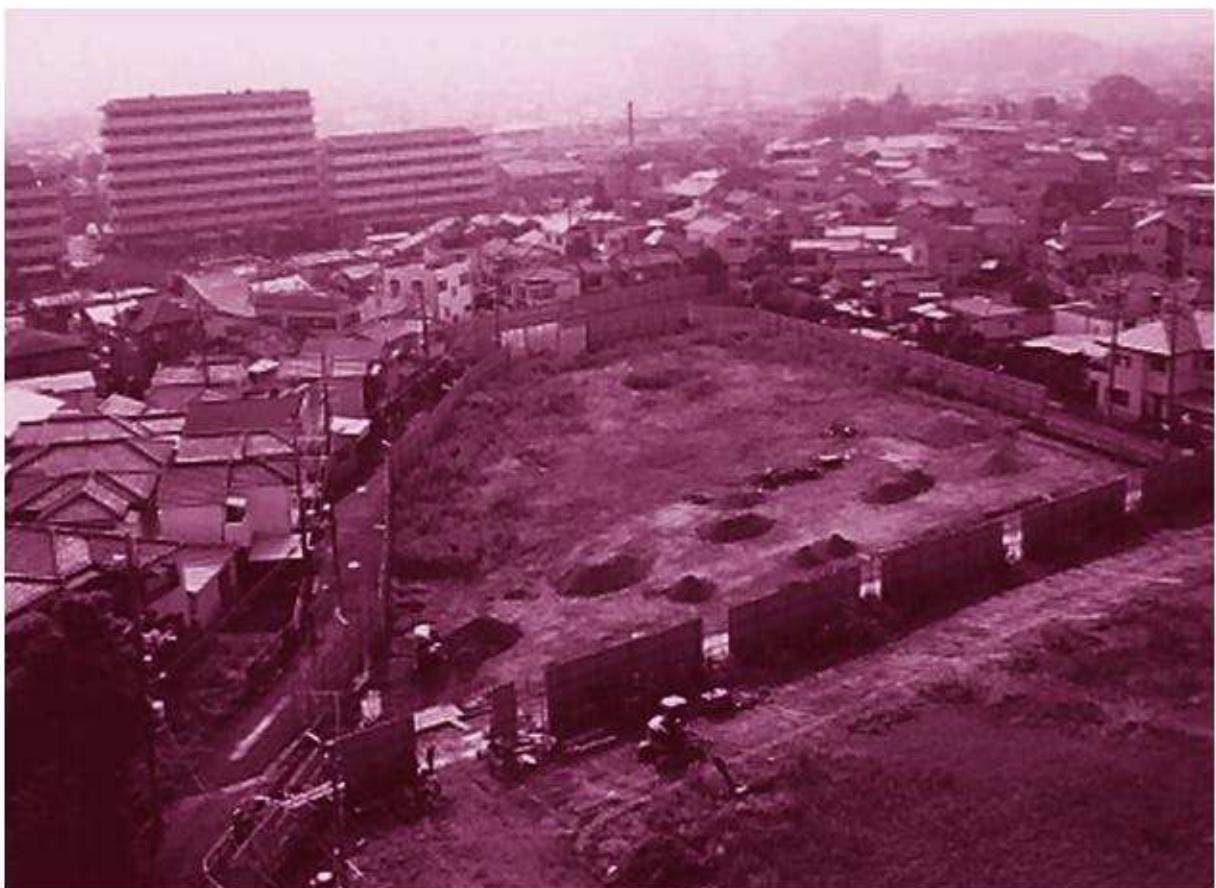
第2-1区土坑 36038（南東より）



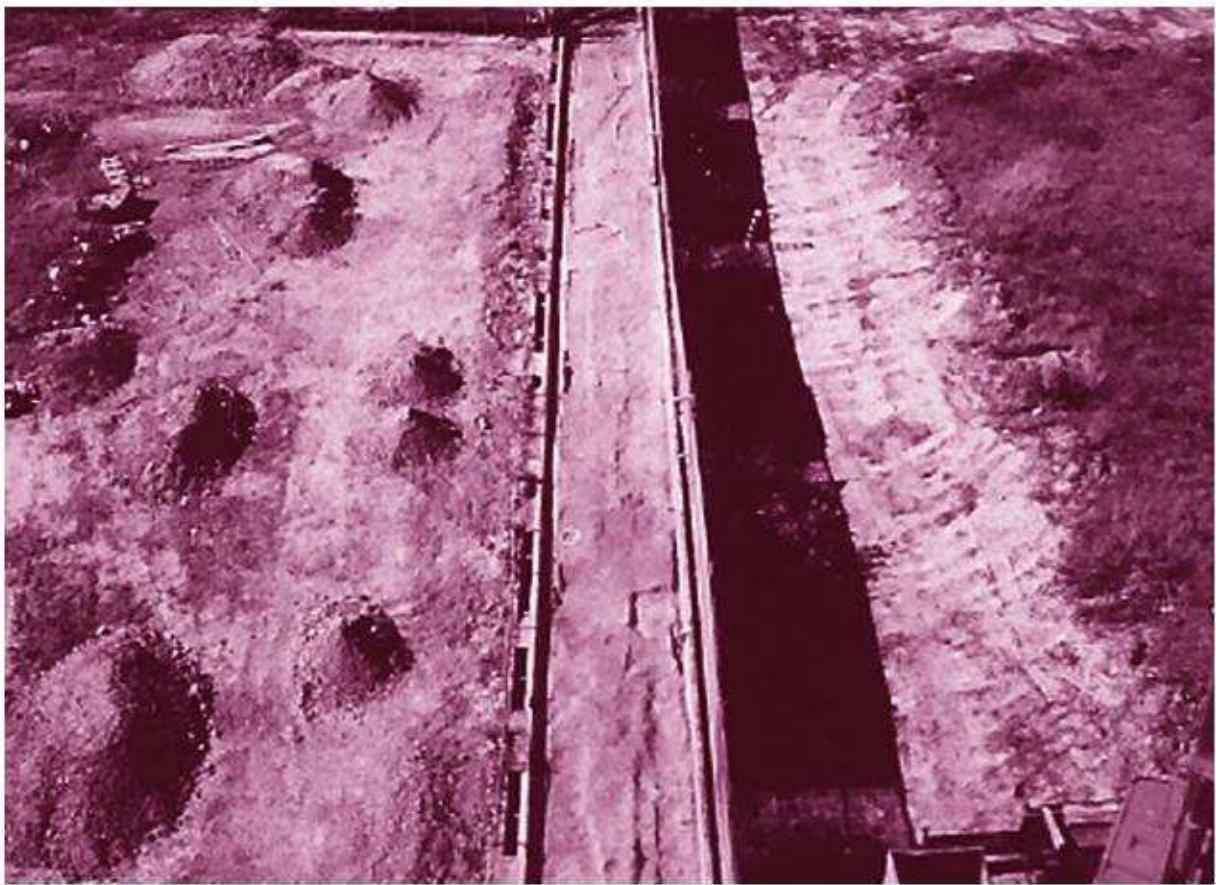
第3-1区土坑 76028断面（南より）



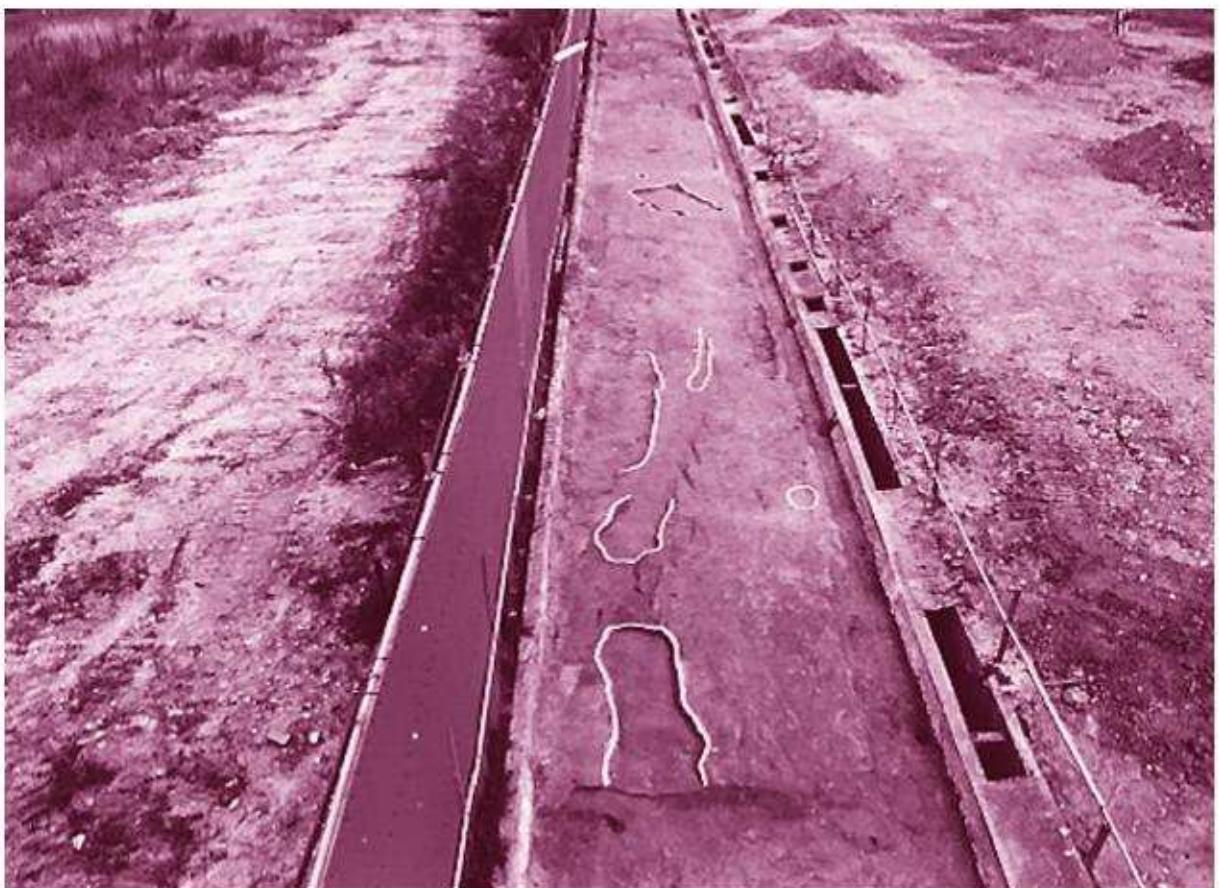
第3-5区（西より）



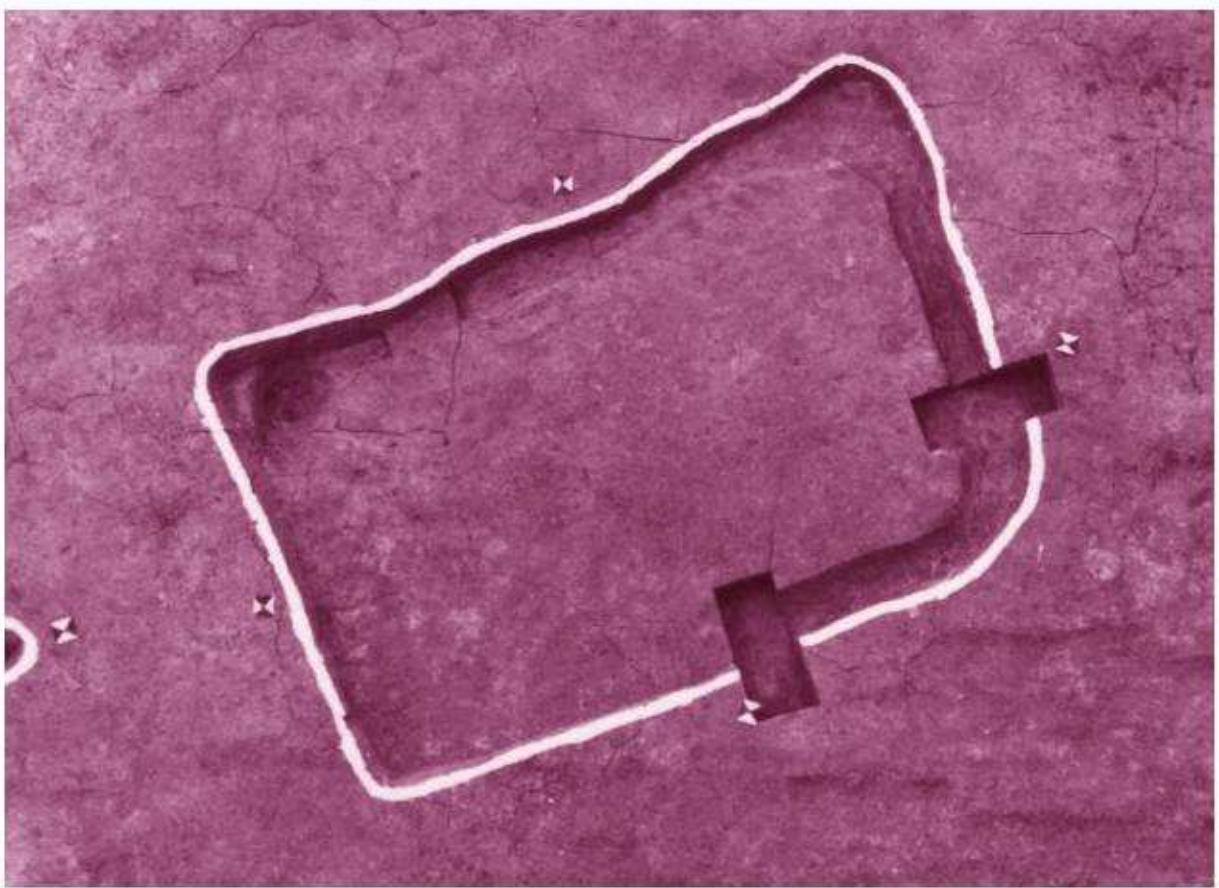
九頭神遺跡遠景（北東より）



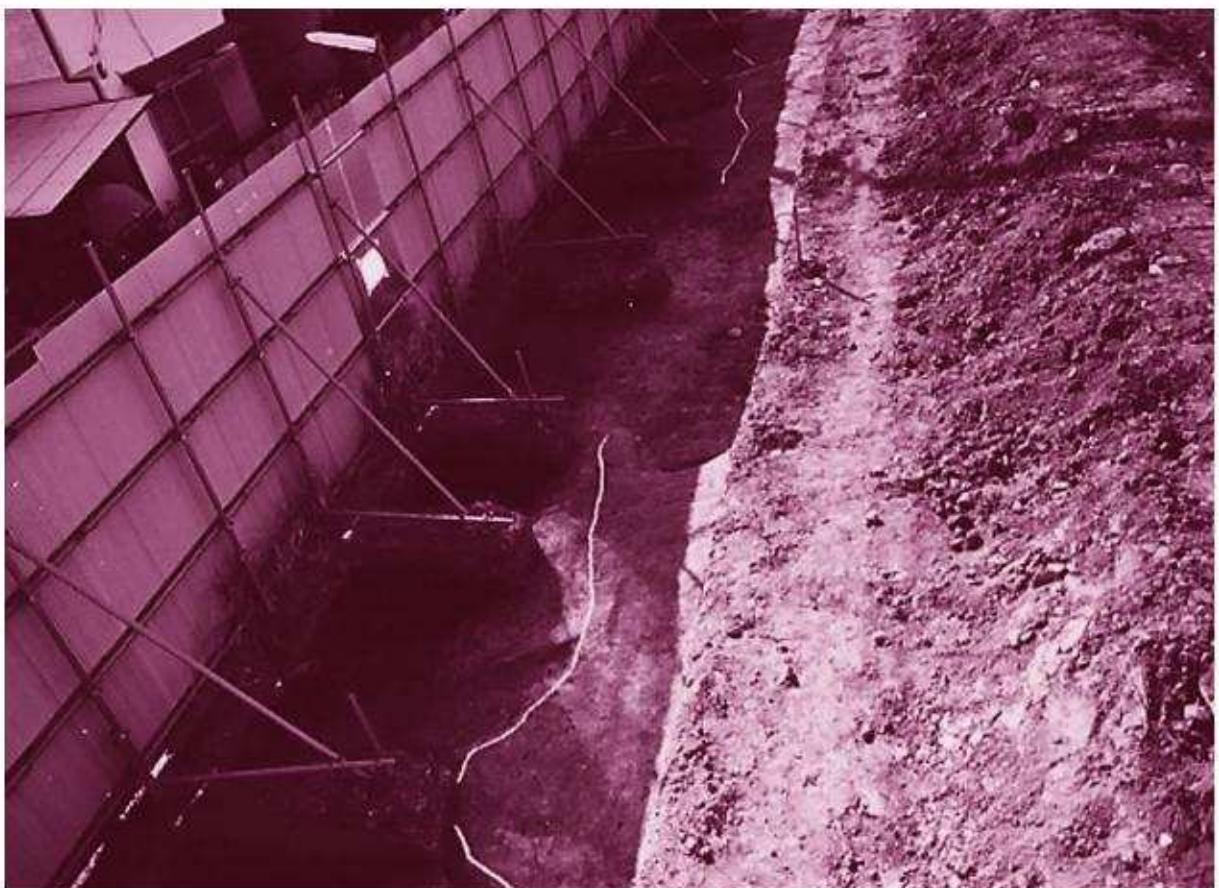
第2-2区（東より）



第2-2区(西より)



第2-2区土坑 36048(南より)



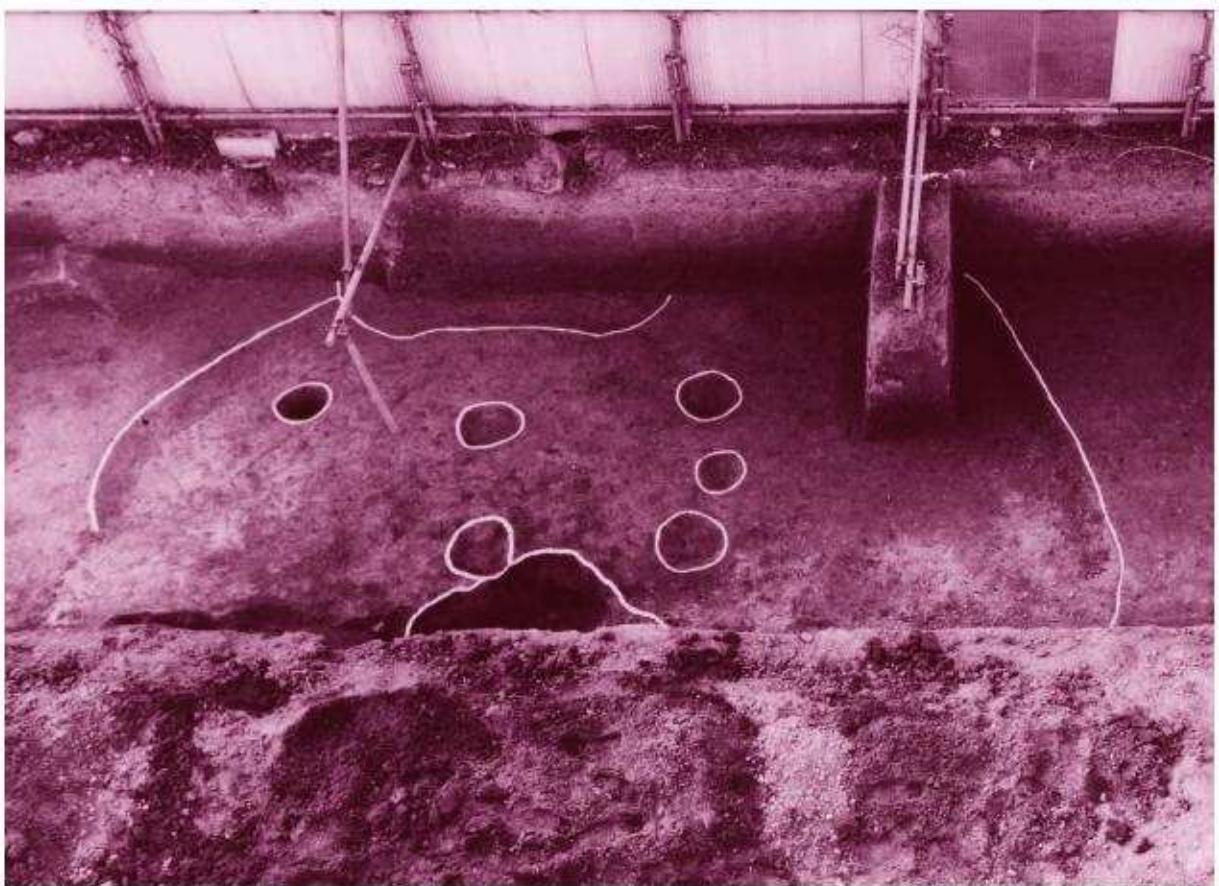
第4-2区グリッド4～9（北より）



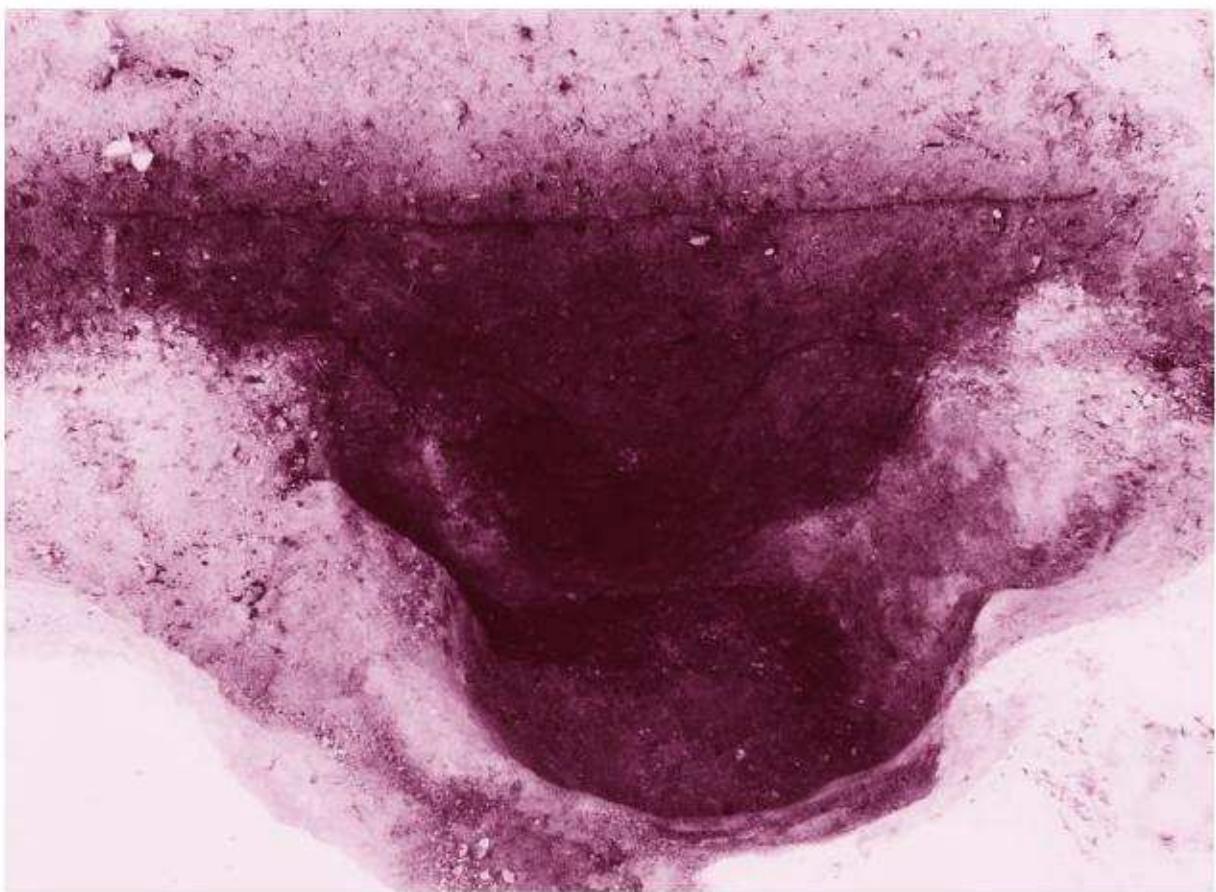
第4-2区南半東側溝（西より）



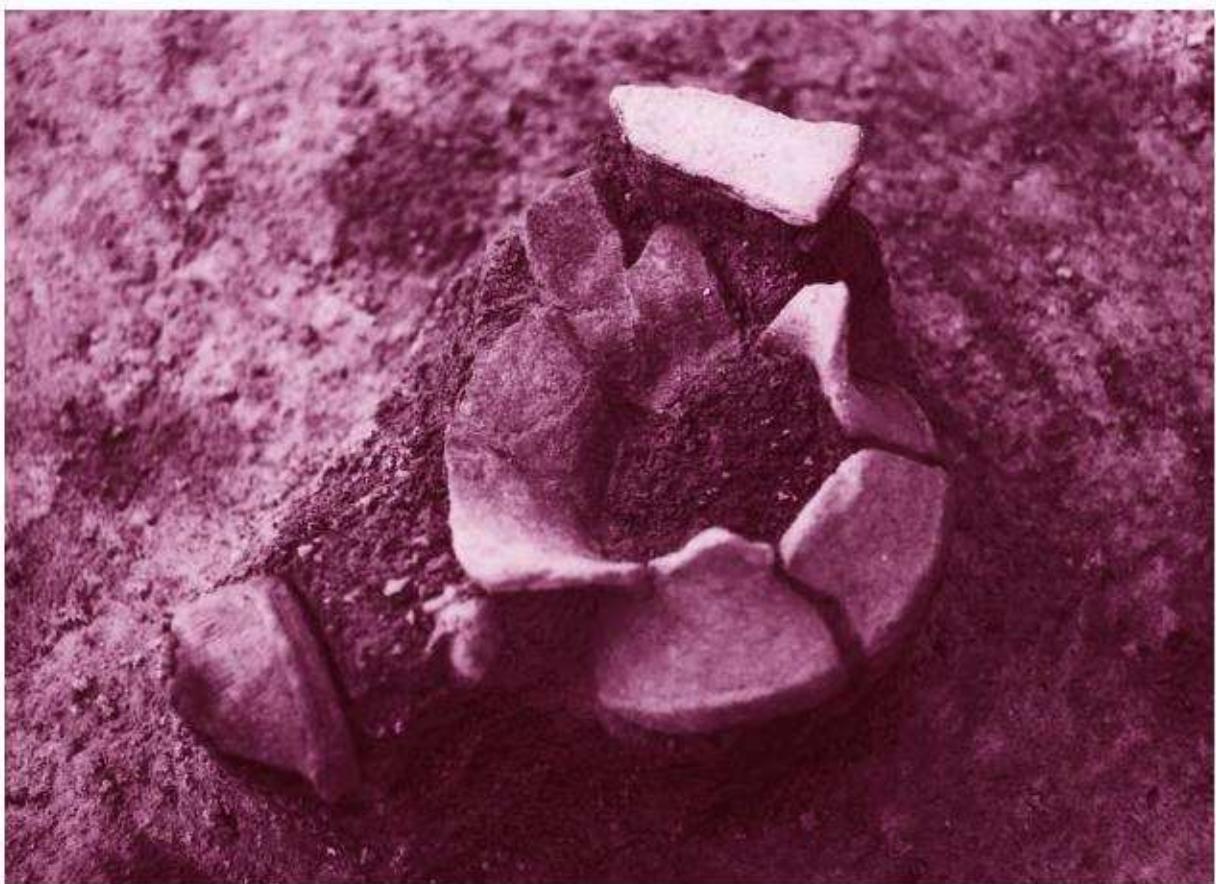
第4-2区グリッド29～32弥生時代後期遺構面(東より)



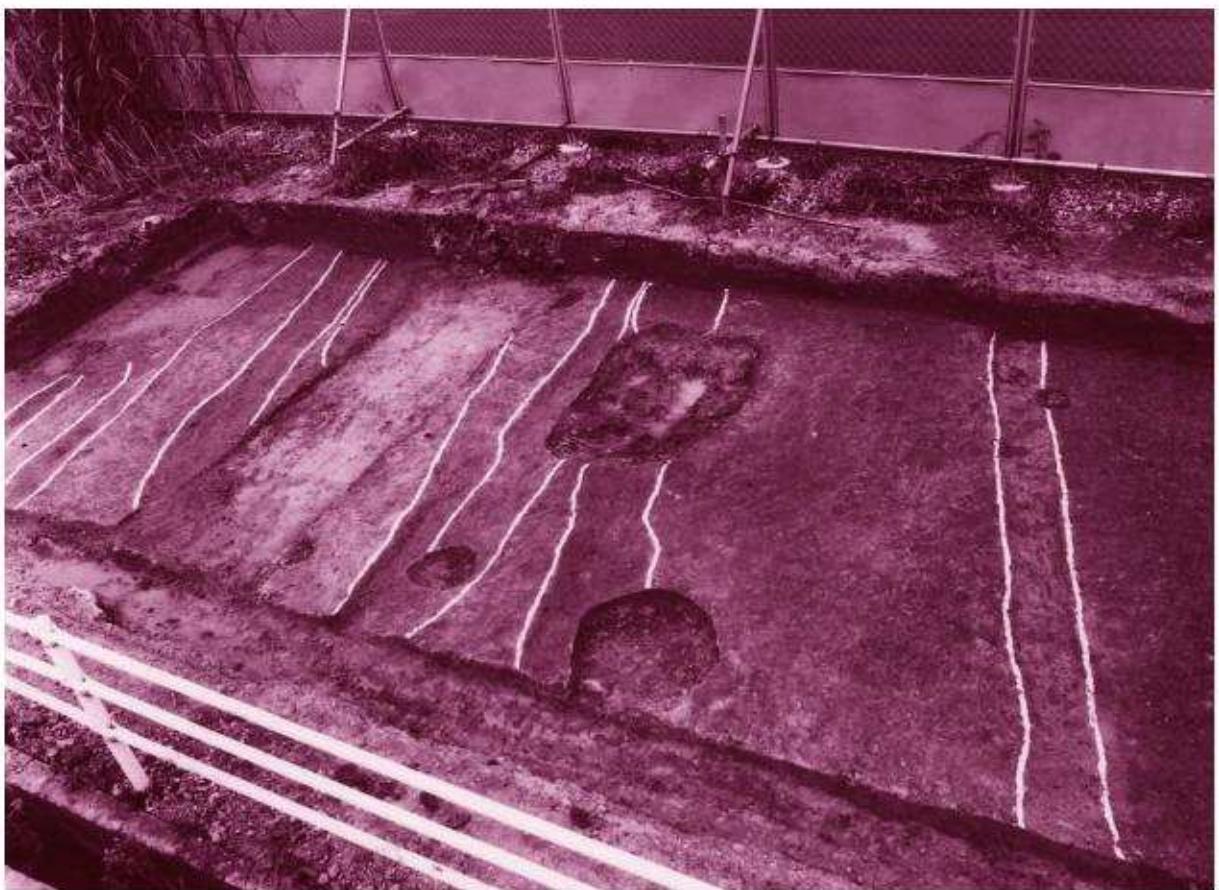
第4-2区グリッド29～31竪穴住居76009(東より)



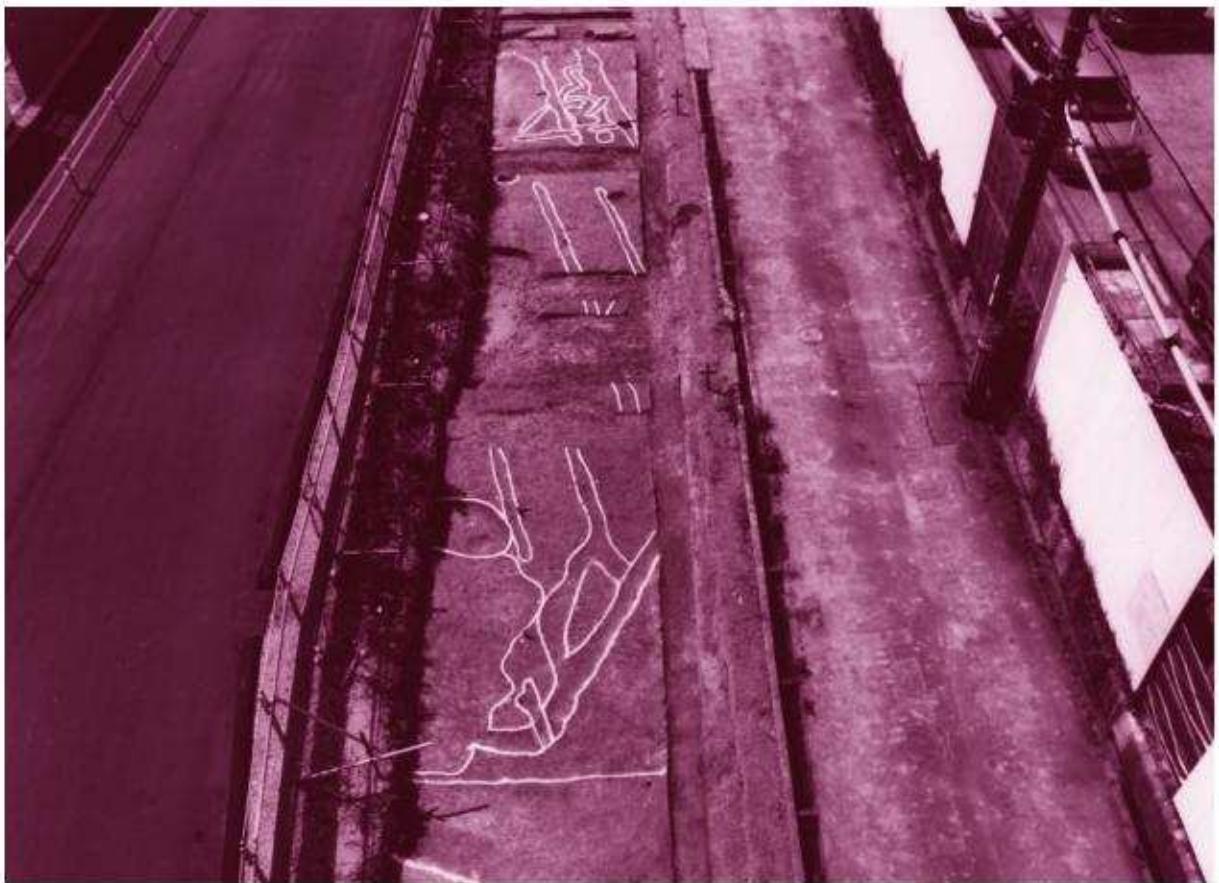
第4-2区竪穴住居 76009 炉穴 76010（西より）



第4-2区竪穴住居 76009 遺物出土状況（東より）



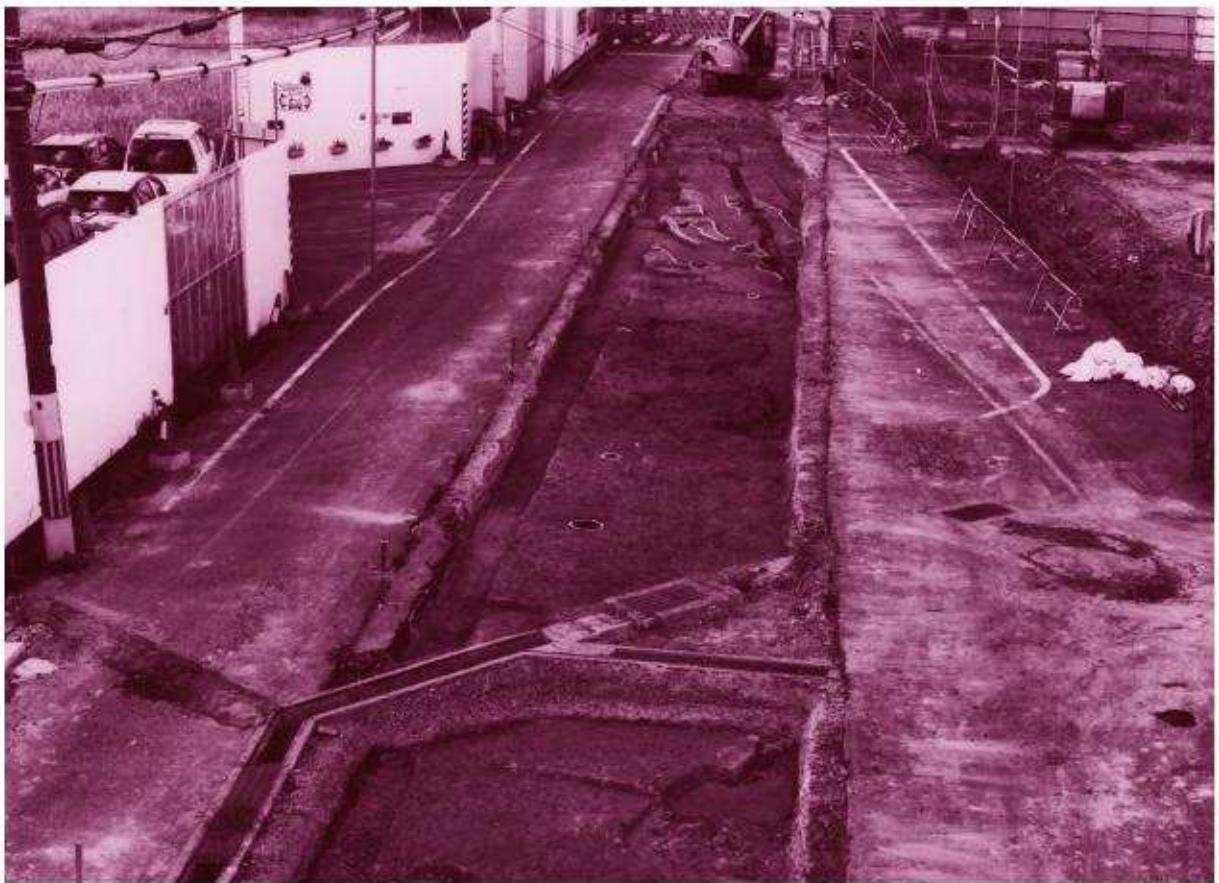
第4-2区南半部北端（西より）



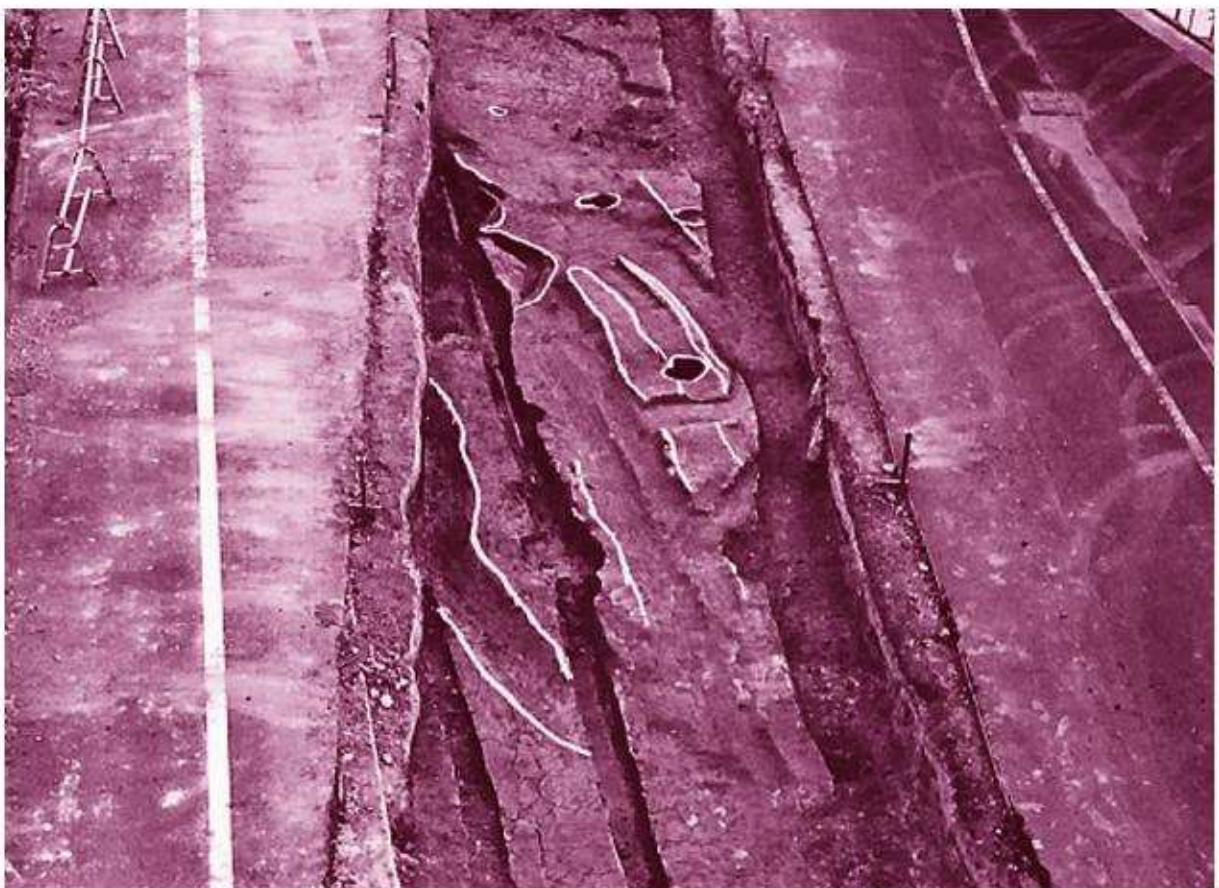
第5-4区北半部（北より）



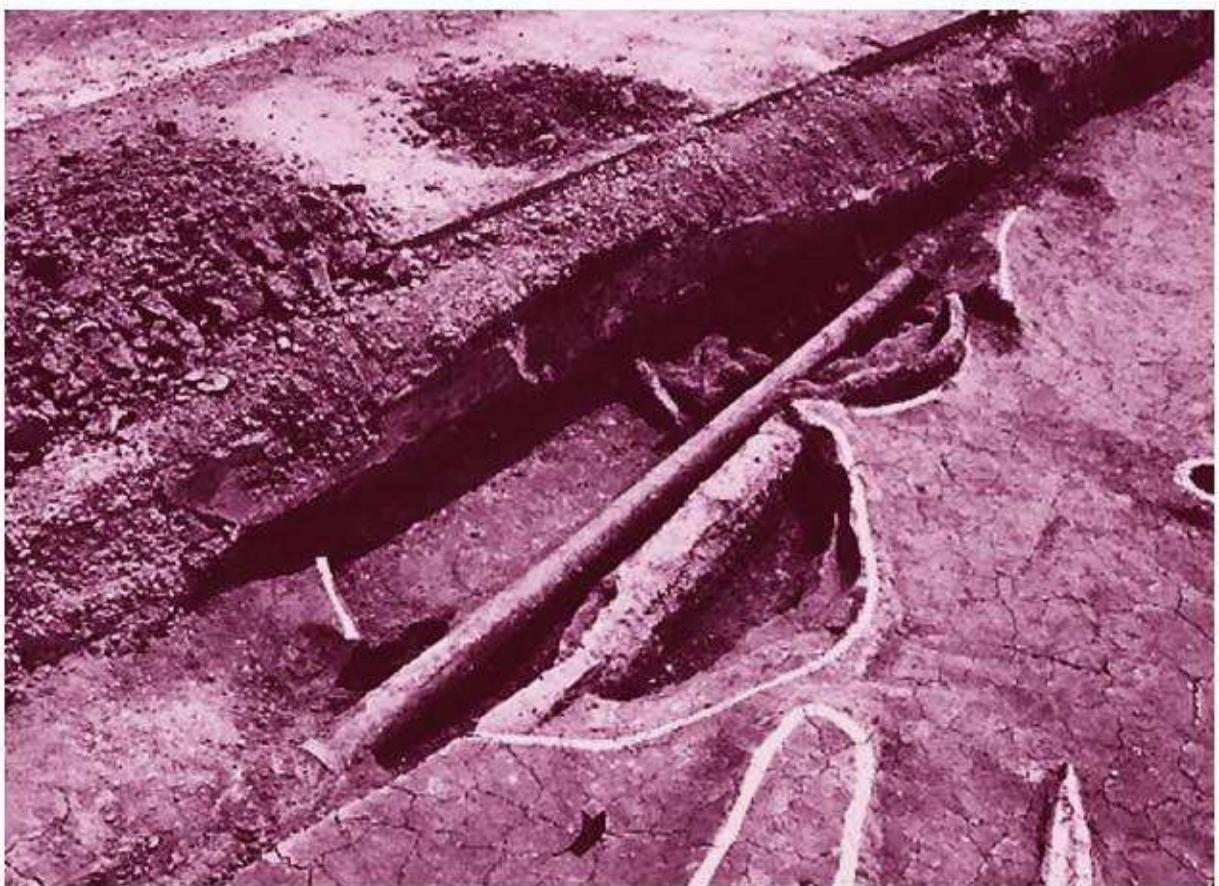
第5-4区北半部部分（北より）



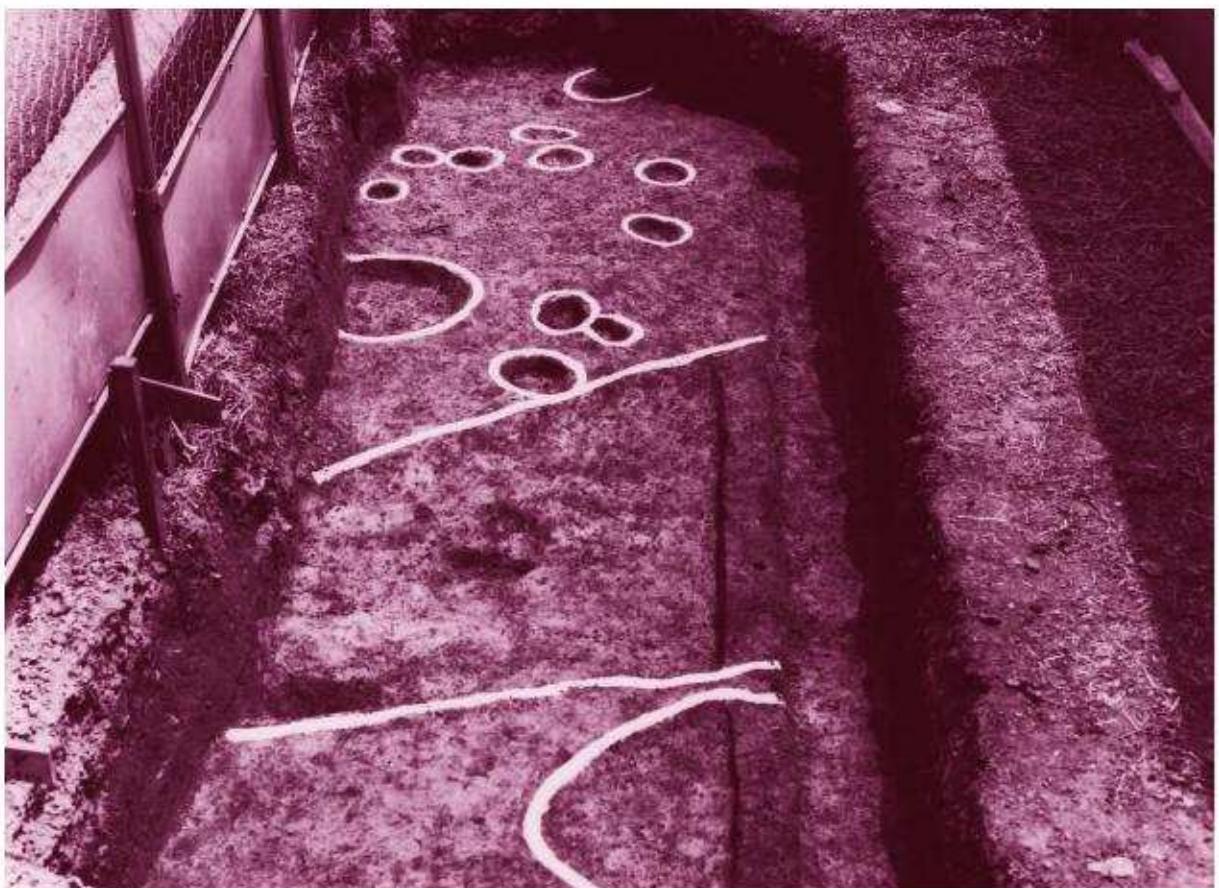
第5-5-1区（南より）



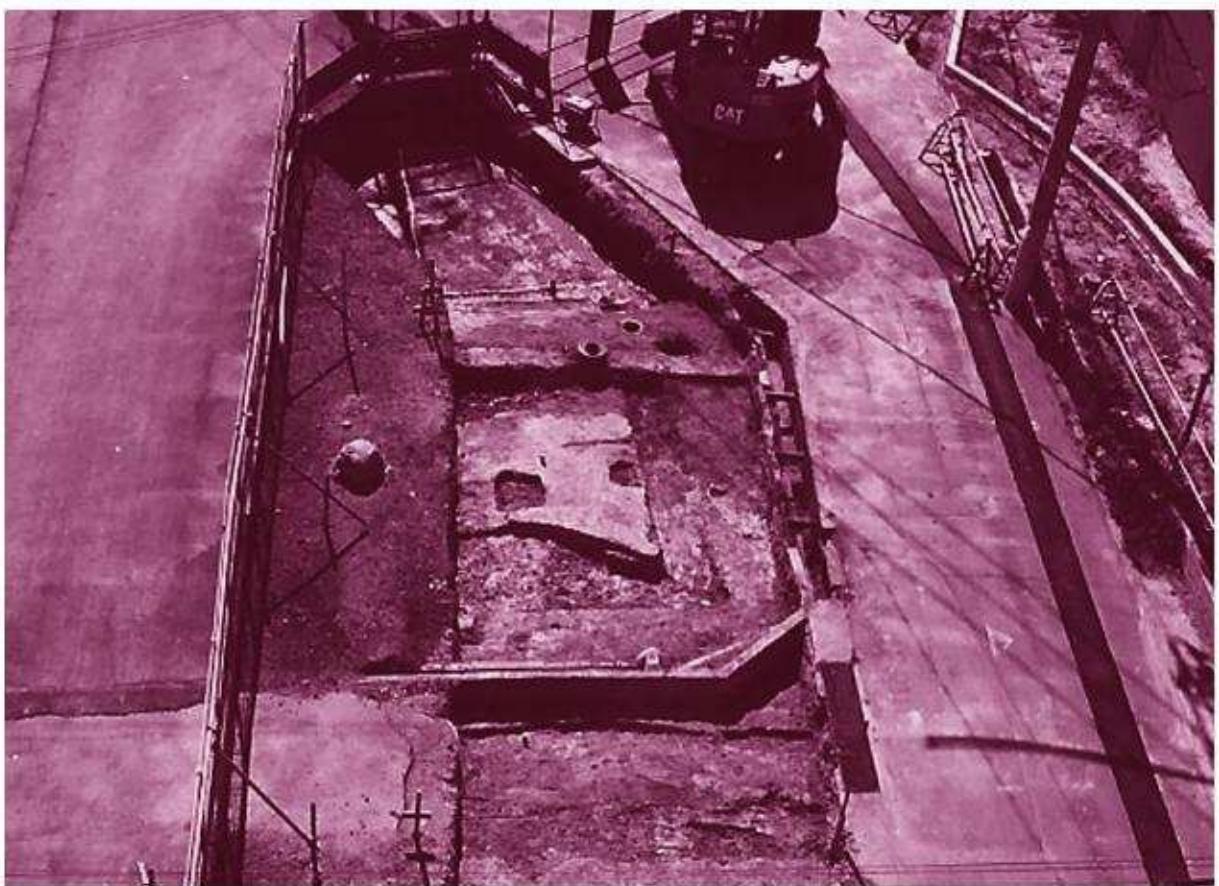
第5-5-1区南半部部分（北より）



第5-5-1区土坑12070、12071（西より）



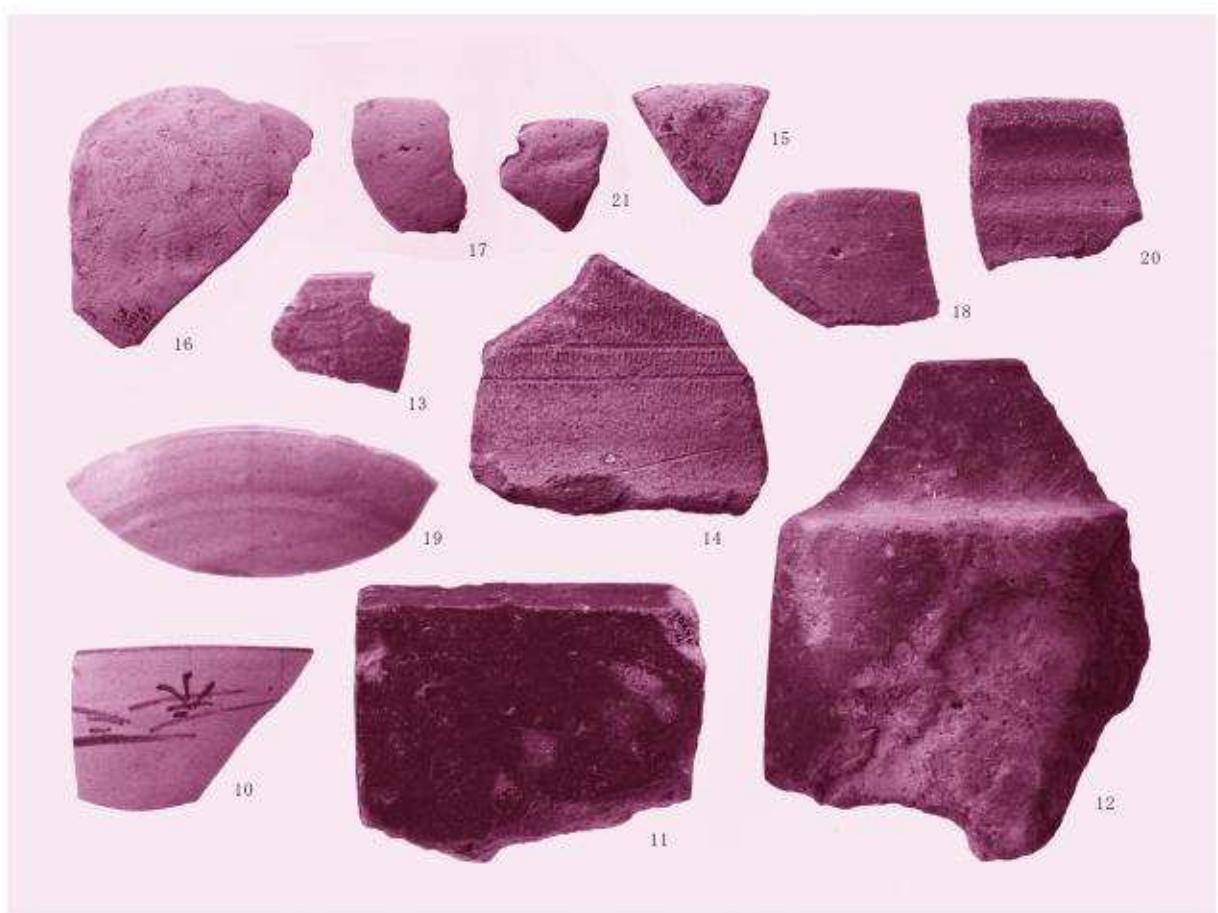
第5-5-3区（西より）



第5-2区（西より）



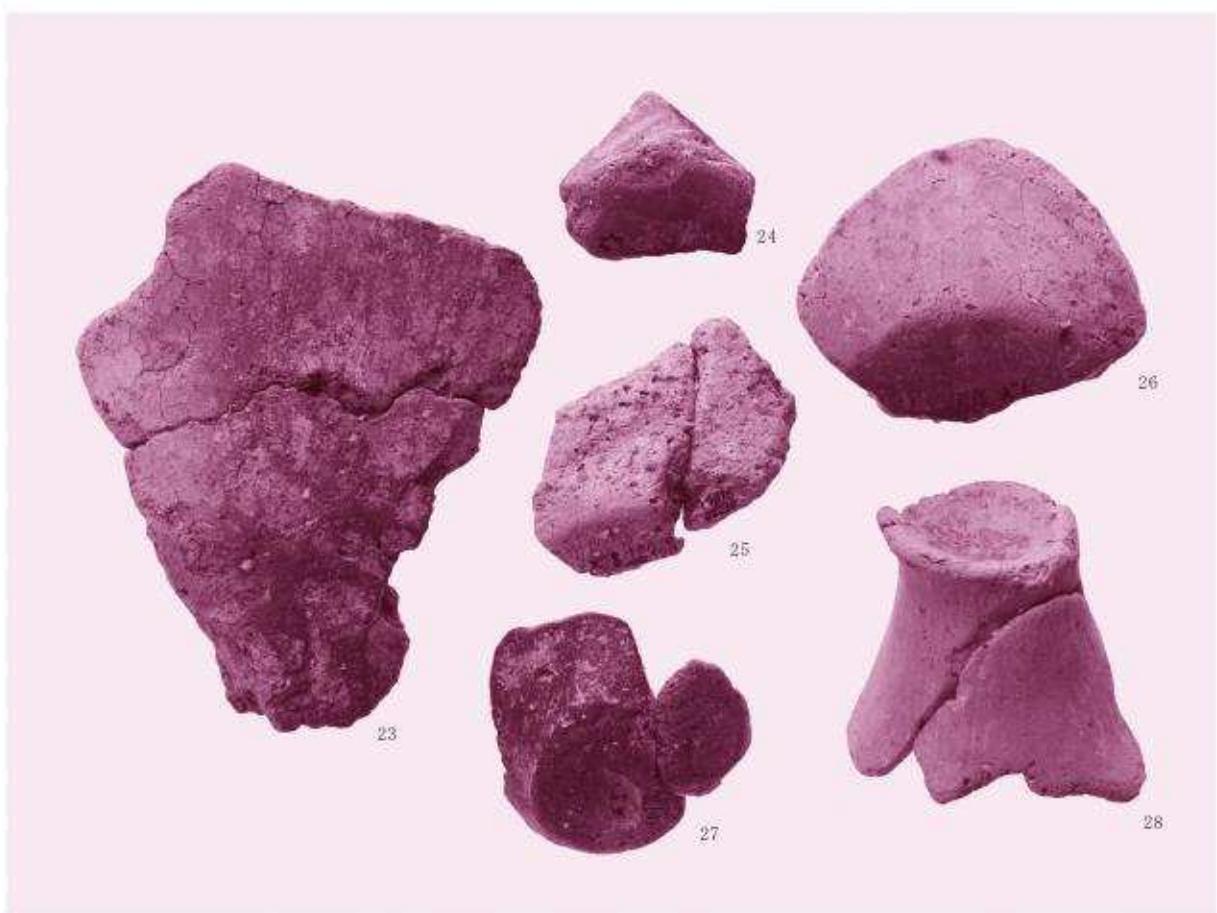
1:溝36016 2~7:土坑36038 8:谷36054 9:溝36056



10~18:包含層 19~21:土坑36038



22: 壺穴住居76009



22～26: 壺穴住居76009 27・28: 壺穴住居76009 穢土上層



29

29: 壁穴住居76009 炉穴内

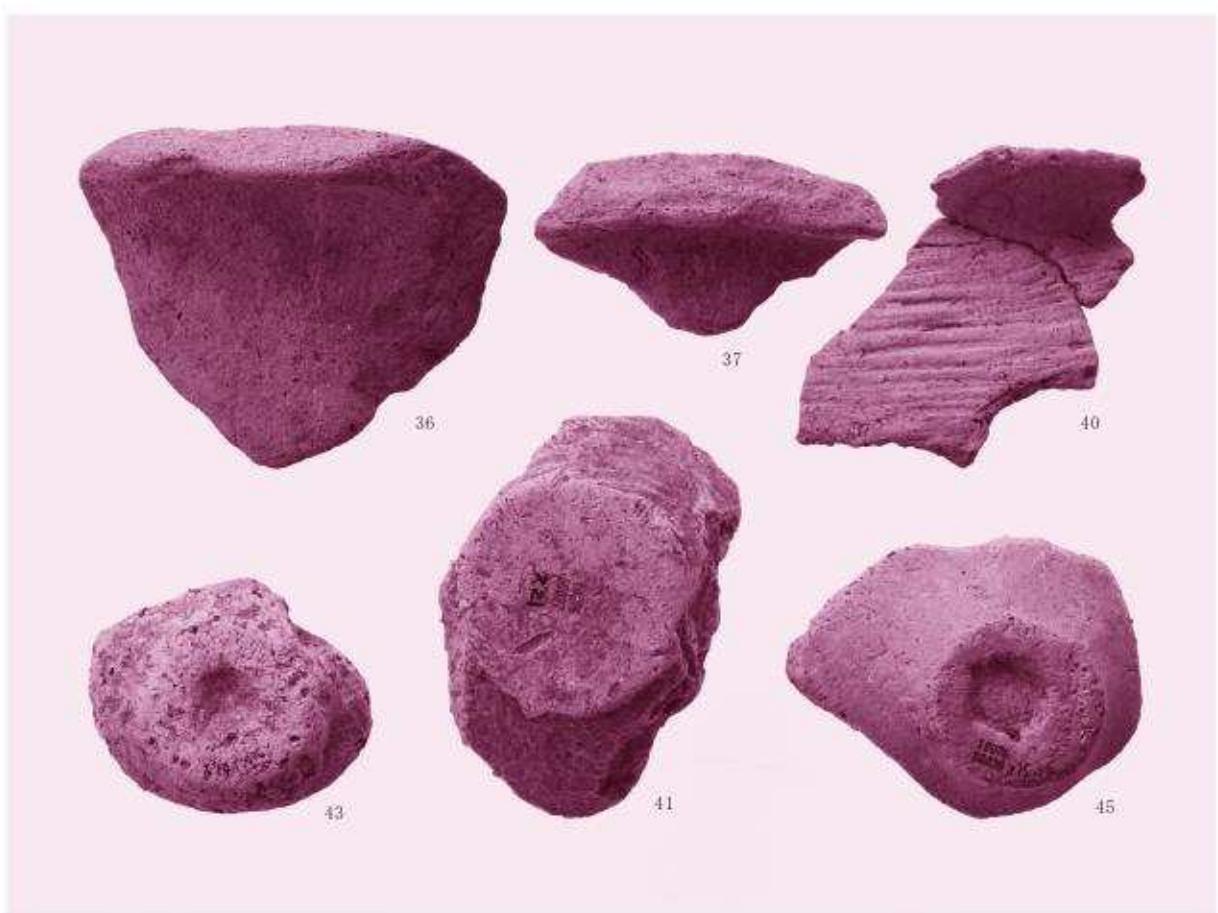


30

30: 土坑76007



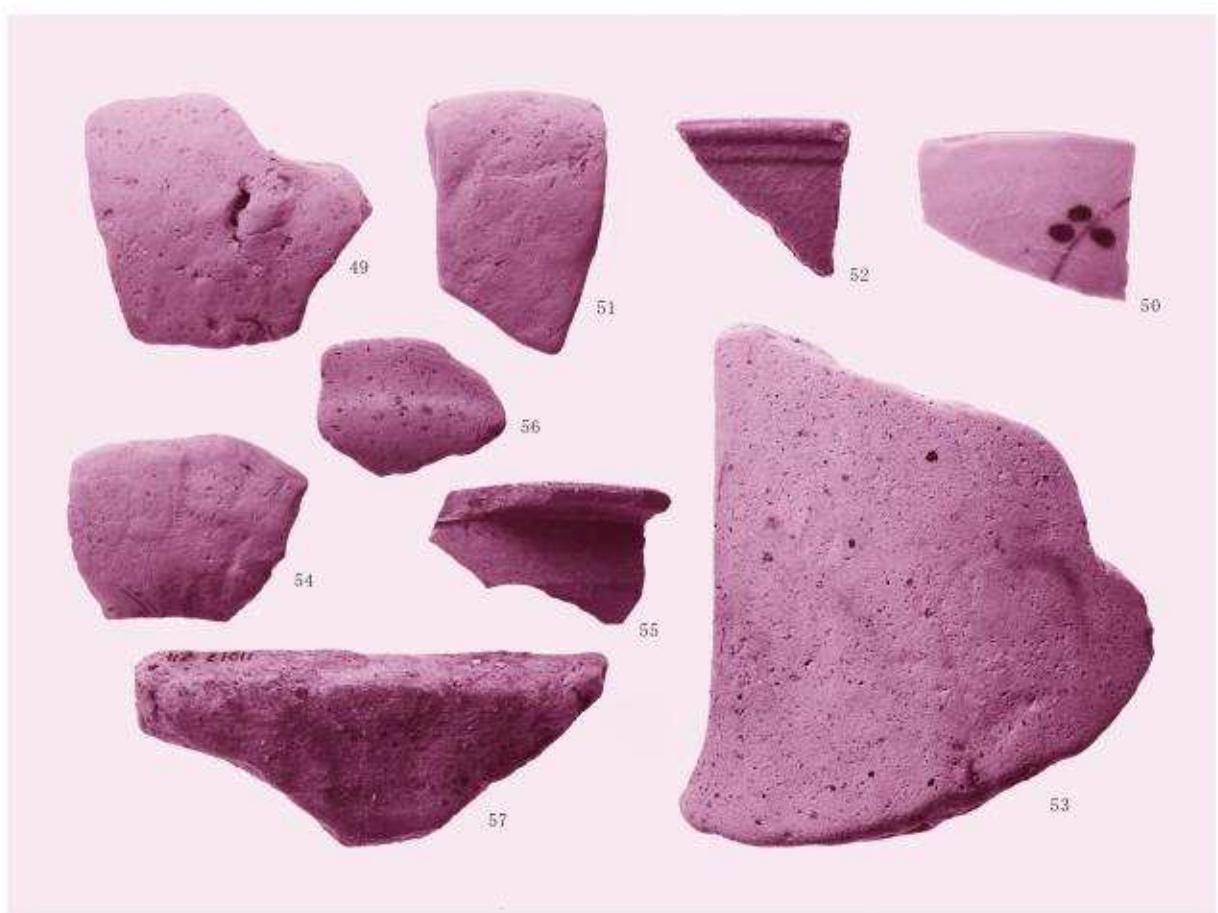
31・32:土坑76007 33:溝76005 33・34:ピット76008



36・37・40・41・43・45:谷76004



46:谷76004直上 47:ピット76069 48:谷76004



49:土坑12021 50~53:谷12002 54~57:包含層

報 告 書 抄 錄

大阪府埋蔵文化財調査報告 2012 - 1
招提中町遺跡IV・九頭神遺跡II

—府営枚方東牧野住宅建替第5期工事及び周辺道路整備事業に伴う発掘調査—

発 行 大阪府教育委員会

〒 540-8571 大阪市中央区大手前2丁目

TEL 06-6941-0351 (代表)

発行日 平成25年3月31日

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

〒 537-0002 大阪市東成区深江南2丁目6番8号